# 波佐

《島根県那賀郡金城町波佐地区における考古学的調査》

1994年3月

金城町教育委員会

# 正　誤　表

| ページ | 誤 | 正 |
|---|---|---|
| v | 第37図　F－3，F－4，F－5区出土土器実測図 | F区～I区出土土器実測図 |
| | 第38図　F－3，F－4，F－5区出土土器実測図 | F区～I区出土土器実測図 |
| | 第39図　F－3，F－4，F－5区出土陶磁器実測 | F区～I区出土陶磁器実測図 |
| viii | PL.24上段　F－3，F－4，F－5区出土土器 | F区～I区出土土器 |
| | 下段　F－3，F－4，F－5区出土土器 | F区～I区出土土器 |
| | PL.25上段　F－3，F－4，F－5区出土土器 | F区～I区出土土器 |
| | 下段　F－3，F－4，F－5区出土土器 | F区～I区出土土器 |
| | PL.26上段　F－3，F－4，F－5区出土土器 | F区～I区出土土器 |
| | 下段　F－3，F－4，F－5区出土陶磁器 | F区～I区出土陶磁器 |
| xi | 第15表　（F－3，F－4，F－5区） | （F区～I区） |
| xiv | 33段目　可計高校 | 加計高校 |
| 1 | 3段目　島根県那賀郡金城町（なかぐん　かなぎちょう） | 島根県那賀郡金城町（なかぐん　かなぎちょう） |
| | 5段目　国道189号線 | 国道186号 |
| | 6段目　浜田八重可部線が南北に | 東西に |
| 15 | 12段目　隅田正一氏 | 隅田正三氏 |
| 47 | 左40段目　イ）D1号 | イ）1号墳 |
| 117 | 第37図　F－3，F－4，F－5区出土土器実測図 | F区～I区出土土器実測図 |
| 118 | 第38図　F－3，F－4，F－5区出土土器実測図 | F区～I区出土土器実測図 |
| 119 | 第39図　F－3，F－4，F－5区出土陶磁器実測 | F区～I区出土陶磁器実測図 |
| 121 | 第15表　（F－3，F－4，F－5区） | （F区～I区） |
| 141 | 21段目　七(1)渡瀬遺跡群 | 七渡瀬遺跡群 |
| 180 | PL.24上段　F－3，F－4，F－5区出土土器 | F区～I区出土土器 |
| | 下段　F－3，F－4，F－5区出土土器 | F区～I区出土土器 |
| 181 | PL.25上段　F－3，F－4，F－5区出土土器 | F区～I区出土土器 |
| | 下段　F－3，F－4，F－5区出土土器 | F区～I区出土土器 |
| 182 | PL.26上段　F－3，F－4，F－5区出土土器 | F区～I区出土土器 |
| | 下段　F－3，F－4，F－5区出土陶磁器 | F区～I区出土陶磁器 |
| 190 | 左44段目　（司計高校 | （加計高校 |
| 194 | 右10段目　（司計高校 | （加計高校 |
| 223 | 1段目文頭　らかな | 明らかな |
| 258 | 26段目　下地（げち） | 地下（ちげ） |

金城町長田地区全景（撮影：隅田正三氏）

# 序　　文

金城町教育委員会では、『波佐多目的集会施設』の建設に先立ちまして平成3年度より約2年間、「七渡瀬Ⅱ遺跡」の発掘調査を行いました。

この調査により、古代の住居址や様々な土器（縄文～中世）を発掘いたしました。

また、「千年比丘古墳群」は町史編纂に役立てるため、平成2年度より発掘計画をたててまいりました。中でも、「千年比丘1号墳」は県内でもまれな古墳であることがわかりました。

特に、「七渡瀬Ⅱ遺跡」は古代から波佐の中心的役割をもった遺跡と同時に、「波佐多目的集会施設」も現代の波佐の中心的役割をもっています。

これからも、先人たちの文化・伝統を大事にしていきたいと思っています。

おくれましたが、「七渡瀬Ⅱ遺跡」において「波佐多目的集会施設」建設に伴う設計・建設の変更にご協力いただきました業者の皆様に厚く御礼いたします。

また、両遺跡の発掘調査にあたり、ご指導・ご協力いただきました関係者の皆様、地元・波佐地区の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成6年3月

金城町教育委員会

教育長　西　田　雅　俊

# 本　文　目　次

序　文 …… i

例　言 …… xiii

序　部　地域としての波佐 …… 1

1、地理的環境 …… 1

2、歴史的環境 …… 2

3、調査に至る経緯と調査の概要及び地域史研究上の課題 …… 12

第Ⅰ部 七渡瀬Ⅱ遺跡の調査 …… 17

1、七渡瀬Ⅱ遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 17

2、調査の経過 …… 28

(1)試掘調査 (1992年3月) …… 28

(2)第1次調査(1992年7月～8月) …… 35

(3)補足調査 (1992年11月～12月) …… 59

(4)第2次調査(1993年3月～6月) …… 63

3、調査の成果（検出遺構と出土遺物） …… 71

(1)第1号住居址 …… 71

(2)第2号住居址 …… 81

(3)第3号住居址 …… 92

(4)B-2～B-3中間区，B-3区 …… 103

(5)ピット群 …… 104

(6)石墨状遺構 …… 126

(7)七渡瀬Ⅱ遺跡出土の石器 …… 143

4、考　察 …… 145

(1)七渡瀬Ⅱ遺跡における集落の展開 …… 146

(2)七渡瀬Ⅱ遺跡出土土器・陶磁器の様相 …… 149

5、総　括 …… 156

第Ⅱ部　千年比丘古墳群の調査 …… 187

はじめに …… 187

1、調査の経過 …… 188

(1)発見と予備踏査 …… 188

(2)第1次調査(1991年) …… 188
(3)第2次調査(1992年) …… 190
(4)第3次調査(1993年) …… 194
2、調査の成果 …… 199
(1)1号墳 …… 199
a)調査前の観察 …… 199
b)墳丘 …… 199
c)主体部 …… 199
d)遺物 …… 209
e)小結 …… 210
(2)その他の墳墓、遺構の確認調査 …… 211
a)A 区の調査 …… 211
b)「2号墳」の調査 …… 212
c)B 区の調査 …… 216
3、総括 …… 220
(1)1号墳 …… 220
a)概要 …… 220
b)時期 …… 221
c)墓上祭祀 …… 221
(2)その他の調査区 …… 228
(3)まとめ …… 228

第Ⅲ部 波佐・長田地区の歴史を探る …… 247
1、波佐・長田地区の遺跡案内 …… 247
2、七渡瀬の昔の「むら」跡と千年比丘古墳を掘ってわかったこと …… 251
3、七渡瀬遺跡調査の思い出 …… 255
4、金城町波佐の歴史 …… 257
5、千年比丘（出家して一定の戒を受けた男子）に関連して …… 259
6、波佐多目的集会施設（ときわ会館の概要） …… 260

# 挿　図　目　次

## 第Ⅰ部　挿図目次

挿図タイトルの後に実測者名〔トレース者名〕(協力者名) を付した


第1図　金城町波佐地区の位置　大谷 …… 1

第2図　金城町主要遺跡分布図　久保谷（細田）…… 3.4

第3図　七渡瀬Ⅱ遺跡と周辺の地形（圃場整備前）　大谷 …… 18

第4図　波佐・長田地区の遺跡　久保谷 …… 20

第5図　七渡瀬Ⅰ・Ⅱ遺跡の位置　久保谷（上原）…… 21

第6図　試掘調査土層断面図（東西方向）　大谷 …… 23.24

第7図　試掘調査土層断面図（南北方向）　大谷 …… 25.26

第8図　試掘調査区(B–2区，B–3区)　大谷 …… 30

第9図　試掘調査区(D–4区)　大谷 …… 31

第10図　試掘調査出土土器・陶磁器実測図　埴生・増野・久保谷・大谷・上原〔細田・上原〕 … 33

第11図　B–1～2区発掘区域見取図　細田 …… 36

第12図　B–3区発掘区域見取図　細田 …… 37

第13図　C–4区発掘区域見取図　細田 …… 38

第14図　D–4区発掘区域見取図　細田 …… 40

第15–1図　B–3区平面図・ピット断面図　家塚〔細田〕…… 49

第15–2図　B–3区断面図　家塚〔細田〕…… 50

第16図　B–2～3区中間区平面図・断面図　家塚〔久保谷〕(細田) … 51

第17図　C–1区拡張区東壁土層図　竹広〔細田〕…… 60

第18図　D–1区東拡張区西壁土層図　竹広〔細田〕…… 60

第19図　D–1区東拡張区南壁土層図　竹広〔細田〕…… 61

第20図　第1・2次調査の調査区配置図　久保谷〔上原〕…… 62

第21図　G–5区，G–6区東壁土層図　竹広・久保谷〔細田〕… 66

第22図　F–5区，F–6区東壁土層図　久保谷〔細田〕…… 68

第23図　第1–a・1–b 号住居址平面図・断面図　増野・中木・松村〔細田〕… 73.74

第24図　B–2区出土土器・陶磁器実測図　埴生・増野・久保谷・松村〔細田〕…… 75

第25–1図　第2号住居址平面図・断面図　勝部・増野・久米・矢野〔細田〕…… 83.84

第25-2図　中央ピットの平面図・断面図　勝部・増野・久米・矢野（細田）　…… 83.84
第26図　C-4区出土土器実測図（その1）　埴生・増野・大谷・細田〔細田・上原〕　…… 82
第27図　C-4区出土土器・陶磁器実測図（その2）　埴生・増野・上原〔細田・上原〕　…… 89
第28図　第3号住居址平面図・断面図　田浪・矢野・勝部〔細田〕… 93
第29図　D-4区出土土器実測図（その1）　埴生・増野・上原・〔細田・上原〕　…… 94
第30図　D-4区出土土器・陶磁器実測図（その2）　埴生・増野・上原 …… 95〔細田・上原〕
第31図　F-3,F-4区ピット群平面図　久保谷〔細田〕　… 105.106
第32図　G-3区ピット群平面図　久保谷〔細田〕　…… 110
第33図　G-4区ピット群平面図　久保谷〔細田〕　…… 111
第34図　H-4区上面・下面ピット群平面図　久保谷〔細田〕　…… 112
第35図　H-4区下面ピット群平面図　久保谷〔細田〕　…… 113
第36図　I-4区ピット群平面図　埴生・増野・久保谷・… 116上原・細田〔上原・細田〕
第37図　F-3,F-4,F-5区出土土器実測図　埴生・増野・久保谷・… 117上原・細田〔上原・細田〕
第38図　F-3,F-4,F-5区出土土器実測図　埴生・増野・久保谷・… 118上原・細田〔上原・細田〕
第39図　F-3,F-4,F-5区出土土器・陶磁器実測図　埴生・増野・久保谷・… 119上原・細田
第40図　F区～I区ピット群分布図　ワールド航測〔細田〕… 125
第41図　B-2区東拡張区（B-1区）石塁状遺構実測図　勝部・家塚　…… 126
第42-1図　B-2区，ニ小区～南拡張区NSB東壁断面図　勝部・家塚　…… 127
第43図　F-5・6,G-5・6区出土土器・陶磁器実測図　埴生・増野・久保谷・… 129上原・細田〔上原・細田〕
第44図　C-1区出土土器実測図　埴生・増野・久保谷・… 133上原・細田〔上原・細田〕
第45図　C-1区出土土器・陶磁器実測図　埴生・増野・久保谷・… 134上原・細田〔上原・細田〕

第46図　D–1区，その他区の出土土器実測図　埴生・増野・久保谷・… 138
上原・細田〔上原・細田〕
第47図　B–3,C–5,D–1区出土土器・陶磁　埴生・増野・久保谷・… 139
上原・細田〔上原・細田〕
第48図　石器実測図　上原・細田 …… 144
第49図　七渡瀬Ⅱ遺跡遺構配置図　大谷・久保谷 …… 145
第50図　金属製の蓋坏とその模倣須恵器蓋坏の変遷図　増野〔上原〕 …… 153
巻末折込図　七渡瀬Ⅱ遺跡石塁状遺構平面図　（ワールド航測）

## 第Ⅱ部　挿図目次

第1図　千年比丘丘陵地形図・圃場整備前 …… 187
第2図　調査区配置図 …… 196
第3図　1号墳・A 地区・「2号墳」・B 地区測量図 …… 197.198
第4図　1号墳発掘成果図 …… 200
第5図　1号墳墳丘トレンチ実測図 …… 201
第6図　1号墳中央主体実測図 …… 202
第7図　1号墳主体部実測図 …… 203.204
第8図　1号墳中央主体土層断面図 …… 205
第9図　1号墳中央主体横断面土層の形成過程復元図 …… 206
第10図　1号墳出土土器の分布 …… 207
第11図　1号墳中央主体出土の砥石実測図 …… 208
第12図　1号墳出土土師器実測図 …… 209
第13図　A 地区・「2号墳」発掘成果図 …… 211
第14図　A 地区トレンチ実測図 …… 212
第15図　「2号墳」調査区実測図（見開き） …… 213.214
第16図　B 地区発掘成果図 …… 216
第17図　B 地区調査区実測図（見開き） …… 217.218
第18図　B 地区礫検出状況図 …… 219
第19図　B 地区出土鉄釘実測図 …… 220
第20図　弥生時代後期から古墳時代前期の墓壙上出土の礫(1) …… 222
第21図　墓壙上出土の礫(2) …… 223
第22図　弥生時代後期から古墳時代前期の墓壙上に礫をおく墳墓の分布図 …… 225
第23図　墓壙上の礫の出土状況 …… 226

# 図 版 目 次

## 第Ⅰ部　図版目次


PL.1　波佐地区の全景（大佐山より撮影）…… 157

PL.2　上段　七渡瀬Ⅱ遺跡調査前の状況（北より）矢印・千年比丘1号墳…… 158

　　下段　七渡瀬Ⅱ遺跡調査前の状況（東より）…… 158

PL.3　上段　試掘 B–1区東壁…… 159

　　下段　試掘 C–1区東壁…… 159

PL.4　上段　試掘 B–2区全景と東壁…… 160

　　下段　試掘 B–3区全景と東壁…… 160

PL.5　上段　試掘 C–2区東壁…… 161

　　中段　試掘 C–4区東壁…… 161

　　下段　試掘 C–5区東壁…… 161

PL.6　上段　試掘 D–2区東壁…… 162

　　中段　試掘 D–3区東壁…… 162

　　下段　試掘 D–4区全景と北壁…… 162

PL.7　上段　試掘 E–1区東壁…… 163

　　下段　試掘 E–4区東壁…… 163

PL.8　上段　七渡瀬Ⅱ遺跡調査区全景（南東より）…… 164

　　下段　七渡瀬Ⅱ遺跡調査区全景（北より）…… 164

PL.9　上段　C–1区 NS–B 断面（西より）…… 165

　　下段　C–1区縄文晩期土器検出状態…… 165

PL.10 上段　1号住居址 NS–B セクション南半分（東より）…… 166

　　下段　1号住居址全景（東より）…… 166

PL.11 上段　1–b 号住居址かまど…… 167

　　下段　石墨状遺構・B 区（東より）…… 167

PL.12 上段　石墨状遺構・B 区（南より）…… 168

　　下段　B–2～B–3中間区遺構検出状態（南より）…… 168

PL.13 上段　2号住居址全景（南西より）…… 169

　　下段　2号住居址内土器出土状態…… 169

PL.14 上段　2号住居址内土器出土状態…… 170

　　下段　2号住居址内土器出土状態…… 170

PL.15 上段　2号住居址復元全景（南西より） …… 171
下段　3号住居址全景（南西より） …… 171
PL.16 上段　第2次調査区全景（北東より，手前はG–3区） …… 172
下段　G–4区ピット群検出状態（北側より） …… 172
PL.17 上段　F–3～4区ピット列検出状態 …… 173
下段　F–5区石塁状遺構検出状態（南より） …… 173
PL.18 上段　F–5～6区，G–6区石塁状遺構検出状態（西より） …… 174
下段　G–6区杭群検出状態（南より） …… 174
PL.19 上段　試掘調査出土土器 …… 175
下段　B–2区出土土器 …… 175
PL.20 上段　B–2区出土土器（表） …… 176
下段　B–2区出土土器（裏） …… 176
PL.21 上段　C–4区出土土器 …… 177
下段　D–4区出土土器 …… 177
PL.22 上段　D–4区出土土器（表） …… 178
下段　D–4区出土土器（裏） …… 178
PL.23 上段　C–1区出土土器（表） …… 179
下段　C–1区出土土器（裏） …… 179
PL.24 上段　F–3,4,5区出土土器 …… 180
下段　F–3,4,5区出土土器 …… 180
PL.25 上段　F–3,4,5区出土土器（表） …… 181
下段　F–3,4,5区出土土器（裏） …… 181
PL.26 上段　F–3,4,5区出土土器 …… 182
下段　F–3,4,5区出土陶磁器（中段：表，下段：裏） …… 182
PL.27 上段　F–5,6・G–5,6区出土土器（表） …… 183
下段　F–5,6・G–5,6区出土土器（裏） …… 183
PL.28 上段　F–5,6・G–5,6区出土陶磁器（上段：表，中段：裏） …… 184
下段　F–5,6・G–5,6区出土土器 …… 184
PL.29 上段　七渡瀬Ⅱ遺跡出土石器（敲石） …… 185
下段　七渡瀬Ⅱ遺跡出土石器（石鏃ほか） …… 185

## 第Ⅱ部　図版目次


PL.1 (1)千年比丘丘陵全景（東から） …… 231
(2)千年比丘丘陵近景（北から） …… 231
(3)1号墳発掘前の状況 …… 231
PL.2 (1)1号墳墳丘北トレンチ …… 232
(2)1号墳墳丘南トレンチ …… 232
PL.3 (1)1号墳主体部と供献土器の検出状況（北から） …… 233
(2)1号墳主体部と供献土器の検出状況（東から） …… 233
PL.4 (1)砥石と供献土器の検出状況（南から） …… 234
(2)砥石と供献土器の検出状況（北から） …… 234
(3)砥石の出土状況 …… 234
(4)砥石と中央主体の位置関係（北から） …… 234
PL.5 (1)1号墳中央主体の木棺痕跡（東半分） …… 235
(2)1号墳中央主体の土層横断面 …… 235
PL.6 (1)1号墳中央主体の土層縦断面（東半分） …… 236
(2)1号墳中央主体の土層縦断面（西半分） …… 236
PL.7 (1)1号墳中央主体の木棺痕跡検出状況（北から） …… 237
(2)1号墳中央主体完掘状況（北から） …… 237
PL.8 (1)A 地区（段状遺構）発掘前の状況（南から） …… 238
(2)A 地区（段状遺構）完掘状況（北から） …… 238
PL.9 (1)「2号墳」発掘前の状況（南西から） …… 239
(2)「2号墳」2区完掘状況（南から） …… 239
(3)「2号墳」「前方部」完掘状況（東から） …… 239
PL.10 (1)「2号墳」Ⅰ～Ⅳ区完掘状況（南東から） …… 240
(2)「2号墳」4区完掘状況（西から） …… 240
(3)「2号墳」6区完掘状況（西から） …… 240
(4)「2号墳」5区完掘状況（西から） …… 240
PL.11 (1)「2号墳」と B 地区の中間に位置する経塚 …… 241
(2)B 地区2区の完掘状況 …… 241
(3)B 地区1区の南北土層断面 …… 241
(4)B 地区1区角礫検出状況（南から） …… 241
PL.12 (1)B 地区角礫除去後の焼土層の検出状況 …… 242
(2)B 地区角礫除去後の焼土層断面 …… 242
(2)B 地区3区の土壙（南から） …… 242

PL.13 (1)1号墳出土土器　鼓形器台 …… 243
(2)同　　上　鼓形器台脚部の拡大 …… 243
PL.14 (1)1号墳出土土器　甕ほか …… 244
(2)同　　上　甕胴部片拡大 …… 244
(3)同　　上　穿孔のある壺？片拡大（内面） …… 244
PL.15 (1)1号墳出土　砥石 …… 245
(2)B 地区1区出土鉄釘 …… 245

# 表 目 次

## 第Ⅰ部　表目次


第1表　金城町内遺跡所在地一覧表 …… 7
第2表　波佐・長田地区遺跡表 …… 19
第3表　試掘調査出土土器・陶磁器観察表 …… 76.77
第4表　第1次調査出土土器・陶磁器観察表(B–2区) …… 78.79.80
第5表　第1次調査出土土器・陶磁器観察表(C–4区・その1) …… 86.87
第6表　第1次調査出土土器・陶磁器観察表(C–4区・その2) …… 90.91.92
第7表　第1次調査出土土器・陶磁器観察表(D–4区・その1) …… 97.98
第8表　第1次調査出土土器・陶磁器観察表(D–4区・その2) …… 99.100.101
第9表　F–3,F–4区ピット一覧表 …… 107
第10表　G–3区ピット一覧表 …… 108
第11表　G–4区ピット一覧表 …… 108.109
第12表　H–4区ピット一覧表 …… 114
第13表　H–4区下層ピット一覧表 …… 115
第14表　I–4区ピット一覧表 …… 120
第15表　第2次調査出土土器・陶磁器観察表(F–3・F–4・F–5区) …… 121.122.123.124
第16表　第2次調査出土土器・陶磁器観察表(F–5・6区，G–5・6区) …… 130.131.132
第17表　第2次調査出土土器・陶磁器観察表(C–1区・その1) …… 135.136
第18表　第2次調査出土土器・陶磁器観察表(C–1区・その2) …… 137
第19表　補足調査出土土器・陶磁器観察表(D–1区・その他) …… 140.141
第20表　補足調査出土土器・陶磁器観察表(B–3,C–5,D–1区) …… 142


## 第Ⅱ部　図版目次


第1表　弥生時代後期から古墳時代前期の主体部上に礫を置く墳墓 …… 224.225

# 例　　言

1. 本書は、金城（かなぎ）町教育委員会が1991（平成3）年度から1993（平成5）年度にかけて、金城町波佐地区において実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 本書は、これをⅠ～Ⅲ部構成としているが、その内容の概略は以下の通りである。

Ⅰ部．七渡瀬Ⅱ遺跡の発掘調査報告である。この遺跡は、当該地に町立の多目的集会施設建設のために発掘調査されたものである。なお遺跡の大部分は、地下埋設の形で保存することとなり、そのために調査上、工事上の一定の配慮がなされている。将来再調査の必要が生じた場合、これを行うことは可能である。

Ⅱ部．千年比丘古墳群の発掘調査報告である。当古墳群の調査は町史誌編纂事業との関連で、また、波佐地区の原始・古代史の解明を目指して行われたものである。

Ⅲ部．「波佐の歴史を掘り起こす」と題して、当地区の歴史の概説と、発掘参加の町民の方々の経験談等を収録した。この部は、町民向けの独立した小冊子として活用が図られる。

3. 調査に関する組織は次のとおりである。

調査主体　金城町教育委員会

**1991（平成3）年度**

七渡瀬Ⅱ遺跡試掘調査　　千年比丘古墳群測量調査（第1次）

調査担当者　大谷　晃二（島根県立浜田高等学校教諭）

事　務　局　西田　雅俊（教育長）

森口　　寛（教育次長）　　内藤　大拙（社会教育係長）

**1992（平成4）年度**

七渡瀬Ⅱ遺跡発掘調査（第1次）　　千年比丘古墳群発掘調査（第2次）

調査担当者　田中　義昭（島根大学法文学部教授）　大谷　晃二（浜田高等学校教諭）

竹広　文明（広島大学大学院生）

事　務　局　西田　雅俊（教 育 長）

森口　　寛（教育次長）　　佐々原熊雄（教育次長）

井川　成則（社会教育係長）

**1993（平成5）年度**

七渡瀬Ⅱ遺跡発掘調査（第2次）　　千年比丘古墳群発掘調査（第3次）

調査担当者　田中　義昭（島根大学法文学部教授）　大谷　晃二（浜田高等学校教諭）

久保谷浩二（金城町教育委員会主事）

事　務　局　西田　雅俊（教育長）

佐々原熊雄（教育次長）　　井川　成則（社会教育係長）

4. 七渡瀬Ⅱ遺跡の遺構実測の基準となる座標軸については、試掘調査時には金城町役場所有の耕地整理の基準図を用い、これを受けた第1次調査は試掘時の座標と発掘区区分を踏襲している。第2次調査では耕地整理図に若干のズレがあることを考慮して国土座標による発掘区に再編成した。座標値はFライン（東西軸）と4ライン（南北軸）の交点で第Ⅲ座標系X=−135924.158 Y=3091.655である。

5. 本書の編集は、田中義昭の指示のもとⅠ部を久保谷浩二、増野晋次が、Ⅱ部を大谷晃二が、Ⅲ部を久保谷浩二がそれぞれ担当し、田中が全体の補訂と調整を行った。執筆者は、各項の末尾の( )内に表示した。また、編集作業全体にわたって細田美樹（島根大学考古学専攻生）が援助・協力した。なお、編集作業過程では島根大学埋蔵文化財調査研究センター助手の会下和宏氏に種々お世話になった。感謝の意を述べる次第である。

6. 七渡瀬Ⅱ遺跡・千年比丘古墳群の調査、調査報告書の作成においては下記の機関・団体・個人から指導と協力をいただいた。記して謝意を表する次第である。

機　関　島根県教育委員会　島根県埋蔵文化財調査研究センター　島根大学考古学研究室　島根県立浜田高等学校　波佐公民館

団　体　浜田高等学校歴史部　波佐文化協会　西中国山地民具を守る会　栄和機工　（株）ワールド航測コンサルタント

個　人　潮見　浩（広島大学名誉教授）　村上　勇（広島県立美術館）　川原和人　松本岩雄　西尾克己　広江耕史　角田徳幸　熱田貴保　萩　雅人（以上島根県教育委員会、島根県埋蔵文化財調査研究センター）　原　裕司　榊原博英（以上浜田市教育委員会）　中田健一（石見町教育委員会）　三浦正樹（浜田高校教諭）　内山敏行（栃木県埋蔵文化財センター）　佐藤雄史（福岡県小郡市埋蔵文化財センター）　沢田秀実（東京都立大学助手）　佐田達雄（波佐公民館長）　田中タキヨ（波佐公民館主事）

発掘参加者　相木ナミエ　池田一男　一町仁市　一町クミエ　上田房一　上山信人　宇川徳美　梅岡季好　沖田国臣　沖田　茂　沖田サツヨ　岡本末春　岡本利道　岡本正行　金田重之助　北林照子　小池久子　佐々川友也　佐々山隆治　田原市郎　塚本貞義　能海数美　原田義雄　古田安五郎　宮田信夫　横路末広（以上町民有志）　家塚英詞　勝部智明　久米　基　小宮敦子　田浪文雄　中木信夫　櫛山範一　松村淳子　増野晋次　村瀬　誠　矢野　司　福間直美　（以上島根大学学生）　佐々木　勝（奈良大学学生）　清野正樹　鈴木一有（大阪大学学生）　内田浩司　川崎陽子　久保長生　迫田　稔　佐々木美幸　田原千恵　徳田　裕　中田貴子　西島　圭　藤本恵美　槙岡　泉　村上志津子　芽島智子　山口貴志　山脇州裕（以上浜田高校生）　沖田孝志　中谷祥平　中島　暢　向山　薫（以上可計高校芸北分校生）

7. 出土遺物の実測、トレース、挿・図版作成の諸作業は担当者が下記の方々の全面的な援助・協力を得て進めた。個々の担当部分については挿・図版目次に表記した。

埴生典子（島根大学埋蔵文化財調査研究センター）　上原香里（島根大学考古学専攻生）　雑賀淳子（島根大学東洋史専攻生）

遺物の写真撮影は久保谷（Ⅰ部）と大谷（Ⅱ部）が行った。

8. 七渡瀬Ⅱ遺跡、千年比丘古墳群からの出土遺物と発掘調査に係る記録類は、すべて金城町教育委員会で保管している。

# 序部　地域としての波佐（はざ）

# 序　　部

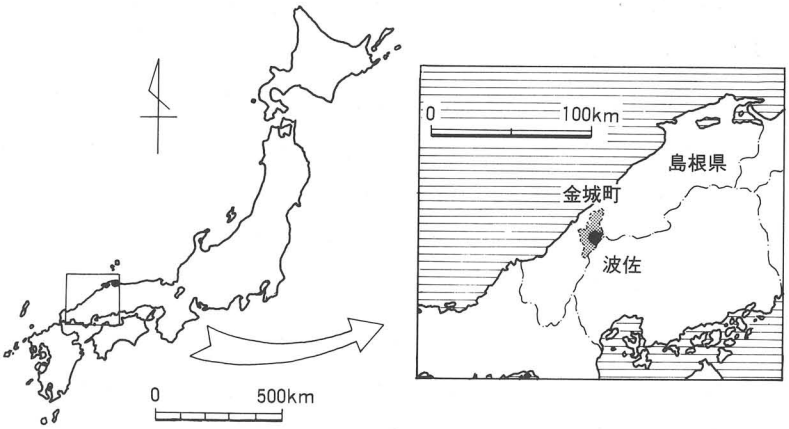
## 1. 地理的環境

波佐地区は、行政上は島根県那賀郡金城町に属し、その南部に位置している。金城町は島根県の西南にあり、中国山地の背梁部北面にある。北は浜田市と江津市に接し、南は広島県芸北町と県境に接している。町の中央部を陰陽を結ぶ幹線の国道189号線が南北に、町北部では主要地方道の浜田八重可部線が南北に走っている。

地形的にみれば、町中央部に金木山(719.8 m)があって、この山を境として南側は中国山地の山岳が広がり、北～北東部では低丘が連なっている。これらの山丘の間をぬって周布川、浜田川、下府川と、それらの支流が北西～北東方向に流れ、開析された河谷に耕地が開かれている。

波佐地区も金木山、雲月山、大佐山など1000 m 級の山に囲まれたV字状の谷間に広がる。谷の中央を周布川が北流し、波佐地区の中程では東南方向から流れ出た長田川が周布川と合流して「Y」字形の谷地形が形成される。流勢は南部の中国山地斜面では急で、平地では比較的緩やかである。川沿いに細長い沖積地があり、上流部には段丘地形もみられるが、概して谷は深く、急峻な山の斜面から直接平地に移行する地形が特徴的である。

南北に長く広がる金城町の気候は、北部の丘陵地帯がやや温暖で、波佐・長田地区を含めた南部の山岳地帯は寒冷で、冬季の積雪も多い。土質は花崗岩の風化土壌が主体で、ここから採取される真砂砂鉄は良質の鉄の原料となっている。




第1図　金城町波佐地区の位置

## 2. 歴史的環境

金城町域ではこれまでに188個所の遺跡が知られている。これらを時代順に概観して当町域の地域史の変遷を追い、そのなかで波佐・長田地区の歴史的位置を考えてみることにする。

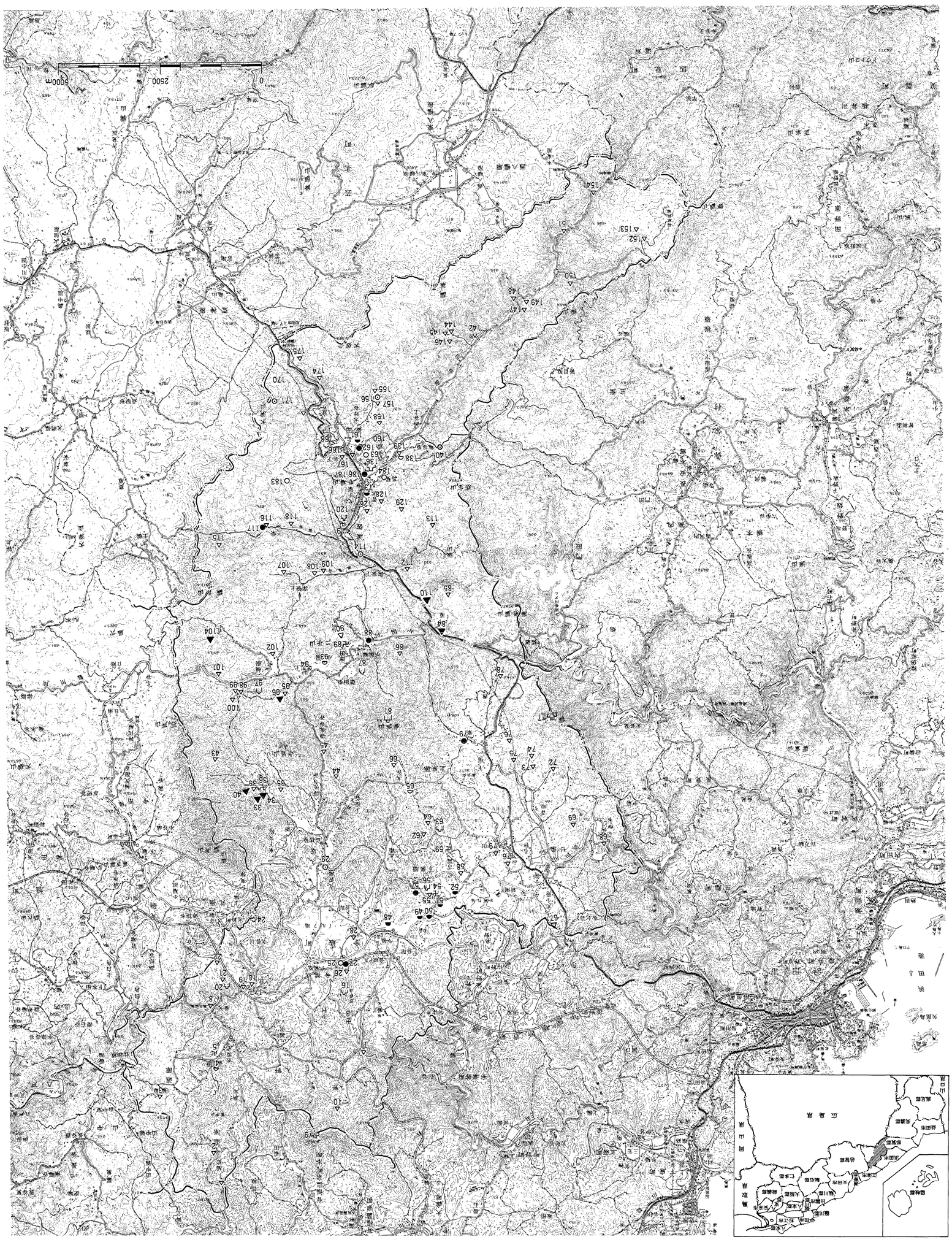
《旧石器時代》　金城町では旧石器時代遺跡の確かな事例は発見されていない。岩塚Ⅱ遺跡（今福地区）で出土した打製石器の中にこの時代のものが存在するという指摘もあるが、要検討かと思われる。ただし、中国横断道の建設に際して、邑智郡瑞穂町市木付近で旧石器時代末から縄文時代早期の遺物が出土したことなどから考えると今後旧石器時代の遺跡・遺物が発見される可能性は十分あるといえる。

《縄文時代》　縄文時代の遺跡としては、岩塚Ⅱ遺跡（今福地区）、水ケ佐古門遺跡（下長屋地区）、郷田門遺跡（上来原地区）、槙ケ曽根遺跡（波佐地区）、七渡瀬Ⅰ遺跡（波佐地区）、長田郷遺跡（長田地区）6個所が知られている。これらのうち発掘調査が行われて遺跡の内容がある程度明かになっているのは岩塚Ⅱ遺跡、七渡瀬Ⅰ遺跡、長田郷遺跡である。

岩塚Ⅱ遺跡は浜田八重可部線が通る南北方向の長い谷に面した小さい谷間にあり、前期前葉、中期後葉、後期前葉の縄文土器が出土している。いずれも二次的に形成された堆積層から得られたもので遺構等は見つかっていない。これらの土器で注目されるのは、前期前葉の一群である。これらは条痕調整された上に「3」字状、「D」字状、「C」字状の爪形文を施したものであって、山陽、近畿地方の羽島下層Ⅱ式から北白川下層Ⅰ式に相当する土器と考えられている。また、中期後葉の土器は波子式、後期前葉の土器は福田KⅡ式と判定されているが、量はきわめて少ない。石器では打製石鏃が64点とかなり多い。これは黒耀石、安山岩製である。次いで叩石、磨石、石皿、磨製石斧、石錐等が得られている。黒耀石、安山岩の剥片も多数あり、「異形石器」等注意すべき石器も出土している。これらが上記の土器とどう組み合わせになるのか不明であるが、これらの遺物出土地点近くに前期前葉から後期にかけて断続的に営まれた縄文人の集落が存在することは確実と思われる。

七渡瀬Ⅰ遺跡、長田郷遺跡とも波佐・長田地区にある。前者は、周布川と長田川の合流点付近にあり、七渡瀬Ⅱ遺跡とはひとまとまりの遺跡で、縄文晩期の土器が発見されている。後者は長田川の上流にあり、縄文後期の磨消縄文土器と晩期の突帯文土器が出土している。石斧、石鏃、凹石、叩石、石錘、ヤマモモ、クルミも発見されている。このころに、ようやく中国山地を越えて、縄文人の往来が目立ってきたということであろうか。

《弥生時代》　弥生時代の遺跡としては柿ノ木遺跡（小国地区）、七渡瀬Ⅰ遺跡（波佐地区）、長田郷遺跡、城ノ前遺跡、ナゴダ遺跡（長田地区）等が知られている。発掘調査によって遺物が得られたのは七渡瀬Ⅰ遺跡と長田郷遺跡である。七渡瀬Ⅰ遺跡では弥生前期の土器が縄文晩期の土器と混在して出土し、中期の土器も発見されている。また石錘、叩石、石鏃が出土しているが、これらの時期ははっきりしない（縄文時代の石器か）。長田郷遺跡では弥生後期の土器がややまと




第2図　金城町主要遺跡分布図

まって出土している。明瞭な遺構等は検出されていないが、中程度の規模（数棟の竪穴住居と掘立柱建物からなる）の集落がこの時期に成立していたことを推測させる。他の2遺跡の存在等をあわせ考えると、弥生時代後期は、波佐・長田地区が石見山間部で地域的にまとまった単位としての姿を現わした時期ともいえるのではなかろうか。

《古墳時代》　初期の古墳（弥生時代最終末期の墳丘墓の可能性もある）としては、今次の調査で発見した千年比丘1号墳があるが、これ以外にはまだ前半期(4～5世紀）の古墳は知られていない。町域の古墳として注目されているのは下来原地区にある後期の諸古墳である。現在では金田1号墳、同2号墳、猿ケ馬場古墳、下長屋古墳、火塚平古墳の諸墳が確認され、金田1号墳は発掘調査が実施されている。今福古墳もこれらの古墳と類似の特徴をもつ古墳と考えられる。

金田1号墳は、直径約10 m、高さ1～1.5 m の小規模な円墳で、片袖式の横穴式石室を設けている。石室内からは副葬された土師器の坏や須恵器の蓋坏、高坏、長頸壷、坩などが出土している。これらの土器の大部分は、近辺の窯で焼かれたものとみられるが、一個の長頸壷は東海地方で生産されたものと酷似していて注意される。

金田1号墳が築造された時期は7世紀の初めのころと思われる。この時期には石見地方の各地で横穴式石室墳や横穴墓が出現し、それらは群集して築かれるという特色をもっている。盆地や谷間の小平野の開拓が大いに進行し、その事業に積極的役割を果たした土地の農民の富裕な層が次々に古墳を造営したことを示すとみられている。金城町域の水田地帯は、この頃から本格的に耕作されるようになったとも考えられるのであるが、波佐・長田地区ではこのころの古墳は未確認である。

但し、長田郷遺跡や七渡瀬Ⅰ遺跡では、古墳時代前期の土器や集落が確認され、その後も集落が断続的に営まれている節があるので、無住地帯であったわけではない。それどころか、「布留式系」土器の検出にみられるように、古墳時代にも陰陽交流の接点地として活気を呈していた可能性を考慮に入れておいてよいのではないかと思う。

《奈良・平安時代》　この時代の遺物が発見された遺跡としては次の諸例がある。水ケ佐古遺跡（下長屋地区)、七渡瀬Ⅰ遺跡（波佐地区)、長田郷遺跡・城ノ前遺跡（長田地区)。これらの遺跡からは、奈良・平安時代の須恵器が採集されているが、発掘調査によって集落の状態などが判明していないので多くのことを知ることはできない。しかし中国横断道建設工事によって発見された旭町重富地区の集落等の様子からすると、金城町域にもこのころの集落が盆地や川谷平野の各所に存在した可能性は十分あるといえる。七渡瀬Ⅱ遺跡では、後に触れるように歴代波佐地区の中心的な集落が営まれている。各地区にもこうした集落があり、中世農村へと引き継がれていったとみられるのである。

なお、時期は不明であるが、下来原地区の虚空蔵遺跡は寺院跡とされる。

《中世以降》　中・近世の遺跡研究は、その歴史が新しく、町域の遺跡を調べ、この時代の動きを明らかにすることはほとんどなされていない。断片的なことを列挙して将来に備えることとせ

ざるをえないというのが現状である。

中世前半期の特徴的な遺物として中国産磁器の青磁、白磁等がある。これが岩塚Ⅱ遺跡、長田郷遺跡、七渡瀬Ⅰ遺跡から発見されている。これらの焼き物は土地の有力者が所有していたとみられることから、町域の各所に展開する中世村落を支配する土豪的な有力農民が現われ、蓄えた財力で中国産の焼き物を購入していたものと考えられる。

こうした土豪的農民が武装して立てこもったのが町域に多数残っている山城跡である。その数は11個所となっている。これらは町内各区に2～3個所ずつ分布している。その多くは南北朝時代に攻防のあったことが伝えられている。注目される城跡として波佐地区の一本松城跡があげられよう。その立地の場所は、県境近くの山岳先端部で、波佐盆地を一望の下に収めることができる要地である。村田修三氏によれば、本城跡は次のような特徴と意義をもっているという。

特徴点の第一は、畝状空堀が多く、複雑に分布していること。第二は曲輪が狭く、縄張りが閉鎖的であること。第三は背後の大井谷から出た長水路の終着点に位置していること。第四は交通の要衝を押えた立地であること等である。意義としては、この城跡が単に波佐地区の攻防施設ではなくて「石見・安芸両国を結ぶ交通の要衝を押えて進出しようとするいずれかの勢力の繋ぎの城」とする見方が示される。

この一本松城を含めた他の城跡を地域史のなかにどのように位置づけていくか、すべては今後の考古学的調査の成果と文献史料による地域史像の擦り合せにかかっている。従来主張されていたことは、平安時代の終わり頃に河野氏によって築城され、以後佐々木氏、小笠原氏と城主が交代しながら室町時代まで営城活動があったとされるが、これらの詳細な今日的到達点についてはⅢ部に収載した隅田正三氏の一文によられたい。

金城町域の中・近世遺跡で看過すべきでないものとして製鉄遺跡がある。町域でこれまでに発見された遺跡の約三分の二は製鉄関連の遺跡で占められている。これらが何時頃のどのような鉄生産のありようを示すのかは、現状では不明とせざるをえないが、町の中・近世史の一断面を語る有力な史料であることは十分に予測されよう。解明が求められる問題点といえる。

### 引用・参考文献

日本道路公団・島根県教育委員会編『中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅱ．1985年
金城町教育委員会編『島根県那賀郡金城町内遺跡分布調査報告書－波佐・長田地区－』Ⅰ．1986年
金城町教育委員会編『島根県那賀郡金城町内遺跡分布調査報告書』Ⅱ．1987年

（久保谷浩二　櫛山範一　田中義昭）

## 金城町内遺跡・所在地一覧表

（美又地区）

1：沢津Ⅱ鈩 ｛製鉄遺跡｝ …追原字太郎津上下2326－10

2：沢津Ⅰ鈩 ｛製鉄遺跡｝ …追原字下ノ平2328

3：福原鈩 ｛製鉄遺跡｝ …追原字カナクソ1286

4：堂原経塚 ｛古墓｝ …追原字セト1730

5：福田寺跡 ｛寺院跡｝ …追原字福田寺328

6：追原庄屋跡 ｛その他｝ …追原字間処223

7：大元鈩 ｛製鉄遺跡｝ …追原字新鈩中の釜2003

8：美又鈩 ｛製鉄遺跡｝ …追原字道辛原39－1

9：乙明城跡 ｛城跡｝ …入野字浅ヶ益1155

10：乙明鈩 ｛製鉄遺跡｝ …入野字鈩ヶ迫1161

（今福地区）

11：段原鈩 ｛製鉄遺跡｝ …宇津井字下モ田止952－1

12：元谷鈩 ｛製鉄遺跡｝ …今福字鉄穴口1178

13：蔵福庵跡 ｛寺院跡｝ …今福字蔵福庵1193－1

14：境ヶ谷鈩 ｛製鉄遺跡｝ …今福字境ヶ谷906

15：境ヶ谷鉄穴 ｛製鉄遺跡｝ …今福字境ヶ谷上ミ1747

16：笠松城跡 ｛城跡｝ …今福字藤ヶ谷セド山1684

17：丹久庵跡 ｛寺院跡｝ …今福字丹久山1609

18：皆合鈩 ｛製鉄遺跡｝ …今福字門畑647

19：皆合鍛冶屋跡 ｛製鉄遺跡｝ …今福字菰ガセ1606

20：田代城跡 ｛城跡｝ …今福字田代山1607

21：田代鈩 ｛製鉄遺跡｝ …今福字新宅624

22：菰ガセⅡ鈩 ｛製鉄遺跡｝ …今福字菰ガセ1606－9

23：菰ガセⅠ鈩 ｛製鉄遺跡｝ …今福字菰ガセ1606－9

24：小松原山砦跡 ｛城跡｝ …今福字小松原山1588－3

25：岩塚Ⅰ遺跡 ｛遺物散布地｝ …今福字八ツ割268－2

26：岩塚Ⅰ鈩 ｛製鉄遺跡｝ …今福字宮ノ向イ1451

27：岩塚Ⅱ遺跡 ｛遺物散布地｝ …今福字蔵ノ脇253－1

28：岩塚Ⅱ鈩 ｛製鉄遺跡｝ …今福字鈩原158

（久佐地区）

29：久佐代官所跡 ｛その他｝ …久佐字役所畑イ1124

30：白甲第4鈩 ｛製鉄遺跡｝ …久佐字松尾谷ロ379

31：白甲第3鈩 ｛製鉄遺跡｝ …久佐字鈩ロ60

32：白甲第5鈩 ｛製鉄遺跡｝ …久佐字松尾谷ロ379

33：白甲第6鈩 ｛製鉄遺跡｝ …久佐字松尾谷ロ379

34：白甲第7鈩 ｛製鉄遺跡｝ …久佐字松尾谷ロ379

35：宇栗鈩 ｛製鉄遺跡｝ …久佐字鉄穴ヶ益ロ482

36：金光寺跡 ｛寺院跡｝ …久佐字寺田ロ115

37：白甲第1鈩 ｛製鉄遺跡｝ …久佐字松尾谷ロ379

38：白甲第8鈩 ｛製鉄遺跡｝ …久佐字白甲ロ76

39：白甲第9鈩 ｛製鉄遺跡｝ …久佐字白甲ロ76

40：白甲第10鈩 ｛製鉄遺跡｝ …久佐字白甲ロ76

41：白甲第11鈩 ｛製鉄遺跡｝ …久佐字白甲ロ76

42：白甲第2鈩 ｛製鉄遺跡｝ …久佐字白甲ロ76

43：猿押鈩 ｛製鉄遺跡｝ …久佐字猿押奥ロ369

44：ナメラ鈩 ｛製鉄遺跡｝ …久佐字ナメラセトイ1213

45：長谷鈩 ｛製鉄遺跡｝ …久佐字吹屋床イ261

46：高良谷鈩 ｛製鉄遺跡｝ …久佐字高良谷1198

47：小原谷鉄穴 ｛製鉄遺跡｝ …久佐字高良台1198

48：今福古墳 ｛古墳｝ …久佐字塚神畑ハ32－1

（上来原・下来原・七条地区）

49：火塚平古墳 ｛古墳｝ …下来原字ヒツカ平1081－1

50：下長屋古墳 ｛古墳｝ …下来原字河角セド山1082－3

51：猿ヶ馬場古墳 ｛古墳｝ …下来原字猿ヶ馬場528－1

52：金田2号墳 ｛古墳｝ …下来原字八蔵ヶ原平1334－3

53：金田1号墳 ｛古墳｝ …下来原字八蔵ヶ原平1334－3

54：虚空蔵 ｛寺院跡｝ …下来原字庵屋敷549

55：金田鈩 ｛製鉄遺跡｝ …下来原字中屋敷上555－3

56：金田庄屋跡 ｛その他｝ …下来原字土居584－1

57：水佐古門遺跡 ｛遺物散布地｝ …下来原字水佐古門田852－1

58：吉留鍛冶屋跡 ｛製鉄遺跡｝ …下来原字加藤太夫1344

59：吉留寺跡 ｛寺院跡｝ …下来原字薬師堂474続1

60：弋ヶ迫鈩 ｛製鉄遺跡｝ …下来原字鈩ヶ益1327

61：金屋平鍛冶屋跡 ｛製鉄遺跡｝ …下来原字金屋平1366

62：茶園ヶ谷鉄穴 ｛製鉄遺跡｝ …下来原字茶園ヶ谷1288－1

63：吉留砦跡 ｛城跡｝ …下来原字古城ヶ谷1364－1

64：古留鈩 ｛製鉄遺跡｝ …下来原字鈩ヶ迫背戸1365－1

65：二反田経塚 ｛古墓｝ …上来原字二反田下山後平985

66：大谷鍛冶屋跡 ｛製鉄遺跡｝ …上来原字松ヶ益650内3

67：唐谷鍛冶屋跡 ｛製鉄遺跡｝ …七条字唐谷ハ35

68：伊木鈩 ｛製鉄遺跡｝ …七条字七条鈩ロ108

69：藤ヶ谷鈩 ｛製鉄遺跡｝ …七条字稗田後ロ473－1

70：角屋鈩 ｛製鉄遺跡｝ …七条字洗場イ776

71：於局給 ｛その他｝ …七条字於局給イ139

72：山根谷鈩 ｛製鉄遺跡｝ …七条字トイシケ原イ785－1

73：吉ヶ原鈩 ｛製鉄遺跡｝ …七条字篭院ヶ谷イ799－6

74：青原鈩 ｛製鉄遺跡｝ …七条字椿ヶ谷イ779－1

75：上の谷鈩 ｛製鉄遺跡｝ …七条字上の谷イ284

76：木原谷鉄穴 ｛製鉄遺跡｝ …上来原字奥田ヤ793－1

77：雲城山城跡 ｛城跡｝ …七条字椿ヶ谷イ779－1

78：上来原鈩 ｛製鉄遺跡｝ …上来原字蛇ノ谷奥848－1

79：郷田門遺跡 ｛遺物散布地｝ …上来原字下野田514

80：東鍛冶屋跡 ｛製鉄遺跡｝ …上来原字益山903

81：金木城跡 ｛城跡｝ …上来原字金木城907

（小国地区）

82：大利鍛冶屋跡 ｛製鉄遺跡｝ …小国字大利イ518－1

83：大利鈩 ｛製鉄遺跡｝ …小国字大折奥平イ859－12

84：田ノ原鈩 ｛製鉄遺跡｝ …小国字勘場イ585－3

85：長沢鈩 ｛製鉄遺跡｝ …小国字川平イ640

86：堂屋敷鈩 ｛製鉄遺跡｝ …小国字堂屋敷イ855

87：小国城跡 ｛城跡｝ …小国字最中山イ804

88：柿ノ木遺跡 ｛遺物散布地｝ …小国字柿ノ木小国イ167－2

89：正念寺跡 ｛寺院跡｝ …小国字古屋敷イ905－1

90：二子山鉄穴 ｛製鉄遺跡｝ …小国字鉄穴イ247

91：暮ヶ谷鈩 ｛製鉄遺跡｝ …小国字暮ヶ谷イ12

92：久佐谷鈩 ｛製鉄遺跡｝ …小国字久佐谷イ2

93：徳田経塚 ｛古墓｝ …小国字京塚ロ323

94：桃源寺跡 ｛寺院跡｝ …小国字前屋敷ロ305－5

95：猿木Ⅱ鈩 ｛製鉄遺跡｝ …小国字猿木ハ168

96：猿木Ⅰ鈩 ｛製鉄遺跡｝ …小国字猿木ハ169

97：火の迫城跡 ｛城跡｝ …小国字火迫城ハ433－2

98：宇栗道鈩 ｛製鉄遺跡｝ …小国字堀田ハ96

99：坂根Ⅱ鈩 ｛製鉄遺跡｝ …小国字坂根門切ハ78

100：坂根Ⅰ鈩 ｛製鉄遺跡｝ …小国字表谷本益ハ89

101：作見谷鉄穴 ｛製鉄遺跡｝ …小国字作見谷ハ59

102：小屋ヶ谷鈩 ｛製鉄遺跡｝ …小国字鈩床ハ346

103：桐ノ木鉄穴 ｛製鉄遺跡｝ …小国字狸ノ城ハ399－1

104：洗庭鉄穴 ｛製鉄遺跡｝ …小国字境ヶ谷ハ39－1

105：境ヶ谷鈩 ｛製鉄遺跡｝ …小国字境ヶ谷ハ313

106：雲月峠古戦場跡 ｛その他｝ …小国字雲月ハ392

（波佐地区）

107：深笹Ⅰ鈩 ｛製鉄遺跡｝ …波佐字鈩子イ11

108：深笹Ⅱ鈩 ｛製鉄遺跡｝ …波佐字釜ヶ原イ44

109：深笹鍛冶屋跡 ｛製鉄遺跡｝ …小国字片ヶ原イ703

110：夏焼鈩 ｛製鉄遺跡｝ …小国字夏焼

111：犬戻り鈩 ｛製鉄遺跡｝ …波佐字鈩床山口ロ108

112：長沢鈩 ｛製鉄遺跡｝ …波佐字長澤イ250

113：藤尾鈩 ｛製鉄遺跡｝ …波佐字鈩ヶ谷イ1133

114：不来ヶ原処刑場 ｛その他｝ …波佐字不来原イ270

115：小松木鉄穴 ｛製鉄遺跡｝ …波佐字小松木イ1104

116：槇ヶ曽根鈩 ｛製鉄遺跡｝ …波佐字大白イ谷イ1111

117：槇ヶ曽根遺跡 ｛遺物散布地｝ …波佐字大白イ谷イ1111

118：黒瀬鈩 ｛製鉄遺跡｝ …波佐字鈩床イ172

119：善長寺跡 ｛寺院跡｝ …波佐字寺床イ299

120：花城跡 ｛城跡｝ …波佐字城山イ1172

121：漆谷鉄穴 ｛製鉄遺跡｝ …波佐字鉄穴イ1164

122：漆谷Ⅰ鈩 ｛製鉄遺跡｝ …波佐字鈩ノ益イ331

123：漆谷Ⅱ鈩 ｛製鉄遺跡｝ …波佐字矢倉町イ333

124：夜無鈩 ｛製鉄遺跡｝ …波佐字夜無イ351

125：地主鉄穴 ｛製鉄遺跡｝ …波佐字弋手背戸山イ1179

126：桂迫鈩 ｛製鉄遺跡｝ …波佐字石仏有ノ木谷菅沢イ1189

127：大人遺跡 ｛その他｝ …波佐字石仏有ノ木谷菅沢イ1189－103

128：アンの木鉄穴 ｛製鉄遺跡｝ …波佐字有ノ木谷菅沢イ1189－61

129：鈩ヶ谷鈩 ｛製鉄遺跡｝ …波佐字鈩ヶ谷イ1133

130：菅沢庄屋跡 ｛その他｝ …波佐字菅沢イ491

131：菅沢墳墓 ｛古墓｝ …波佐字沖ノ切尻イ497

132：アンの木前遺跡 ｛遺物散布地｝ …波佐字有の木前ノ切イ507

133：波佐代官所跡 ｛その他｝ …波佐字恵喜多イ5

134：常磐山の的場 ｛その他｝ …波佐字常盤山イ1195

135：千代帽子遺跡 ｛その他｝ …波佐字千代帽子イ555

136：波佐一本松城跡 ｛城跡｝ …波佐字城山イ1254

137：剣の墓 ｛古墓｝ …波佐字王子ノロイ1261

138：千人塚 ｛古墓｝ …波佐字谷川イ664

139：釜町鈩 ｛製鉄遺跡｝ …波佐字釜町イ678－2

140：笠松峠の石畳路 ｛その他｝ …波佐字立添エイ1231

141：うのや鈩 ｛製鉄遺跡｝ …波佐字宇野屋イ759

142：宇谷鈩 ｛製鉄遺跡｝ …波佐字烏谷イ990

143：栃下鍛冶屋跡 ｛製鉄遺跡｝ …波佐字栃下奥イ943第2

144：栃下Ⅰ鈩 ｛製鉄遺跡｝ …波佐字栃下奥イ948第4

145：栃下Ⅱ鈩 ｛製鉄遺跡｝ …波佐字栃下奥イ948第2

146：栃下Ⅲ鈩 ｛製鉄遺跡｝ …波佐字日ノ平奥イ1297

147：ウナギ渕鈩 ｛製鉄遺跡｝ …波佐字鈩原イ1015

148：来ル実鈩 ｛製鉄遺跡｝ …波佐字来ル実イ1018

149：飯ノ山鈩 ｛製鉄遺跡｝ …波佐字飯ノ山イ1020

150：打尾谷鈩 ｛製鉄遺跡｝ …波佐字宇津尾谷中イ1039

151：鍋滝Ⅱ鈩 ｛製鉄遺跡｝ …波佐字新屋田平イ1316

152：鍋滝Ⅰ鈩 ｛製鉄遺跡｝ …波佐字泊小屋益ヨリ西平宇津尾谷両平イ1319

153：泊小屋鉄穴 ｛製鉄遺跡｝ …波佐字泊小屋益奥イ1318

154：鍋滝Ⅲ鈩 ｛製鉄遺跡｝ …波佐字鍋滝泊小屋東平

（長田地区）

155：表谷鉄穴 ｛製鉄遺跡｝ …長田字大井谷奥山ロ261

156：八幡岩遺跡 ｛その他｝ …長田字八幡薮ロ260

157：表谷鈩 ｛製鉄遺跡｝ …長田字カジヤ床ロ86

158：丸迫鉄穴 ｛製鉄遺跡｝ …長田字丸迫谷山ロ286

159：恵日山本覚寺跡 ｛寺院跡｝ …長田字上引寺ロ58

160：水見城跡 ｛城跡｝ …長田字丸迫山ロ287

161：千年比丘遺跡 ｛古墓｝ …長田字中山（千年比丘古墳群と同一）

162：長田郷遺跡 {遺物散布地} …長田字鉄穴池ロ173内3他

163：城ノ前遺跡 {遺物散布地} …長田字城ノ前ロ101他

164：田面庄屋跡 {その他} …長田字田屋ロ228

165：堂ヶ原鈩 {製鉄遺跡} …長田字堂ヶ原イ42

166：正古庵跡 {寺院跡} …長田字正古庵イ60

167：正古庵鉄穴 {製鉄遺跡} …長田字鉄穴堀イ395

168：長田城跡 {城跡} …長田字岡イ69

169：ダアダラ鈩 {製鉄遺跡} …長田字鈩町イ106

170：傍示西平土塁 {その他} …長田字傍示西平イ467

171：大潰鉄穴 {製鉄遺跡} …長田字牛岩平イ452

172：吹ヶ迫鈩 {製鉄遺跡} …長田字吹ヶ迫イ263

173：寺田庵跡 {寺院跡} …長田字寺田イ270

174：トヤゴウ鉄穴 {製鉄遺跡} …長田字鳥屋郷イ467

175：牓示鈩 {製鉄遺跡} …長田字牓示西平イ467－1

176：千元窯跡 {窯跡} …七条若林

177：馬場窯跡 {窯跡} …七条新開

178：今浦窯跡 {窯跡} …下来原今田

179：大吉屋窯跡 {窯跡} …七条若林

180：みさわ窯跡 {窯跡} …七条新開

181：千年比丘窯跡 {窯跡} …長田490番地外

182：中曽根東平窯跡 {窯跡} …長田字中曽根東平

183：黒瀬Ⅰ遺跡 {散布地} …波佐三栄

184：馬場遺跡 {散布地} …波佐馬場

185：千年比丘古墳群 {古墳} …長田490番地外

186：七渡瀬Ⅰ遺跡 {散布地} …波佐イ425番地

187：七渡瀬Ⅱ遺跡 {散布地} …波佐イ441–1

188：ナゴダ遺跡 {遺物散布地} …長田

## 3. 調査に至る経緯と調査の概要及び地域史研究上の課題

### ① 七渡瀬Ⅱ遺跡

**《波佐多目的集会施設の建設》** 金城町は、1991（平成3）年12月9日に波佐地区に多目的集会施設建設の基本計画を決定してその実現に取り組むこととなった。このことは、現存の公民館が手狭であることと、多様化する町民のニーズや地域活動の場として十分に対応できないことが理由の第一にあげられる。ために地元からは新施設建設要望が強く提出され、町としても生涯教育

の必要性が叫ばれるようになった状況にも鑑みて実現に踏み出したことであった。この間の詳細な経過については第Ⅲ部の報告に示してある。

**《試掘調査》**　問題は用地の設定である。町としては、現在の公民館との位置関係、民俗資料館や「和紙の館」等の公施設との一体的利用ができる場所にということで民俗資料館南側の土地が選ばれたのであった。しかし、この地は「和紙の館」建設の際に発見された七渡瀬Ⅰ遺跡と連続しており、当然この遺跡と関連する遺跡の存在が予測されたのであった。そこで町としては遺跡の所在を確認した上で建設計画を検討することとして、その調査法を教育委員会に委ね、1992（平成4）年3月に大谷晃二の指導のもと町教育委員会職員の手で試掘調査が実施されることとなった。

この調査は、3月9日～4月5日にわたって実施された。調査の目的は土層の堆積状況と遺構の有無の確認に置かれ、調査方法としては建設予定地に東西・南北にとった縦横方向の軸線を基準に10 m 方形区を設定し、さらに、その要所に2×2 m のグリッドを設けて発掘することにした。

その成果の概要は以下の通りである。

ⅰ）土層の堆積について。本遺跡の層序は、Ⅰ層（耕作土．床土）－Ⅱ層（遺物包含層・黒褐色土）－Ⅳ層（基盤層・黄褐色砂質土）として捉えられ、Ⅲ層（遺物包含層・黒褐色粘質土．砂礫）は、南部でⅣ層の上部に堆積していることが認められた。これらの層は、さらに数層に細分することができる。

多くの遺物が包含されたⅡ層は東で厚く、西では薄く堆積していた。この現象は、直接的には基盤層そのものが北西方向にむかって高さを減じていることと関連するが、洪水等による変形もあると考えられる。Ⅱ遺跡の西につながるⅠ遺跡の一部は、Ⅱ遺跡の包含層の流出によって形成された可能性がある。

ⅱ）遺構としては住居址と思われる遺構を3～4ヵ所、ピット数個を検出した。

ⅲ）出土遺物としては、縄文土器（晩期）、弥生土器（前・中・後期）、土師器、須恵器、陶磁器が得られた。また南部の湿地の調査区では木片等が検出された。

以上により集会施設建設予定地は縄文時代から中・近世に至る集落遺跡であることが確定した。ここで遺跡名を正式に七渡瀬Ⅱ遺跡として呼称することとなった。

**《第1次調査》**　試掘調査によって七渡瀬Ⅱ遺跡が中国山地の北斜面域で貴重な集落遺跡であると判明したことを受けて遺跡の保護と建設計画とをどう調整するかが問題となる。金城町としては、集会施設が国の補助金による建設であり、予算執行を迫られていること、波佐地区では代替用地が容易に見出されないこと、とりわけてこの施設が、診療所を置き、高齢者の保養所としての機能をもたせるべく企画されていることから高乾地が好適とされることと、先に挙げた他の公的施設との連関性を重視する視点等は外せないという事情があった。

この立場から町教育委員会は県教育委員会とも協議、基本的には民俗資料館南側の平坦地に集会施設を建設することとし、その際遺構を可能な限り損壊しない建設方法をとることで事業を進

めることになった。そこで上記の建設予定地内の遺構分布をより詳細に把握し、集落遺跡としての諸側面をいま少し正確に捉える必要から第1次の発掘調査を実施することとしたのである。また、前年から行われていた千年比丘古墳群の調査と対応させ、集落と墳墓を統一的に捉えて地域史の断面をより立体的に解明することも併せ追及することを含めて調査に取り組むこととしたのである。調査は、田中義昭が全体的な統括役を引き受け、島根大学考古学専攻生等と地元町民の手で実施された。調査期間は7月20日から8月10日の22日間に及んだ。

成果の概要は下記の通りである。

i）試掘調査で遺構の存在が確認された個所を中心に発掘を進めた結果、3個所で4棟の竪穴住居址（弥生時代終末期もしくは古墳時代初期のもの2棟、奈良時代のもの1棟、時期不明1　棟）を発見した。

ii）他に多数のピットや土壙、あるいは建物の柱の基礎のような遺構が検出された。

iii）調査地の南部は谷状に陥ち込み、その縁辺には川石の礫を貼り付けた石塁状の遺構の存在が明らかになった。

iv）出土遺物は、縄文土器（後・晩期）、弥生土器（前・中・後期）、土師器、須恵器、陶磁器等で、石器類はほとんど得られていない。東播系土器や輸入陶磁器等の出土が注目された。

今次の遺構の分布と性格の確認を目的にした調査により、七渡瀬Ⅱ遺跡では、弥生時代終末期もしくは古墳時代初期の集落址が中央から東側に存在すること、これと重なるように奈良時代や中・近世の集落址の営まれたことが十分予測されるところとなった。

そこで町としては建物を当初の予定より南西部に移動して立てることに計画変更をおこない、住居址等の遺構が検出された部分は、盛土して植え込みや簡易舗装の駐車場として地下遺構を保存する方策を取ることにした。これにより建設地は南部に拡大されることになり、町は当該地の買い上げと試掘調査を行っている。試掘の結果は、この個所は長田川の砂礫層が厚く堆積しており、遺構の存在は確認できなかった。

なお、石塁状遺構については第2次調査の期間では性格や構造について把握が十分ではなかったことと、一部が建物の下に埋没されることが避けられないことにより、12月に補足調査を実施した。調査は竹広文明が担当した。その結果この遺構は、近世以降の構築の可能性があることが判明。同時に改築されたことも知られた。

**《第2次調査》**　集会施設の建設が遺跡の西半分に行われることとなって、この部分の事前調査が必要になった。町教育委員会では新たに専任の埋蔵文化財調査担当職員（久保谷浩二）を採用して調査に臨んだ。調査は1993（平成5)年3月から6月にかけて実施された。

先にも触れたように、遺跡の西半分は長田川の激しい洪水に見舞われたためか、Ⅱ層の遺物包含層がきわめて薄く、場所によってはⅠ層の下にはⅣ層が直接露呈したところも少なくなかった。そして大小の川石が点々と分布する様子がみられた。したがって住居址等の遺構は見当らず、多数のピットや土壙を検出したに留まる。また遺物の量も第1次のそれと較べるとかなり少な

く、施設建設による遺構の破壊は幸か不幸か、偶然にも最小限度に留めることができたといってよいように思う。

**《集会施設の建設》**　以上2次にわたる考古学的調査の終了を待って1993年7月15日から建物の建設工事が開始された。面積1168㎡、総工費約3.9億円、平屋建のこの多目的集会施設は、公募された名称で「ときわ会館」と名付けられ、12月に完成して同月12日に盛大な竣工式が挙行された。数千年にわたって波佐地区の中心街区として利用されてきた遺跡所在地に21世紀を展望した地域活性化の拠点になることを願って多目的施設が建設されるのも偶然のなせる所業とも思えない。破壊の上に建設された施設が120パーセントの効力を発揮できるよう願うや切である。

② 千年比丘古墳群

**《調査の動機》**　金城町長田地区の千年比丘丘陵上に古墳とみられる隆起部分が数個所あり、そのひとつが前方後円墳形をしているので調査をしたらどうかという話が、町文化財審議委員で町史編纂員を努める隅田正一氏等から出された。偶々これを聞き及んだ田中が現地を実見して、丘陵の尾根上に並ぶいくつかの隆起部分に古墳の可能性があることを示唆した。町教育委員会では、折から町史編纂に取り組んでいることでもあり、発掘調査を実施して実態の解明に乗り出すことになったのである。

**《測量調査》**　調査の手順として、まず外形の測量から始めることとなり、これを浜田高校に赴任していた大谷がクラブ活動の一環として同校歴史部の生徒を率いて行うことにし、町教委職員が全面的に調査を補佐した。なお、測量開始前にワールド航測コンサルタントによる基準点の設定が行われている。

測量調査（第1次調査）の期間は1991（平成3)年8月6日から12日までの7日間である。この間に丘陵北端の円丘と、これと鞍部を隔てて存在する東西方向主軸の前方後円墳様の隆起部の外形を測量して記録した。その結果、かの円丘は直径約20 m、高さ約3 m の円墳の可能性が強まった。前方後円墳様丘については全体の測量を進めると同時に、「くびれ部」に相当する個所を試掘調査して古墳かどうかの決め手を得る努力を試みた。結論的には古墳と断定するための徴証は検出しえず、さらに詰めの調査が必要であることを確認して今次の調査は打ち切りとした。

**《発掘調査・第2次調査》**　第1次調査の結果をうけて円墳(1号墳）と前方後円墳様の丘（「2号墳」）に対し発掘を実施して、その実態を確定することにした。調査は、第1次調査を担当した大谷と浜田高校歴史部が主体となり、これを島根大学考古学専攻生や町教委職員、地元町民が支援することになった。調査期間は、七渡瀬Ⅱ遺跡の調査と併行して進めることで7月21日～8月16日までの27日間にわたって実施した。その結果は次のとおりである。

1号墳については、墳頂部に東西にほぼ平行する長方形土壙の存在を確認し、その中央主体を発掘。これが組合木棺を内蔵した墓壙であることを掴んだ。その造営期は、壙上から検出された鼓形器台等の形態的特徴から弥生時代末ないし古墳時代初期であると判定された。

「2号墳」に関しては、「後円部」様丘と「前方部」様丘、両者の接合部に対してかなり徹底

したトレンチ発掘を実施したが、今次も、残念ながら、これを古墳とする証拠は得られず、自然丘が偶々「前方後円」形をなしていたものと結論するに至った。

1号墳、「2号墳」の調査が峠を越したところでB区とした地区に対して試掘調査を行った。同地区の尾根部に平坦面がありその一部に起伏が認めれ、これが低墳丘墓かと疑われる節があったからである。結果としては、積極的な事実は認められないものの、遺構とみられる部分が存在することを確かめたところで作業を打ち切った。

**《補足調査・第3次調査》** 1993年と1994年に1号墳に係る補足調査、A、B区の遺構確認調査を実施した。1号墳の調査は、主として墳丘規模の確定のために、A、B区では低墳丘墓の存在の有無を確認することが課題であった。調査期間は1993年8月7日から25日までと1994年3月に2日間にわたっている。その結果は、1号墳が地山削出しの墳丘で、規模は直径15 m、高さは2 mであることを確定した。

A区の調査では墳墓と思われるものは存在しないことが知られ、B区では先の試掘で検出した角礫群下から炭化物・焼土、釘状の鉄器を検出し、これが埋葬遺構であることを突き止めたが、年代等は明らかにしえていない。

③ 地域史研究上の課題

金城町教育委員会が責任主体となり、これに島根大学考古学研究室、県立浜田高校歴史部、波佐文化協会、地元町民の全面的な支援体制で取り組んだ七渡瀬Ⅱ遺跡と千年比丘古墳群の調査の経緯は以上の如くである。積み残した調査課題が多々あることを自認するのであるが、これらの調査が当初の予想をはるかに超えて、波佐地区全体の地域史を解明する方向に進み、その展望を開いたことに些かの満足を覚える。

ここの成果と問題点はそれぞれの項目に譲るにしても、波佐・長田地区が周布川の最上流部に位置し、同時に本区域が陰陽の境界部を占めている点に地域史の特性が付与される最大の地理的歴史的条件が存在することを改めて確認しておきたい。このような地域の諸条件を活かした生産活動の積極化と文物の頻繁な交流こそが、地域の存在意義を高めるなによりの課題であることを示しているのである。

（田中　義昭）

# 第Ⅰ部　七渡瀬Ⅱ遺跡の調査

## 1. 七渡瀬Ⅱ遺跡の位置と周辺の遺跡

七渡瀬Ⅱ遺跡は金城町大字波佐イ441–1番地に属し、周布川と長田川が合流する地点の南東部に位置している。この立地個所は急峻な山岳の裾部に形成された河岸段丘面とみられるが、その段丘の形成は、周布・長田両河川により側縁部を侵食されて山裾沿いに回廊状の平坦地となったものと思われる。同時に、ここは波佐・長田地区ではもっともまとまった高乾な平地で、公民館や歴史民俗資料館等の公共施設が集まっている。

周布川は比較的幅広い河谷平地をぬって南西から西方向に遡り、やがて中国山地の山裾に達するや急流をなし、水源は匹見町東部域に及んでいる。他方長田川は南方向に延び、水源を県境大佐山一帯に発している。長田川の谷幅は狭く、傾斜も急であり、増水時の水勢はこの川の方が強い。七渡瀬遺跡群は幾度か洪水に見舞われたようであるが、遺跡を襲う水は長田川のものであったと考えられる。つまり遺跡の南側が長田川の流れの攻撃面に当るというわけで、この側から石塁状の遺構が検出されたことの意味を理解することができる。

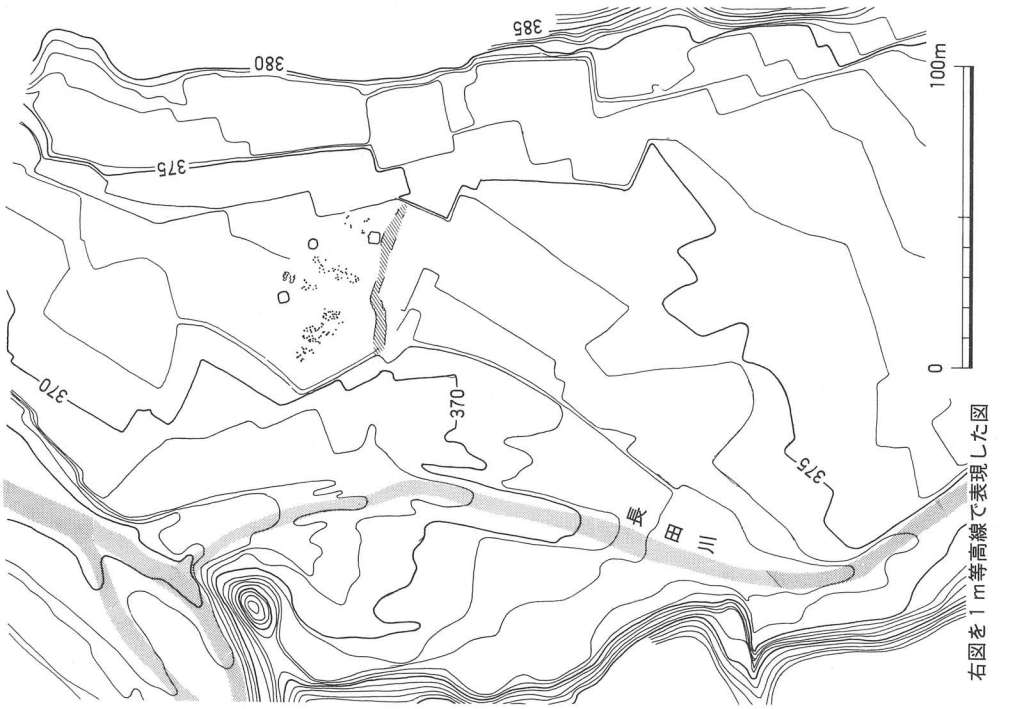
この細長い盆地状の平野で発見されている遺跡については、序説のところで概略を述べた。ここでは、波佐・長田地区に限って、時代を追ってやや詳細に遺跡の展開状況を概観して後章の参考としよう。

**《縄文時代》**　波佐・長田地区で最初の人跡が認められるのは、目下のところでは縄文時代後期である。七渡瀬Ⅱ遺跡では後期の土器が採集されているほか、長田郷遺跡で同時期の土器がかなり出土している。長田遺跡では石斧・石鏃の発見もあり、ドングリがまとまった状態で検出された。縄文時代後期の遺跡は山陰各地に見出され、このころが採集経済を基礎とする縄文時代の画期であったことが知られている。波佐・長田地区における人の定住化の始まりも、このような画期のなかで実現したものと思われる。

七渡瀬Ⅰ・Ⅱ両遺跡では晩期縄文土器の出土が目立っている。長田郷遺跡でも晩期の土器が少なからず検出された。後期に開始された縄文集団の居住がいっそう広がってきた様子を伺うことができるであろう。そしてそれらの土器群中に突帯文土器がかなりの割合を占めている事実から、初期の稲作農耕受容の事情を推定する手掛かりが得られるかも知れない。

**《弥生時代》**　弥生時代の遺物は、縄文時代同様に七渡瀬Ⅰ・Ⅱ両遺跡と長田郷遺跡から発見されている。七渡瀬Ⅰ・Ⅱ遺跡では前期弥生土器がかなり検出されたほか中期や後期の土器も発見されていて、ここに稲作農耕集落が継続的に営まれていたことが推定される。長田郷遺跡の宵時は後期のものである。出土量がかなりあり、七渡瀬に次ぐ規模の集落の存在したことが推定される。弥生時代中～後期は集落の分岐・増大が多いに進んだ時期で、この波佐・長田地区でも、おそらく七渡瀬集落から親別れした子集落がいくつか成立していたように思われる。そしてこれらが一体になって地域の共同社会を形成していたのではなかろうか。千年比丘1号墳の被葬者は、この地域社会を統率する最初の首長であったと思われる。

圃場整備前の地形図



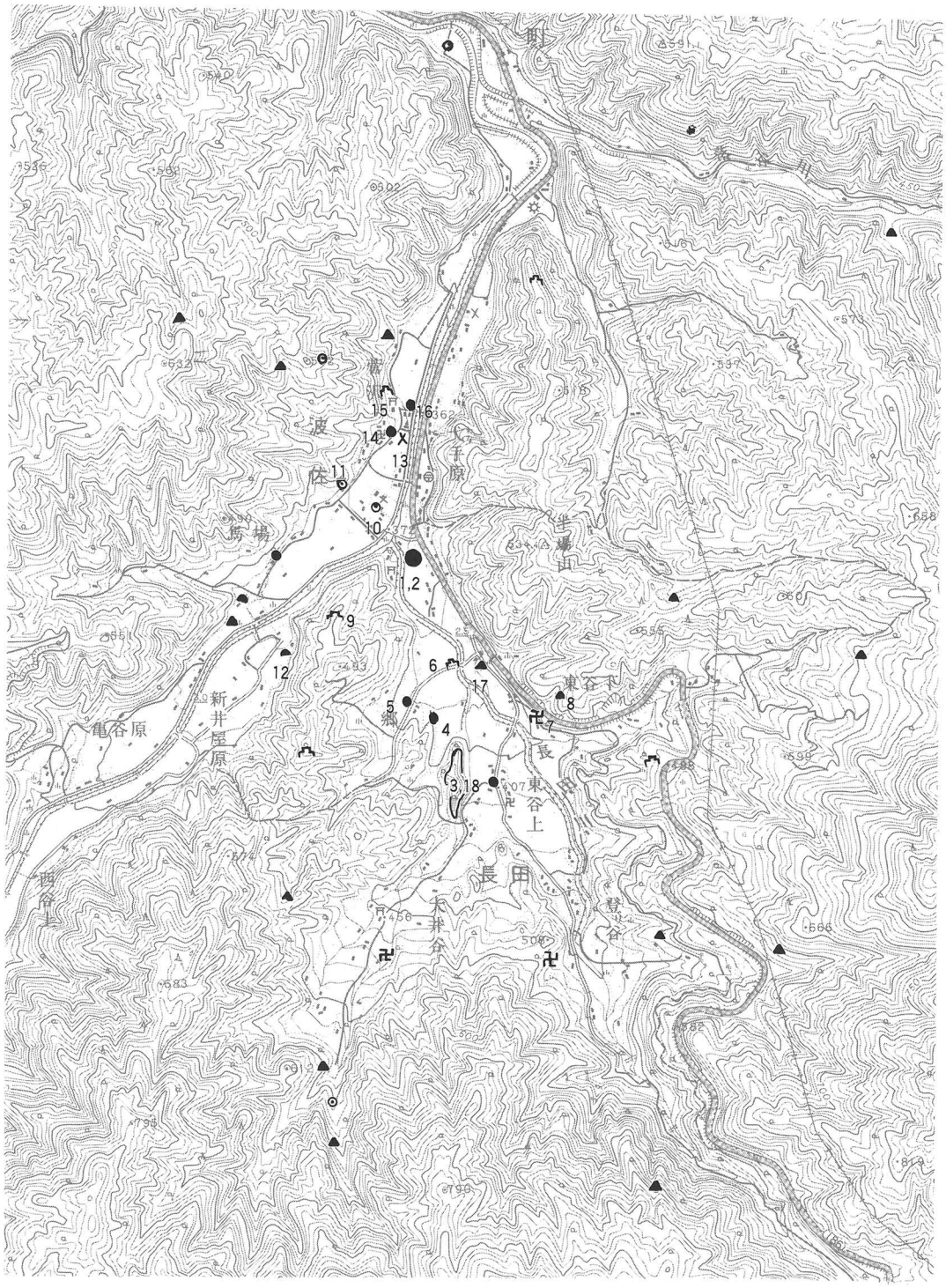

右図を１ｍ等高線で表現した図

第3図　七渡瀬Ⅱ遺跡と周辺の地形（圃場整備前）

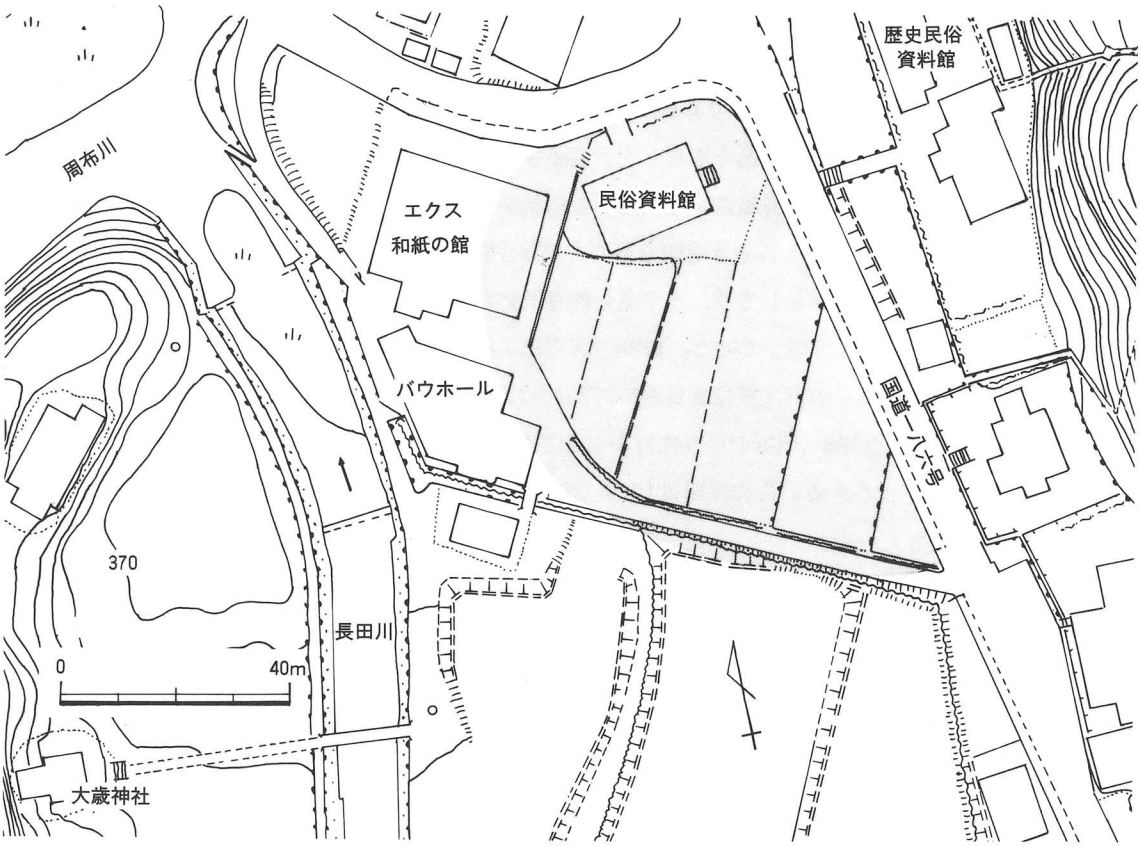
## 第2表　波佐・長田地区遺跡表

| 番号 | 種別 | 遺跡名 | 所在地 | 現状 | 遺跡の状況 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 散布地 | 七渡瀬Ⅰ遺跡 | 金城町大字波佐イ425番地 | 施設 | 縄文、弥生、土師器、須恵器 |
| | | | | | 陶磁器、石器 |
| 2 | 住居跡地 | 七渡瀬Ⅱ遺跡 | 金城町大字波佐イ441–1 | 施設 | 縄文、弥生、土師器、須恵器 |
| | | | | | 陶磁器他 |
| | | | | | 住居跡（古墳時代、奈良時代） |
| 3 | 古墳他 | 千年比丘古墳群 | 金城町大字長田イ490外 | 山林 | |
| 3-1 | 古墳 | 千年比丘1号墳 | | | 古墳時代前期 |
| 3-2 | | 千年比丘2号墳 | | | |
| 3-3 | 経塚 | 千年比丘経塚 | | | 川原石積の経塚 |
| 3-4 | | 千年比丘B地区 | | | |
| 4 | 散布地 | 長田郷遺跡 | 金城町大字長田ロ173内 | 水田 | 縄文、弥生、土師器、須恵器 |
| | | | | | 陶磁器他 |
| 5 | 散布地 | 城ノ前遺跡 | 金城町大字長田ロ101 | 水田 | 須恵器、陶磁器 |
| 6 | その他 | 田屋庄屋跡 | 金城町大字長田ロ228 | 水田 | |
| 7 | 寺院跡 | 正古庵跡 | 金城町大字長田イ69 | 国道 | 消滅 |
| 8 | 製鉄遺跡 | 正古庵鉄穴 | 金城町大字長田イ395 | 山林 | 鉄穴水路跡 |
| 9 | 城跡 | 波佐一本松城跡 | 金城町大字波佐イ1254 | 山林 | 山城、畝状空堀群の縄張 |
| | | | | | 町指定 |
| 10 | その他 | 千代帽子遺跡 | 金城町大字波佐イ555 | 水田 | |
| 11 | その他 | 常盤山の的場 | 金城町大字波佐イ1195 | 山林 | |
| 12 | 古墓 | 剣の墓 | 金城町大字波佐イ1261 | 原野 | |
| 13 | 代官所跡 | 波佐代官所跡 | 金城町大字波佐イ5 | 宅地 | |
| 14 | 散布地 | アンの木前遺跡 | 金城町大字佐波イ507 | 水田 | |
| 15 | 庄屋跡 | 菅沢庄屋跡 | 金城町大字波佐イ491 | 畑 | |
| 16 | 古墓 | 菅沢古墓 | 金城町大字波佐イ497 | 雑種地 | |
| 17 | 製鉄遺跡 | 堂ヶ原炉跡 | 金城町大字波佐イ42 | 宅地 | |
| 18 | 窯跡 | 千年比丘窯跡 | 金城町大字長田イ490 | 山林 | 瓦窯(明治時代) |

参考文献
島根県那賀郡金城町内 遺跡分布調査報告書Ⅰ―波佐・長田地区―　金城町教育委員会　1986年
島根県遺跡分布図Ⅱ（石見編）　島根県教育委員会　1992年




第4図　波佐・長田地区の遺跡（S=1/25,000）




第5図　七渡瀬Ⅰ・Ⅱ遺跡の位置

**《古墳時代》**　古墳時代の遺跡には千年比丘丘陵上の古墳のほかに七渡瀬Ⅱ遺跡で検出された住居址などがある。また、長田郷遺跡で弥生時代後期から引き続き集落の営まれていたことが確認される。千年比丘1号墳は、古墳時代の初期の円形墳で、弥生時代の末期に現われる墳丘墓の伝統を色濃く残している点が目を引くようだ。七渡瀬Ⅱ遺跡発見の2棟の住居址も1号墳とほぼ同時期に営まれたもので、長田川の氾濫によって倒壊したことが判明している。この2棟のほかにも数棟の住居が存在し、それらがひとまとまりになって集落を形作っていたと思われるが、詳細は不明である。ともあれ、古墳時代初期の集落が存在したことを確認する必要がある。七渡瀬Ⅱ遺跡では古墳時代後期の土器も採集されているので、この頃にも集落が営まれていたことが推定される。

**《奈良・平安時代》**　この時代の遺跡は七渡瀬遺跡群と長田郷遺跡である。前者からはかまど付きの小規模な竪穴住居址が発見され、遺跡全体でこの時代の土器が検出されている。古墳時代と同様に数棟の住居からなる集落があったことを想定してもよいであろう。長田郷遺跡では住居址等の遺構は発見されていないが、この時代の土器が相当量出土していることから、ここにも小規模な集落が営まれていたとみてよいであろう。

**《中世》**　波佐一本松城（町指定史跡）は中世城郭として著名で、これまでの調査で畝状空堀群、曲輪、水路等の遺構が捉えられている。城跡南東に位置する城の前遺跡からは中世の土器、輸入

青磁が採集されている。城との関係が問題になる遺跡である。安芸－石見を結ぶ交通の要衝地に立地する遺跡群として今後のより詳細な調査が期待される。千人塚、剣の墓は、1336年の波佐谷の合戦の際戦死者とその遺品を埋葬した古墓とされる。

他の中世城郭跡として水見城跡、花城跡、長田城跡等がある。水見城跡は波佐一本松城の南西約500 m の同一尾根稜線上にあり堀切や郭の広がりが認められる。

《近世》　この期の遺跡としては、まず波佐代官所跡が挙げられる。1617（元和3)年の開設で、波佐組7カ村3000石を管轄していた。1788（天明8)年廃止されている。この他に庄屋跡と「たたら」製鉄遺跡がある。菅沢庄屋は慶長2年に開設され初代庄屋には田中屋善兵衛宣安が任命されている。その後、1686（明暦2)年波佐村が二分され、新しい東谷村に田屋庄屋が新設されているが、その跡が現存する。この庄屋は1717（享保元）年に波佐、東谷の両村が元の一村に統合されて廃止されている。

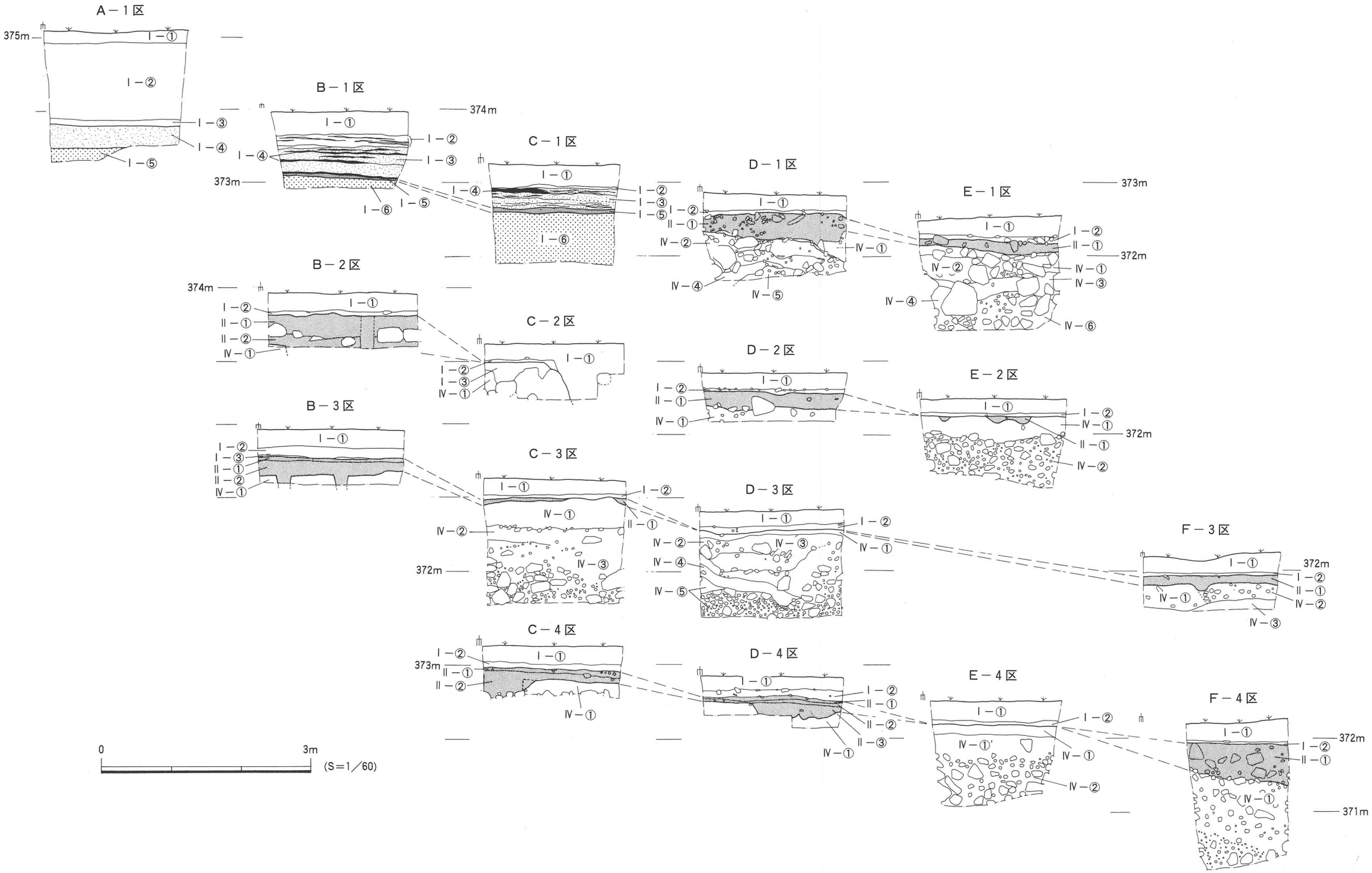
「たたら」製鉄とそれに関連する遺跡としては正古庵鉄穴跡と堂ケ原鑪跡がある。前者には「かんな流し」の水路跡があり、後者は現住宅内に残されている。開設年代は後者が宝暦12年となっている。前者については不明。これらの製鉄遺跡は西中国産地の良質な砂鉄、豊かな森林、それに水資源を利用して展開された当地方の代表的な近世産業遺跡である。「たたら」製鉄は近代初頭まで継続されている。

《近代》　明治期の遺跡として残されているものに千年比丘窯跡がある。丘陵の先端に営まれた瓦窯である。

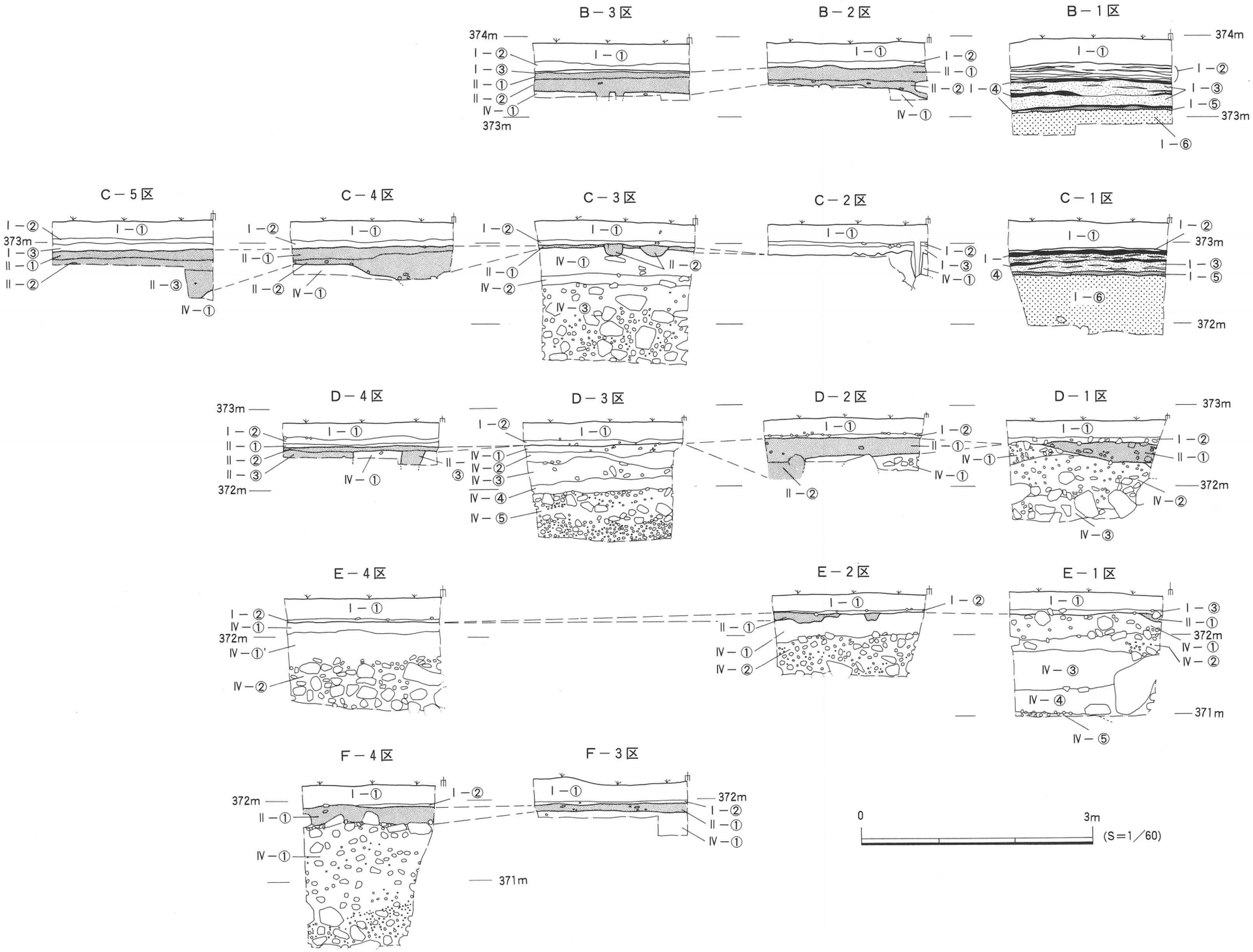
七渡瀬遺跡周辺の代表的な遺跡を取り上げると以上のようになる。なお、時代不詳の遺跡として菅沢墳墓、常盤山の的場と千代帽子遺跡等も注目される。後二者は波佐八幡宮に関連する遺跡で、現在28 m にわたって矢道が残っている。

波佐・長田地区は周布川上流の小盆地で、山陰と山陽を結ぶ街道の要衝にあり、規模は小さいが特色のある遺跡がコンパクトな形でまとまって存在している。これらの個々の内容と特徴を捉えることによって陰陽交流史の流れや様相が解明されるものと思われる。

（久保谷浩二）




第6図　試掘調査　土層断面図（東西方向）




第7図　試掘調査　土層断面図（南北方向）

**基本層序**　Ⅰ層　耕作土、近世以降の客土・堆積土など
Ⅱ層　遺物包含層
Ⅲ層　近世以前の旧河道堆積土
Ⅳ層　基盤層

**A-1区**
Ⅰ①耕作土
②水田客土　赤黄白色砂質土～赤黄色、白色の大きな単位の互層
③旧耕作土　黒色土
④砂層　～水成堆積による
⑤黒色泥質土層

**B-1区**
Ⅰ①耕作土
②青灰白色粘土
③白色砂　～水成堆積による
④赤黄褐色砂～水成堆積による
⑤青白色粘土
⑥黒色泥質土層

**B-2区**
Ⅰ①耕作土　淡灰褐色粘質土
②ニガ土　明黄褐色砂質土
Ⅱ①淡灰褐色粘質土～2～3 mm の黄褐色のブロックを多く含む。（旧耕作土か？）
②明黄褐色砂質土～Ⅰ②層よりも明るい。（旧ニガ土か？）
③暗黒色粘質土　～1 mm 以下の白色粒子を含む。
Ⅳ①暗黄褐色砂質土～Ⅱ③との境はあいまいであるが、下ほど明瞭な砂質層となる。

**B-3区**
Ⅰ①耕作土
②明黄褐色粘質土
③明黄褐色砂質土
Ⅱ①淡灰褐色粘質土～5 mm くらいの白色、黄色のブロック含む。（旧耕作土か？）
②暗黒色砂質土
Ⅳ①暗黄褐色砂質土

**C-1区**
Ⅰ①耕作土　②淡青灰色粘土
③白色砂　④赤黄褐色砂
⑤青灰色粘土　⑥黒色泥質土層

**C-2区**
Ⅰ①耕作土
②明黄褐色砂質土
③明黄白色砂質土～Ⅳ層との区別が判然としない。
Ⅳ①暗赤黄褐色砂質土～粒子の細かい層

**C-3区**
Ⅰ①耕作土
②ニガ土　暗赤褐色土～赤色と黄色の粒を含む。
Ⅱ①淡黒灰色土
②黒色土
③黒灰色土
Ⅳ①暗黄褐色砂質土層
②砂　層　～若干の礫が混じる
③砂礫土　～砂・礫・土が混じる。下層ほど大型の礫層となる。

**C-4区**
Ⅰ①耕作土
②ニガ土　明黄橙色砂質土
Ⅱ①黒色砂質土　～黄色、橙色の5 mm くらいのブロックを含み、汚れた色調。
②暗黒色粘質土　～しまりなく、①よりも純粋な黒。
Ⅳ①暗黄褐色砂質土～角礫含む。

**C-5区**
Ⅰ①耕作土
②黒灰褐色粘質土
③ニガ土
Ⅱ①淡黒灰褐色粘質土～しまりあり、Ⅰ①層に似る。1 mm 以下の白色砂粒あり。（旧耕作土か？）
②暗黒灰褐色粘質土～しまりあり、白色粒を含む。
③濃暗黒灰褐色土　～しまりなく、粘性に富む。白色粒はない。
Ⅳ①暗黄褐色砂質土　～角礫含む。

**D-1区**
Ⅰ①耕作土
②ニガ土
Ⅱ①暗黒色粘質土～砂礫を多く含む。
Ⅳ①黒色土～礫を多く含む。
②砂　礫～上面に厚さ2～5 cm の粘土層がブロック状にあり。
③砂　礫～大型の礫を含む。礫の間に粘土をブロック状に含む。
④細砂
⑤粗砂礫～鉄分多い。

**D-2区**
Ⅰ①耕作土
②ニガ土　暗黄褐色砂質土
Ⅱ①暗黒褐色粘質土
②淡黒灰褐色粘質土
Ⅳ①明黄褐色砂質土

**D-3区**
Ⅰ①耕作土
②ニガ土　淡褐色砂質土
Ⅳ①黄褐色砂質土
②淡灰褐色砂質土～ほぼ砂といってもよい。
③暗黄橙色砂質土～この層の上面に鉄分の層がある。
④砂
⑤砂　礫～下層は完全な礫層となる。

**D-4区**
Ⅰ①耕作土
②ニガ土　黄褐色砂質土
Ⅱ①淡灰褐色砂質土
②暗黄褐色砂質土
③黒褐色砂質土
Ⅳ①明黄褐色砂質土

**E-1区**
Ⅰ①耕作土
②ニガ土　明黄橙色砂質土
Ⅱ①淡黒灰色砂質土～色調などⅠ①層に似る。
Ⅳ①暗黒褐色粗砂　～鉄分により黒い。粗い砂層といってもよい。数 cm の礫を多く含む。
②暗褐色粗砂
③黄白色粗砂～均質な砂層
④明黄褐色細砂～均質な砂層
⑤暗黒褐色粗砂礫
⑥暗褐色砂礫

**E-2区**
Ⅰ①耕作土
②ニガ土　明黄橙色砂質土
Ⅱ①淡黒灰褐色砂質土～粒子はⅠ①と同じであり、色調のみが違う。そのため遺構か否かは不明である。根による攪乱であろうか？
Ⅳ①明黄褐色砂質土
②砂礫層～粗い砂中に拳大の円礫多数を含む。

**E-4区**
Ⅰ①耕作土
②ニガ土　明黄橙色砂質土
Ⅳ①淡黒灰褐色砂質土　～Ⅳ②に根などが浸透し、攪乱したものか？
②′淡灰黄褐色砂質土～粒子は①②に同じ。
③砂　礫～下層ほど砂粒が粗くなり、砂を含む。

**F-3区**
Ⅰ①耕作土
②ニガ土　明黄橙色砂質土
Ⅱ①淡黒灰色砂質土層～色調はⅠ①に似る。しまりがあり、黄褐色のブロックを含む

## 2. 調査の経過

### (1) 試掘調査(1992年3月)(PL.2)

**(経過と調査方法)**

試掘調査以前には、公民館建設予定地では遺物など一切知られておらず、遺跡としては認知されていなかった。一方、この建設予定地の西に隣接する「和紙の館」ではその建設に際して少なからず土器が出土し、七渡瀬Ⅰ遺跡と呼ばれていたことから、当然今回の公民館建設予定地においても遺跡の存在が予想された。むしろ、七渡瀬Ⅰ遺跡が遺物包含層であったことから、これより高い位置にある建設予定地は、Ⅰ遺跡の遺物が本来帰属していた遺構・集落址の存在が予想されたのであった。そこでまず、試掘調査によって遺跡の存在とその範囲を確認することとなった。調査は、1992年3月9日～4月5日の延べ11日間、大谷晃二が担当者となり、町教育委員会職員の補佐により実施した。

発掘区は、2×2 mのグリッドとした。これを建設予定地6面の水田ごとに南北方向に10 m間隔で配置し、各水田面のグリッドが東西方向にも並ぶように設定し、合計11のグリッドを設けた（第6図)。調査の目的から、発掘は遺構の所在確認にとどめ、遺構内の発掘は行わない方針とした。

**(調査の経過と基本層序の確認)**

調査は手掘りによる耕作土の除去から始めた。土器の細片を含む耕作土とニガ土を除去すると、数10 cmから1 mほどの厚さで土器を含む黒色ないし灰褐色の土層（Ⅱ層・遺物包含層）が認められた。このⅡ層はさらに二ないし三に分層ができ、B-2区ではこの層の中にピットが認められたため、この層の中にも遺構面が存在することがわかった。このⅡ層は、調査範囲の東側ほど厚く堆積し、遺物量も多い。調査範囲の西側でも厚い部分があるが、ここでは礫を大量に含み、遺物は数点と少ない。調査範囲の中央部のC-2区、D-3区などではこの層が確認されなかったり、きわめて薄い堆積状況を呈していた。これらは、本来凹凸状態で堆積していた遺物包含層が、現状の水田を造成する段階で平らに削平されたものと思われる。

この遺物包含層（Ⅱ層）を除去すると、黄褐色ないし黒色の砂質土層（Ⅳ層の上部）の存在が認められた。調査範囲の北東よりのB-2区、B-3区、C-4区、D-4区では、Ⅳ層を切ってⅡ層の落ち込みが確認され、これを遺構と判断した。調査方針から、遺構内の発掘は行わなかったため、検出した遺構の性格や時期は不明であるが、竪穴住居、柱穴、土壙などと推定された。

遺構が確認されなかったグリッドでは、遺跡の基本層序と地山・基盤層の確認のため、重機を使ってとくに深く掘り下げた。この結果、黄褐色ないし黒色の砂質土層（Ⅳ層上部）の下には砂礫層（Ⅳ層下部）が形成されており、Ⅳ層が基盤層であることが判明した。

このようにして、遺構の存在と基本層序が次第に明らかになった。さらに調査区を南へ増設し

たところ、A–1区、B–1区、C–1区において、他とはまったく異なる層の存在が認められた。すなわち、耕作土の下に水成堆積を思わせる数10 cmの無遺物の砂層と10数cmの粘土層(A–1区のⅠ—④層、B–1区・C–1区のⅠ—②～⑤層)、さらにその下に数10 cm以上の泥炭状の黒色土層(A–1区のⅠ—⑤層、B–1区・C–1区のⅠ—⑥層）が検出された。この黒色土層は、その上部でアシなどの植物遺体、須恵器、青磁、加工木材の細片などが出土した。C–1区のこの層の下からは、縄文時代晩期の粗製土器が1片出土した。さらに若干掘り下げると、地表から1 mの深さで人頭大の礫があらわれ、湧水が始まったため、黒色土層の下面を確認することはできなかった。

この泥炭状の黒色土層と、北側のグリッドの遺構検出層（Ⅳ層）との層序は直接確認しなかったが、この土層は、調査範囲の南側に溝・池・旧河道などが存在し、これに堆積したものと思われた。この層を覆って、水成堆積砂層が存在することは、いつの時代かに長田川の氾濫があったと推定した。

このように、黒色ないし灰褐色の土層（Ⅱ層・遺物包含層）によって遺跡の広がりを確認し、さらに深掘りによって遺跡の基本層序を把握して、試掘調査を終了した。

（調査区の概要）

主な調査区の概要は以下のとおりである。

〈A–1区〉

耕作土の下に1 mの厚さで客土があり、その下に厚さ0.3 mの砂層（Ⅰ－④層)、表土下1.6 mで泥炭状黒色土層（Ⅰ－⑤層）を検出した。B–1・C–1区のように砂層は検出されなかった。

〈B–1、C–1区〉　(PL.3)

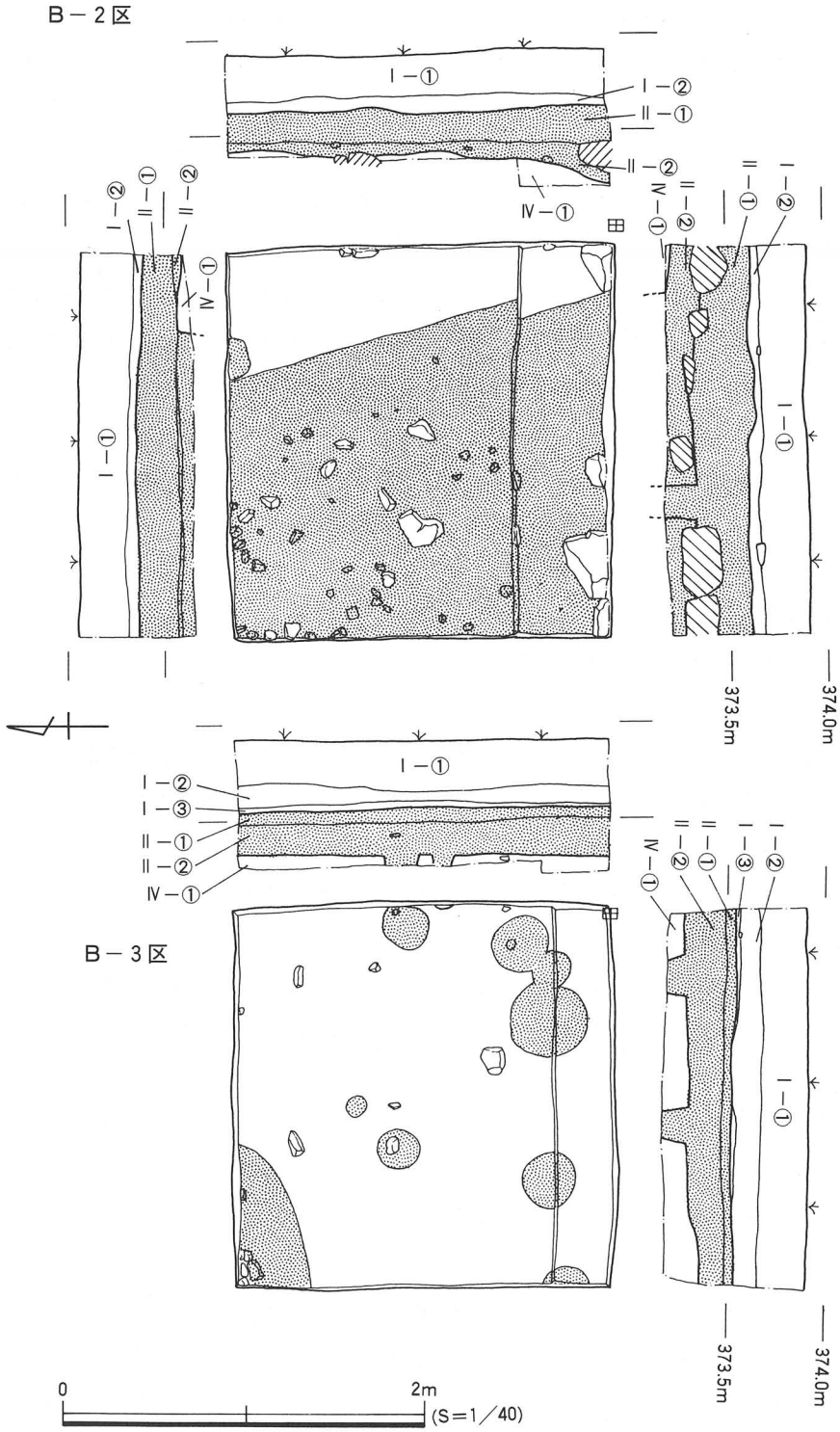
耕作土下に無遺物の砂層があり、これは薄く粒子の細かい砂または粘土が幾層にも堆積しており、水成堆積であると認められた。砂層の下は粘土層(Ⅰ－⑤層)、その下に黒色土層(Ⅰ－⑥層)が堆積していた。この黒色土層の下面は確認していないが、C–1区の表土下1.2 mで人頭大の礫が多数検出された。遺物は、黒色土層（Ⅰ－⑥層）から縄文時代晩期の粗製土器が出土した。

〈D–1、E–1区〉　(PL.7上)

砂層・黒色土は認められず、耕作土・床土の下は黒褐色砂質土層（Ⅱ層）であった。両区で厚さに著しい差が認められたが、ともに礫を多量に含む。その下は数10 cmから拳大の礫で構成される基盤の砂礫層（Ⅳ層）である。

〈B–2区〉　(PL.4上)

竪穴住居址（後の1–a号住居）1とピット2を検出した。竪穴住居址とピットの1つは、Ⅳ層上面から掘り込まれている。もう1つのピットは調査区南壁で確認された。上下二層に分かれる黒褐色土層のⅡ－下層上面から掘り込まれている。これによって、Ⅱ層中にも遺構面があることがわかった。これらの時期は試掘調査段階では確認していない。




第8図　試掘調査区（B–2区，B–3区）

〈C-2区〉　(PL.5上)

耕作土・床土の直下が黄褐色砂質土層（Ⅳ－①層）であり、遺物包含層（Ⅱ層）はまったく検出されなかった。

〈D-2、E-2区〉　(PL.6上)

D-2区は黒褐色砂質土層（Ⅱ層）が厚く堆積し、E-2区はきわめて薄い。E-2区では不整形の落ち込みが若干土層断面で確認された。

〈B-3区〉　(PL.4下)

ピット7、土壙または竪穴住居址と推定されるもの1を検出した。すべてⅣ層上面から掘り込まれている。柱穴は径20～30 cm を測る。

〈C-3区〉

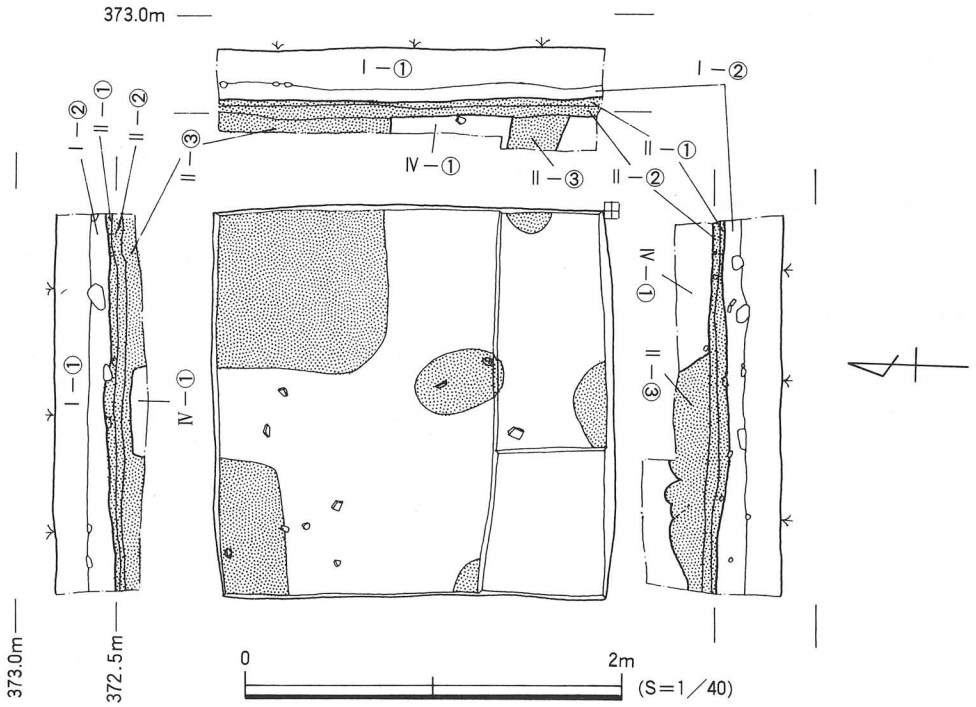
黒褐色砂質土層（Ⅱ層）がきわめて薄いが、調査区東壁で不整形の陥ち込み二個所が認められた。黄褐色砂質土層（Ⅳ－①層）は厚く、その下に砂礫層（Ⅳ－③層）が認められた。

〈D-3区〉　(PL.6中)

Ⅱ層は認められず、薄い黄褐色砂質土層（Ⅳ－①層）の下に砂礫層（Ⅳ－②・③層）がある。

〈F-3区〉

黒褐色砂質土層（Ⅱ層）、黄褐色砂質土層（Ⅳ－①層）が認められ、Ⅳ－①層上面で不整形の陥ち込み若干が認められた。Ⅱ層からは弥生時代前期の壷形土器片を含む若干の土器片が出土した。




第9図　試掘調査区(D-4区)

〈C-4区〉　(PL.5中)

ピット2、土壙または竪穴住居址と推定されるもの1を検出した。

〈D-4区〉　(PL.6下)

ピット4、隅丸方形の竪穴住居址（後の3号住居址）1を検出した。すべてⅣ層上面から掘り込まれている。Ⅳ層に一部埋没して弥生時代前期の土器片が出土した。このⅣ層はさらに分層できる可能性もあり、基盤層と判断した層に時期差を有する遺構面が存在する可能性ものこされた。調査期間の関係で、この点を追求することはできなかった。

〈E-4区〉　(PL.7下)

黒褐色砂質土層（Ⅱ層）はなかった。

〈F-4区〉

礫を多く含む黒褐色砂質土（Ⅱ層）が厚く堆積し、古墳時代前期の壷形土器片を含む若干の土器片が出土した。

〈C-5区〉　(PL.5下)

黒褐色砂質土層（Ⅱ層）が厚く堆積している。Ⅱ層は上・中・下の三つに分層できる。遺構の存在が想定されたが、基盤層（Ⅳ層）まで完全に検出しなかった。遺物が豊富に出土した。

〈出土遺物〉　(PL.19上)

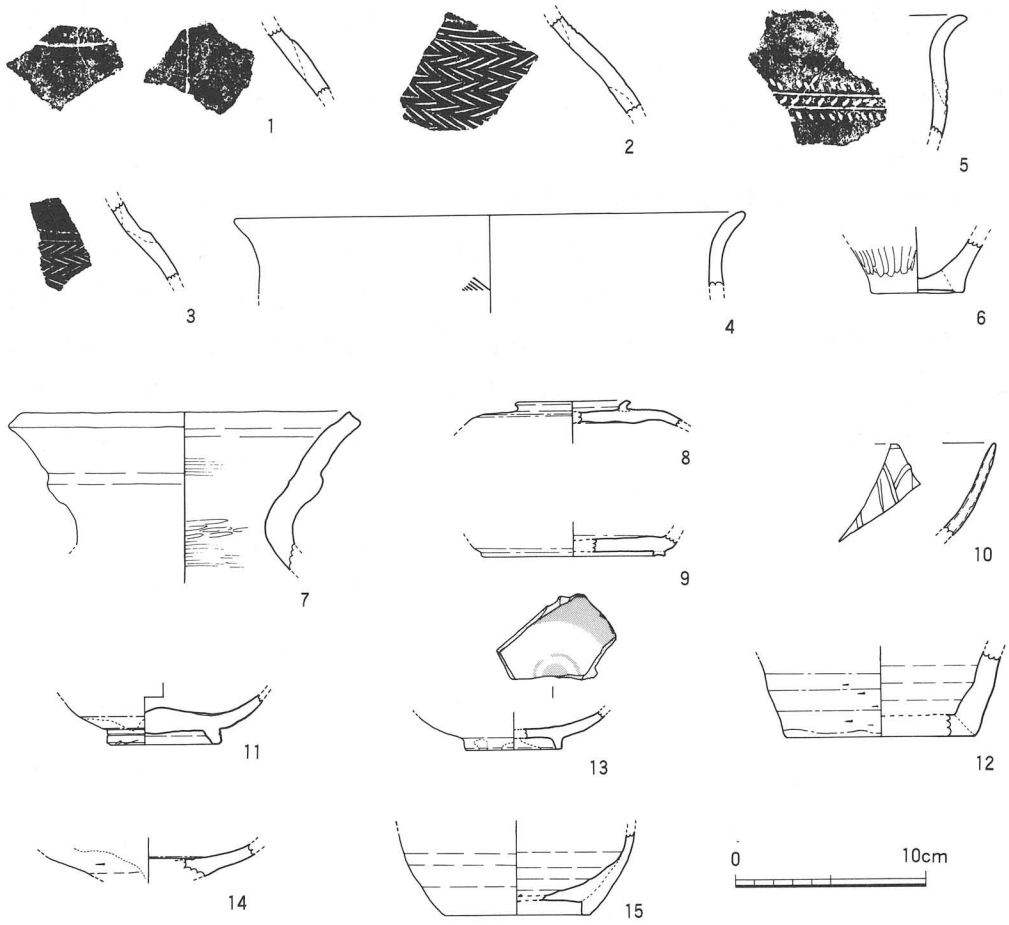
出土遺物は土器が大半であり、一部に木製品の破片がある。

表土である耕作土からは、弥生土器、土師器、青磁などの細片が出土した。

黒褐色土の遺物包含層からは、弥生土器、土師器が出土し、その他の時期のものは出土していない。弥生土器は前期の壷形土器、甕形土器、中期の壷または甕形土器の底部などであり、後期の土器は出土していない。土師器は、古墳時代前期の壷形土器の口縁部、古墳時代前半期の壷または甕形土器の破片である。

A-1区、B-1区、C-1区の泥炭状黒色土層の上層からは、アシなど植物遺体が、平安時代の須恵器、12～13世紀の青磁や江戸時代の陶磁器などとともに出土した。また、これに混じって加工木材の小破片が数片出土した。泥炭状黒色土層の下層からは、縄文時代晩期の粗製土器の破片が1片出土した。

これら出土土器の個別記載については、第1、第2次調査の出土土器と合わせて別項目述べる。




第10図　試掘調査　出土土器・陶磁器実測図（第3表参照）

（試掘調査時の基本認識）

試掘調査の時点でわれわれが把握できた七渡瀬Ⅱ遺跡に対する認識と問題意識は次のようなものであった。

① **遺跡の広がり**　遺物包含層である黒褐色土層（Ⅱ層）によって知ることができ、集会施設建設予定地のほぼ全域に広がる。

② **遺　構**　竪穴住居址と推定されるものやピット、不整形な土壙などが検出され、七渡瀬Ⅱ遺跡が集落遺跡であることが明らかとなった。遺構は調査範囲の北側、東側で多く認められた。つまり、遺跡の範囲の中でも標高が比較的高い方によっている。西側の低い方では、遺物包含層の黒色土層の直下の地山が、すぐに人頭大の礫混じりの砂礫層となっていることから、住居を営むには適していなかったと判断される。

③ **溝・池・旧河道**　予定地内の西側では、泥炭状黒褐色土層が1 m以上の厚さで堆積し、アシなどの植物遺体も含んでいる。この状況は、溝・沼・池・旧河道などが存在するものと思われる（試掘調査時には、これを古代以前のものと推測したが、2次調査によってこの黒色土は、

近世以降の堆積であることが明らかとなった)。また、これは近世以降に河川の氾濫により埋没したものである。

④ **時　期**　出土土器から縄文時代晩期、弥生時代前期・中期、古墳時代前期、奈良時代ごろが遺跡の形成時期と推測される。

⑤ **波佐地域における位置づけ**　弥生時代前期の集落が存在する可能性が指摘されたことは、こうした山間部への稲作の伝播ルートの問題と、稲作の受要の背景など重要な問題を提起している。また、今回は、弥生時代後期の土器が認められなかったが、南方約500 m の長田郷遺跡では後期の土器が多量に出土している。狭い盆地の中での集落の関係・推移について検討する必要があろう。さらに、古墳時代前半期の集落址が存在することは、隣接する千年比丘古墳群との関連など極めて興味深い。　（大谷　晃二）

## (2)第1次調査(1992年7月～8月)(PL.8)

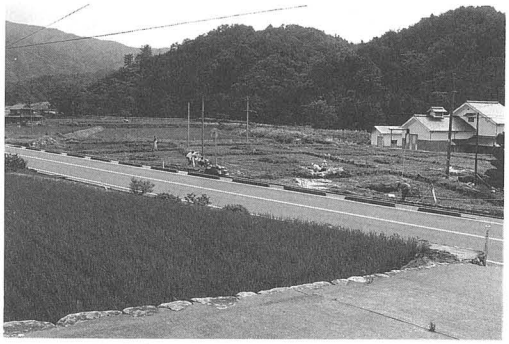
当年3月の試掘をうけた1次調査は、7月20日から8月11日まで23日間を要して実施した。その経過ならびに確認事項を日を追って記述する。

**7月20日（晴）**

本日より発掘調査を開始。午前中に調査参加者(島根大学・田中以下考古学専攻生等、町教育委員会職員、発掘作業員の町民）集結。午後一番に波佐公民館にて打ち合わせ。器材の確認、小型の重機を使用して耕作土の除去を行う。

今次の調査は試掘調査の結果を踏まえて、①遺構の存在状態をより詳細に明らかにし、このことを基にして、②施設建設計画を、どのように、どの程度修正しうるかの手掛かりを得ることに主目的がある。

したがって発掘区は試掘の際に遺構の存在が確認された区（個所）を中心に設け、さらに未確認の遺構を検出するために新規にいくつか発掘区を設定することで調査を進めることにした。具体的には、住居址の床面らしき遺構やピット群等が検出されていたB–2区、B–3区、C–4区、D–4区を中心に精査し、遺構の状況によって発掘区を拡大していくこととした。



調査着手時の遺跡全景（北から）

調査着手時の遺跡全景（南から）

**7月21日（快晴）**

①B 区の調査（第11図）

試掘段階ではB–1、B–2、B–3の各区が発掘されているが、遺構の検出があったのはB–2、B–3区で、この二つの区を拡大精査した。

＜B–2区（松村・中木・坪屋・町民有志）＞

この区ではⅣ層上面から掘込まれた住居址とピット、Ⅱ層下部にも遺構らしいものがあるとされていた。

そこで、まずはⅡ層下部の遺構の広がりと性格を把握することとし、試掘時のB–2グリッド(2×2 m)を北と西に拡大して4×4 m の新区に設定し直した。併せて試掘区西壁のセクションを延長する意味で、ここに幅50㎝のベルトを南北方向にとった。本日はⅡ層を10㎝程度下げる。目立った遺物は出土しない。

この新区に対応させて、旧区の南側にも発掘区を設け(4×4 m)、その一部を掘り下げた。ここではⅠ層下部の土を除去すると黄色の粘質土層（Ⅰ－②）が露われた。この土は「カンナ流し」を利用した流水客土との町民有志の言に従って除去。その下方には砂層（Ⅰ－③、④）と暗灰色の粘土層（Ⅰ－⑤）が存在することが知られた。

南側拡張区では新たな知見が得られた。それは、試掘区の南壁セクションに露われていた大石群と一体を成す石塁状遺構の存在である。この遺構は東西方向に帯状に延び、堤防状に大小の石を積み上げたものであることが知られた。そして頂部は耕作土の直下にあり、高さは1 m 足らずと推定された。各層との対応関係でいえば先の暗灰色粘土層がこの遺構上に堆積している。出土遺物なし。

＜B–3区（小宮・一町・相木・笹川他町民有志）＞

試掘時のB–3区(2×2 m）を拡張して、4×4 m のグリッドに設定し直す。十字にセクションベルトをとり、四つの小区を設けて、試掘区をイ小区、以下ロ、ハ、ニ小区とした。本日はイ小区を清掃し、ロ、ニ小区をⅠ－2層からⅡ－1層までを堀下げた。遺物の出土はない。

②C 区の調査

＜C–4区（櫛山・町民有志）＞

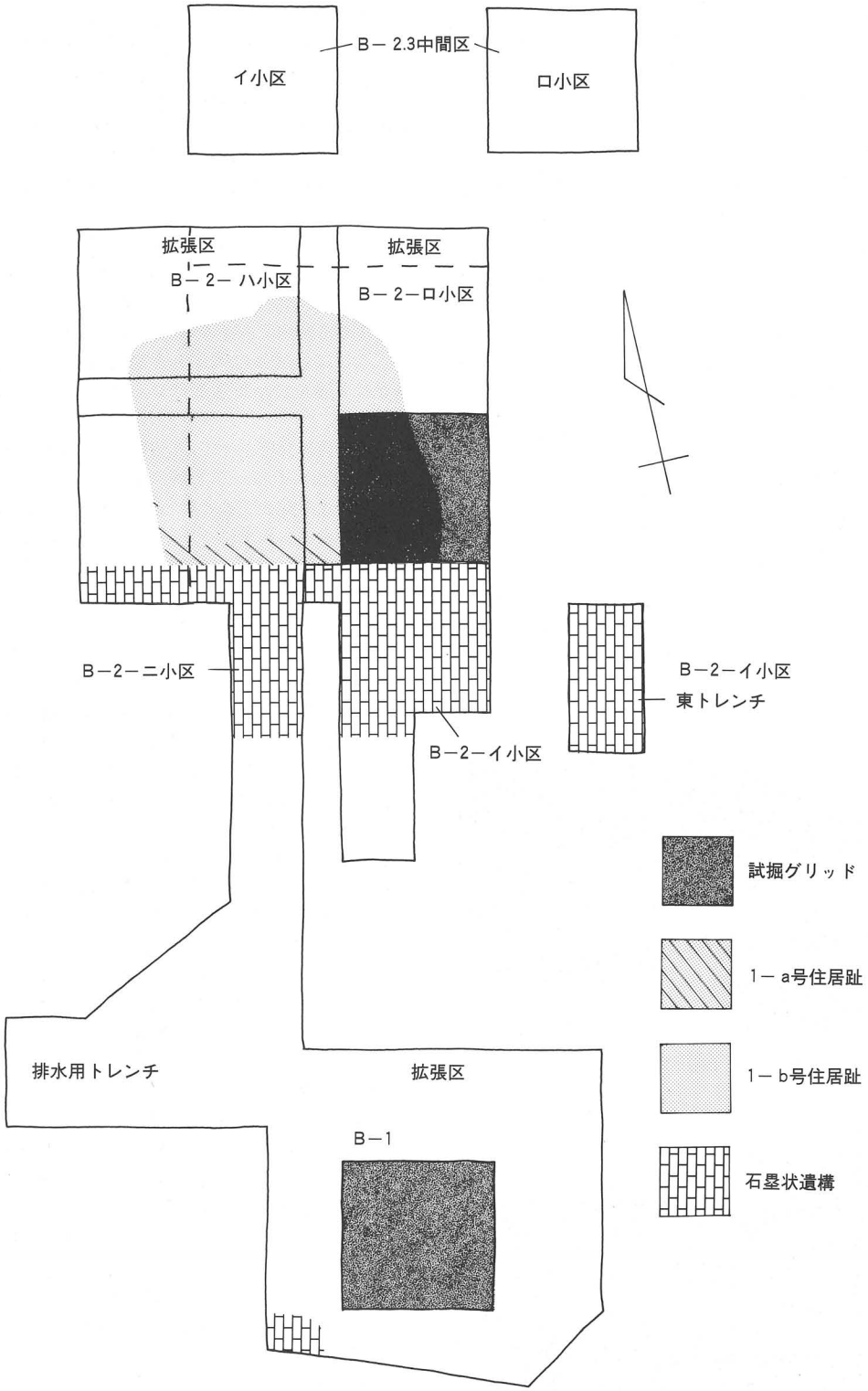
この区でも試掘の際に住居址らしい遺構の存在が知られていたので、試掘区のC–4区を8×8 m の大きさに拡大、中央に十字のセクションベルトを残して4小区（イ、ロ、ハ＝試掘区、ニの各区）を設けた。

本日はイ、ロ、ニ小区の第1層を除去した。ニ小区からは、須恵器蓋坏の蓋の破片等が出土している。

③D 区の調査

＜D–4区（田浪・町民有志）＞

試掘時C–4区では、住居址かと思われる遺構様




第11図　B–1～2区発掘区域見取図

の陥ち込みが2ヵ所認められていた。そこで今調査では試掘区の西に、この区を含めて4×4 m、東側にも4×4 mのグリッドを設けて、遺構検出を図ることにした。中央には十字のセクションベルトを残し、試掘区をニ小区として他をイ、ロ、ハ小区とし、それぞれを3～4㎡の範囲で掘り下げた。本日はⅠ層の除去に留めた。

7月22日（快晴）

①B区の調査

第1–b号住居址の検出作業

＜B–2区＞

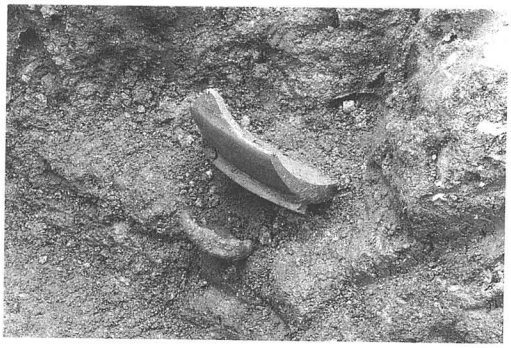
イ～ニの各小区で注目すべき事実がそれぞれ確認された。イ小区では、「L」字サブトレンチの北寄りで石塁状遺構がはっきりと検出され、南よりではこの遺構を覆う形で、例の黄色粘土層が露呈、さらにその下部に厚い砂層が堆積していた。

イ小区に対応するニ小区でも石塁状遺構の露出と区内の精査を続行したが、出水がひどいため、区の西側を切り開いて排水することとし、重機で排水用の溝を切った。

ロ小区では、試掘区の東と西の区画を引き続き掘り下げ、試掘区で捉えられた黄褐色面（Ⅳ層＝地山の上面）の陥ち込みラインを追った。しかし北側ではこのラインは明瞭には確認できなかったので、試掘区の南西壁際にサブトレンチを設け、Ⅱ層の下部の状態を追及した。その結果、Ⅱ層下部も大きく2層に分かれることが判明。Ⅱ－②・③・④層は竪穴住居址の埋土であり、Ⅱ－⑤層は貼り床をつくるために踏み込まれた層であることがわかった。この住居址は1–b号住居址とする。Ⅱ－⑤層下位で確認された床面は1－a号住居址のものとした。

ハ小区では、Ⅱ－②・③層まで掘り下げた。ここではⅡ－②層からⅡ－③上部にかけて須恵器で輪状のつまみのある蓋坏の蓋片や高台付坏の破片が検出され、1–b号住居址が奈良時代のものであることが予測された。

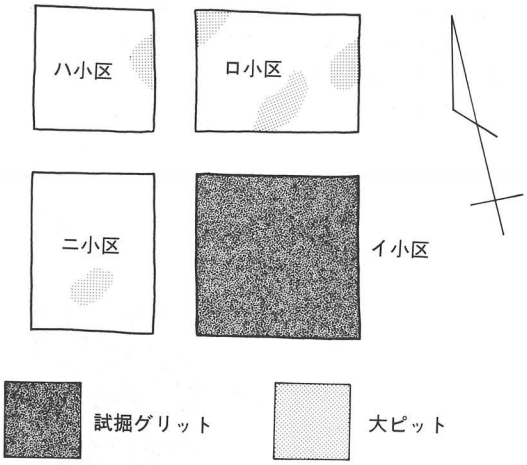
ニ小区では暗灰色の粘土層（Ⅰ－⑤）とⅡ層の関係を説明するために掘り下げた。結果として、この粘土層はⅡ層より新しいものであることが知られた。



第1–b号住居址覆土中の須恵器出土状態

＜B–3区＞（第12図）

本区では、イ、ロ、ハ、ニ各小区のⅠ層下部からⅡ層上部まで掘り進めた。ハ小区のⅠ－②層より、近世陶器片（唐津焼）が出土。




第12図　B–3区発掘区域見取図

②C区の調査

＜C–4区＞

本区では、イ、ロ、ハ、ニ各小区に設けた「L」字形サブトレンチのⅡ層上部までを掘り下げた。遺構の存在は確認できないが、ハ、ニの小区ではⅡ層上部まで土師器片、須恵器片（東播系土器を含む）が少量出土。

③D区の調査

＜D–4区＞

本区では、イ小区を2分し、中央十字セクションベルト側をⅡ層上面まで掘り下げたが、試掘時のニ小区の陥ち込みに連続するような遺構は検出できなかった。ロ小区はⅡ層上面まで全体を掘り下げ、この面で多数の土器片を得た。これらの破片は弥生前期のものと思われる。ニ小区は、試掘区を西側に2

×1 m 程拡張する。土器片1個を検出。

7月23日

①B 区の調査

＜B–2区＞

イ小区では、露出した石群を精査。これが東西方向に延びる石塁状遺構の一部であることを確認する。ロ小区では、試掘時に確認されたⅣ層（黄褐色土層・地山）に掘り込まれた遺構の検出に務めた。その結果この掘り込みは、昨日のサブトレンチで捉えられた1–a 号住居址の東側の壁と判明。壁下には壁溝も一部認められた。またロ小区の北側では、Ⅱ層の中位に固い褐色土の面が検出され、これは1–b 号住居址の床面であることが知られた。ハ小区もひき続きⅡ層を掘り下げ、1–b 号住居址の壁と床の検出に務めた。この小区では土器片がかなり出土したが細片のため特徴不明。

＜B–3区＞

ロ小区をⅡ層の中部まで掘り下げる。須恵器の小片出土。ハ小区もⅡ層下部に達する。Ⅰ－②層より陶器片と棒状の鉄製品が出土した。近代のものか。ニ小区は地山（Ⅳ層）直上まで下げた。ピット状の遺構が数個所ある模様。

②C 区の調査

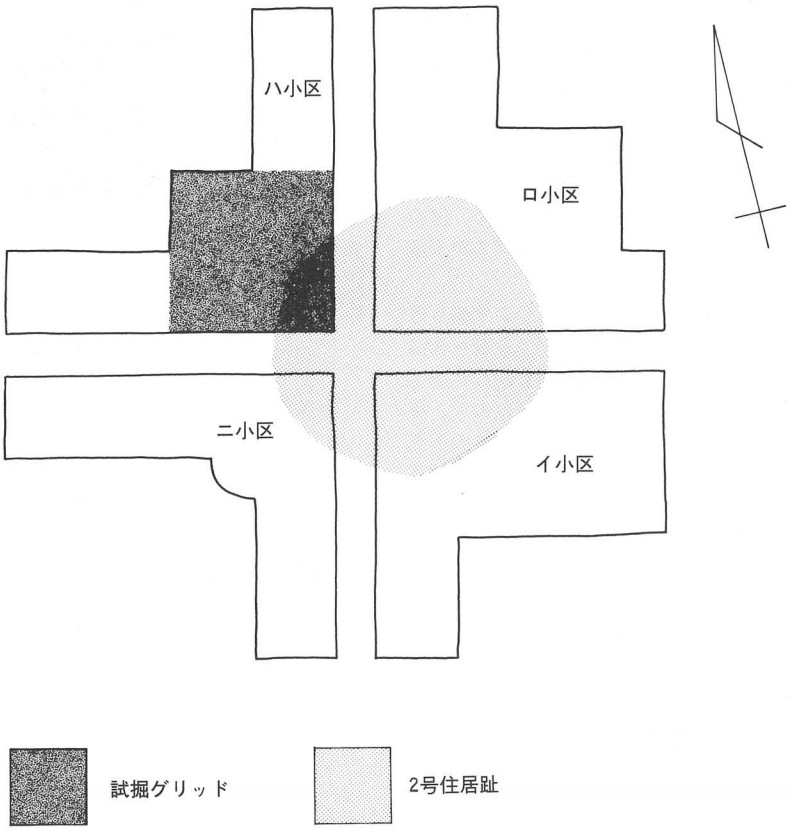
＜C–4区＞

各小区とも十字のセクションベルト沿いに設定したサブトレンチを掘り下げた。イ小区では耕作土（Ⅰ層）を除去。ロ小区でも耕作土の除去を終える。ハ小区（試掘区）はⅠ層の下部まで下げ、ニ小区では地山（Ⅳ層）上面のレベルまで掘った。この区の北東部、つまり、十字のベルトが交差する部分ではⅣ層は検出されず、黒色ないし黒褐色土層（Ⅱ層）の上面が露呈した。また、この小区のL字形トレンチの南側でピット3個が検出されたが、性格は掴まれていない。掘り込み面はⅡ層上面。出土遺物は土器の小片のみ。

③D 区の調査

＜D–4区＞

イ、ロ小区ではⅡ層上部（淡・暗黒褐色粘質土）で土器片が面的に分布する状況で検出された。これらは一個所に集中することなく平均的散布状態を示している。実見したところでは前期の弥生土器から古式土師器が多く古墳時代後期の土師器と須恵器片も散見された。イ小区から出土状態の記録に入る。ハ小区はⅡ層上面を検出。




第13図　C–4区発掘区域見取図

7月24日（晴・暑い）

①B 区の調査

＜B–2区＞

昨日に続いてイ、ニ小区では石塁状遺構の規模や構造、それが延びて行く方向の確認のための調査を行った。この遺構は、遺跡が立地する段丘平坦地の南縁沿いに築かれた可能性が高い。頂部は、やや平に石を並べ、南面は火山の裾状に傾斜するように構築されている。端部には大型の石を配して崩落止めにしていた。本日はこの遺構の東側への延びを確認するためイ小区の東側に1×2 m のトレンチを設けて掘り下げた。ここではⅠ－②層下ですぐ石塁が現われ、その頂部より、白磁の小皿が出土している。

ロ小区では、1–b 号住居址の東壁検出作業続行。論理的には、1–a 号住居址の壁と1–b 号住居址の壁がどこかで分岐することになるが、分岐点ははっきりしない。

ハ小区では、区画の北半分を掘り下げたところ1–b 号住居址の北壁が露われた。出土土器片の量も多い。これらには弥生土器、古式土師器、須恵器が含まれており、層位的にはⅡ－①～③層より検出されている。最も後出の土器は、Ⅱ－③層(1–b 号住居址の埋土）から出土した輪状つまみの須恵器の坏蓋で、これは1–b 号住居址の時期決定の資料となりうるものである。

ニ小区は本日は作業を行わなかった。

＜B–3区＞

ロ、ハ小区ともに地山（Ⅳ層）上面にまで掘り進む。大小のピット状の陥ち込みが認められるものの、性格は明らかにできない。ハ小区は礫も多い。ここではⅣ層に突きささった杭が検出されたが、時期は不明。

C–4区付近の発掘風景（東から、手前右 C–4–ロ小区、左同イ小区

②C 区の調査（第13図）

＜C–4区＞

イ、ロ小区ではⅠ層の除去を進める。近世の小型の陶器碗片が出土。ハ小区は「L」トレンチの試掘グリッド部分を除く北、西部を掘り下げた。ここでは黒褐色土層（Ⅱ層）が広がっていてⅣ層は見えてこない。したがって、ニ区で見られたⅣ層への掘り込みラインは検出されず、住居址として確認することはまだできない。

第2号住居址の検出作業

③D 区の調査

＜D–4区＞

イ、ロ小区ではⅠ層（耕作土、床土）下に黒褐色～明褐色で赤味を帯びた粒子を含む砂質土（Ⅱ層）が広く堆積している。この層には多量の土器・陶器片が包含されていたので、この状況をさらに追求するために小区を拡張してⅡ層を掘り下げた。その結果多数の小土器片が、ぱらぱらと散布している状況をさらに確認することができた。土器片には前・中期弥生土器から古・新の土師器、奈良時代以降かと思われる須恵器等が含まれている。この事実からD 区のⅡ層もオリジナルな形成層とは考えられない。

検出された土器片の記録を作成する。出土レベルは、371.5～70 m の範囲にまとまる。短時間に形成されたと推定できよう。ハ小区も本日Ⅱ層を掘り下げて、土器片の検出作業を行う。状況はイ、ロ小区と同様。小土器片のトータルは200個近い。

7月25日（晴）

①B 区の調査

＜B–2区＞

まずイ小区の東側の小トレンチを精査し、石塁状遺構の状況把握に務める。これが、B–2－イ，ニ小区で検出された石塁の様相と同一である。

ロ小区では、1–b 号、1–a 号各住居址の重複状態を確かめるために、東壁のラインを追求し続けた。試掘区内では両者の重なり合いを明瞭に捉えることができないので、東壁ラインの状態と、確認された1–b 号住居址の床面を頼りに両住居址の境を探したが、本日のところははっきりした結果を出すことはできなかった。

ハ小区は引き続き1–b 号住居址の覆土と思われるⅡ層中位を掘り広げた。1–b 号住居址の床面らしき固い面に接して高台付きの坏底部が検出され、この住居址が奈良時代でもやや新しい時期に営まれた可

能性が考えられた。その他、古式土師器片や須恵器片4点が出土している。

＜B－3区＞

ロ、ハ、ニ小区ともⅡ層をほぼ除去してⅣ層上面近くに達したが、明確な遺構らしきものは検出されない。大小浅深それぞれのピットがいくつか存在するようであるが、性格は捉えられない。Ⅳ層上面には礫もかなりある。出土遺物はない。

②C区の調査

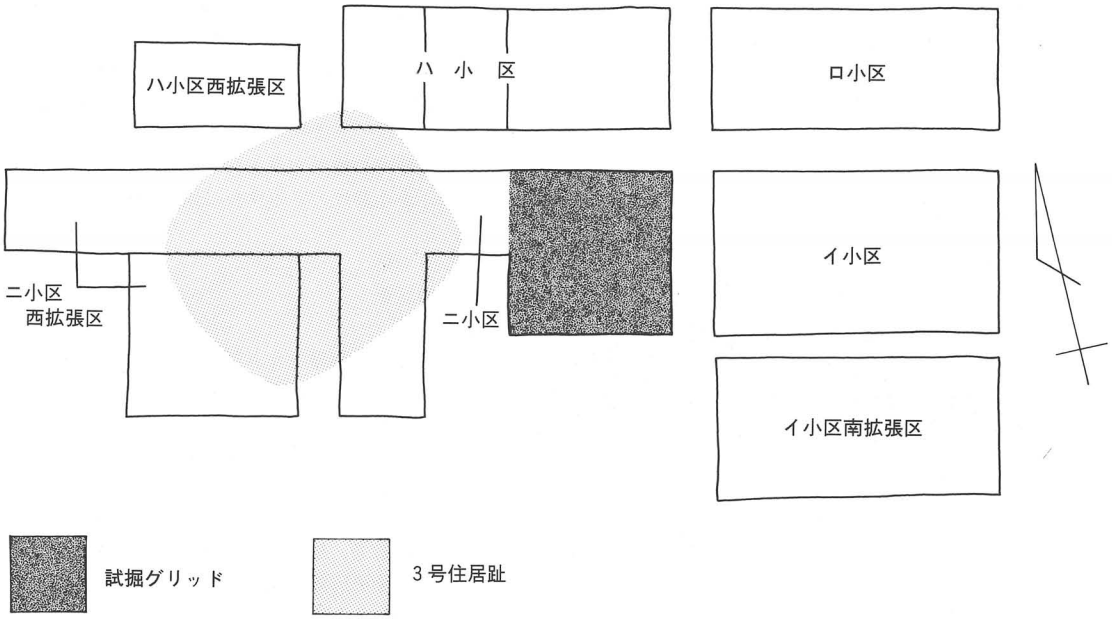
＜C–4区＞

イ小区の「L」字トレンチ掘り下げにようやく手を着ける。Ⅰ層を除去。ロ小区では引き続きⅡ層を下げて、住居址と思われる遺構のⅣ層への陥入ラインの検出に務めた。本日のところはまだ確認できない。ハ小区はⅡ層下位を掘る。土器片が何個か検出されたが、土師器と思われるものの小片である。ニ小区も引き続いてⅣ層に切り込んだ遺構の「肩」＝陥入ラインを検出することに取り組む。完掘には至らない。前日のピットは最近の農作業の杭穴かもしれない。

③D区の調査（第14図）

＜D–4区＞

イ、ロ小区では出土土器の記録（位置とレベル）、写真撮影を行い、終了したところからⅡ層をさらに下げることにし、一部作業に取り掛かった。ハ小区も同様にⅡ層掘り下げを続行する。ニ小区は、試掘区の西側にトレンチ（0.5×2 m）を設定して、発掘範囲を西に拡大し、試掘区で検出されていた遺構状の陥ち込みの広がりを追うことにした。その結果西方に黒褐色土（Ⅱ層と同じような土層）の陥ち込みがあることを確認した。住居址の可能性があるようだ。なお試掘区内の他の陥ち込みは砂質の黄褐色土層（Ⅳ層・地山）の凹部分に黒褐色土（Ⅱ層）が詰まったものと判明。遺構とは認めがたいようである。




第14図　D–4区発掘区域見取図

2号住居址調査風景（南から）

2号住居跡（C–4–ロ小区）調査風景（東から）

7月26日（晴）

①B 区の調査

＜B–2区＞

イ、ニ小区では石塁状遺構の精査を続行する。長大な規模の遺構ではあるが、時期や、何のための施設かは判然としない。石塁を覆っている土層について整理しておくと、少なくとも頂部から裾部近くまでⅠ層が被っており、その限りではかなり新しいものと思われるが、確定はできない。この辺りのⅠ層下部はヘドロ状の黒灰色土層で、出水が激しく、精査は困難である。

ロ小区は、1–b 号住居址の東壁から住居址の北東のコーナーを追求するが、結論を出すには至らない。ハ小区でも1–b 号住居址の床面らしい固い面を手掛かりに、その広がりを追う。北端ではⅠ層の下部（Ⅱ層上面）で焼土が検出された。かなりしっかりした焼土で住居址等にともなうものかも知れず、第3の住居址の存在を考慮する必要がある。

＜B–3区＞

本日でイ～ニ小区いずれもⅡ層をほぼ掘り下げた。遺物は少量。この限りでは明確な遺構の存在は期待できない。

＜B–2～3区中間区（中木・小宮）＞

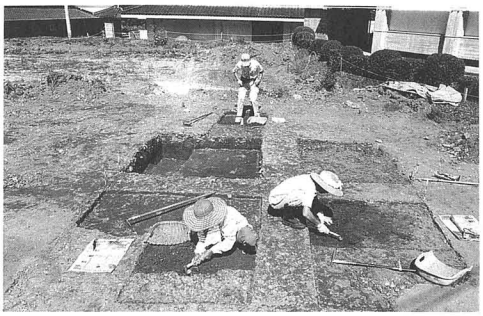
本日、調査中の B–2区と B–3区の中間に2箇所小グリッドを設定して掘り下げることにした。1号住居址群の北側に遺構が存在するかどうかを確かめるためである。設定後にⅠ層を除去。

②C 区の調査

＜C–4区＞

イ小区は勝瀬、原田、守岡 OB 3氏の応援を得て「L」字トレンチの両端でⅣ層（地山）への陥入部を押さえることができた。またロ小区の「L」字トレンチ東端部で陥入ラインを検出。それがイ小区の陥入部とつながることが予想された。北方向では陥入ラインははっきりせず、Ⅱ層をさらに下げてみる。

ニ小区では先日来のⅣ層に陥ち込んでいる黒褐色土（Ⅱ層）を除去し、陥入部の底を検出。ほぼ住居址の床と確認した。ハ小区は、各小区の確認状況をうけて精査を続け、陥入ラインの検出に務めたが、見つけることはできなかった。この一帯は礫が多く、検出は困難と思われる。しかし、全体的には C–4区で1棟の住居址が検出される可能性は高まったといってよい。



D–4区発掘風景（東から、手前左＝イ小区、手前右＝ロ小区）

D–4–イ、ロ小区土器検出作業風景（東から）

③D 区の調査

＜D–4区＞

イ、ロ小区の記録作業を終了、すべての土器片を収納したあとでさらにⅡ層を下げる。土器片は、まだ出てくる。縄文晩期の土器片がみられ、包含された遺物の年代幅はさらに広がった。ハ小区は、検出

土器の記録作業を行う。ニ小区は先のトレンチ両端で現われた黒褐色土層を注意深く調査。陥ち込みラインがしっかりしており、これも住居址となる可能性が高まりつつある。黒褐色土層（Ⅱ層）中より、古式土師器の甕の口縁出土。

D–4–ロ小区土器出土状態（西から）

7月27日（晴）

①B 区の調査

＜B–2区＞

本日は調査員、作業員不足でハ小区の床面検出を若干行うに止まった。

＜B–3区（家塚）＞

ロ、ハ、ニの各小区はいずれもⅣ層（地山）の上面に達し、イ～ニ小区全体を清掃し、皿状の陥ち込みとピットについて精査した。確認できた限りでは、これらのものはⅣ層上面から陥ち込んでいるように思われ、何らかの遺構にともなうもの、もしくは遺構を構成するものと考えられる。しかし、その実体を考定できるような状況にはなく、明確にするためには調査範囲をさらに拡大する必要があろう。

＜B–2～3区中間区＞

2箇所設定したグリッドのうち西側をイ小区、東側をロ小区とする。イ小区ではⅠ層下にⅡ層とした黒褐色土の存在することが知られ、その厚さは0.3～0.4 m で、B–3区のそれと比べると、かなり薄い。その分だけ茶褐色のⅣ層（地山）が高くなっている。地山面には皿状の陥ち込みやピットが見い出された他、大型の平たい割り石が検出された。

ロ小区は小トレンチでⅡ層の状態を検討しながら地山面を検出する。状況はイ小区とほぼ同様である。

②C 区の調査

＜C–4区（本日より担当者交代、勝部担当）＞

イ小区は昨日、「L」字トレンチの両端でⅣ層へ切り込まれた陥入ラインを押さえることができ、ロ小区も「L」字トレンチの東端で同様のラインを確認した。

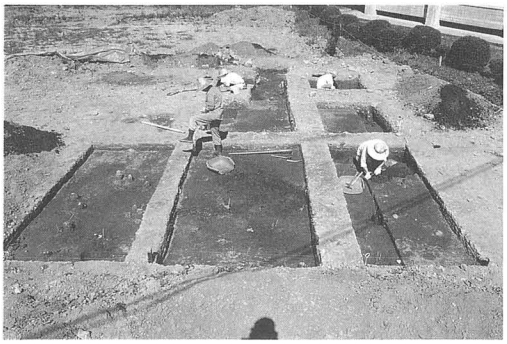
本日は、これを住居址の壁かどうかを確認するための調査を行ったが、東端ではⅡ層の黒褐色土は薄く、壁と思われる部分の立ち上がり具合もあまり明瞭ではない。「L」字トレンチ西側部分は黒褐色土中に礫が多く含まれ、壁らしい遺構の検出は難しい。そこで、東側の陥入状況を参考にして、北東側の壁ラインを追ってみたが、Ⅱ層中に鉄銹が0.4×1.2 m ほどの範囲に広がっていることが知られたために、この作業は中断した。本日はロ小区の以上の調査に終始した。

③D 区の調査

＜D–4区＞

イ、ロ、ハ小区ともⅡ層の掘り下げを続行。検出された土器は弥生前期、古式土師器、奈良時代かと思われる須恵器等の破片である。またイ小区の南に1.5×4.0 m の拡張区を設け、Ⅰ層を除去した。土器散布の範囲を押さえるためである。

ニ小区の西方向へ延長した小トレンチで検出された陥ち込みは、壁と床面が捉えられたので住居址としてよいと思われる。



D–4区付近の発掘風景（東から、手前左からイ小区南拡張区、イ小区、ロ小区）

第3号住居址の検出作業（東から、手前左からニ小区・拡張区、右ハ小区・拡張区）

7月28日（晴）

①B 区の調査

＜B–2区＞

イ小区の東8 m で2ライン(EW の基準線）を起線として南へ2×3.5 m のトレンチを設定して石塁の延び具合を追求することにした。Ⅰ層上部の砂質土を取り除いたところで遺構頂部の石を検出し、ここまでこの遺構の続くことを確認した。まだ東へ延びていくと思われるが、調査範囲内では、これの以上追求はできない。

ロ小区では北東部を中心に1–b 号住居址の東壁やコーナーを追求する。1–b 号住居址の外側と思われる個所の地山（Ⅳ層）面に礫石を円形に配した石囲炉のような遺構が検出された。

ハ小区では1–b 号住居址の北壁と床面が検出されたことを承けて、調査区を西方向へ1.5×4 m ほど拡張し、Ⅰ層を除去。ニ小区は引き続き1–b 号住居址の床面を追求。1–a 号住居址とどの辺で重複しているかは掴みきれないが、1–b 号住居址の南壁（Ⅱ層の黒褐色土中にあると思われる）は石塁状遺構の北縁までには及んでいないらしい。

＜B–3区（担当者交代、家塚担当）＞

イ～ニ小区とも検出されたピットを精査する。イ小区（試掘区）では、露出されたピットの性格や重複したピットの前後関係とピットの深さ等を検討。柱穴らしいものとそうでないものがある。深さも一様ではなく底に小礫を埋めたものもあった。ロ小区では、イ、ハ小区のピットの配列に対応するものがあるかどうかを調査する。ハ小区では皿状ピットについて精査。掘込み面はⅡ層中と考えられるが、確かな面は捉え切れない。

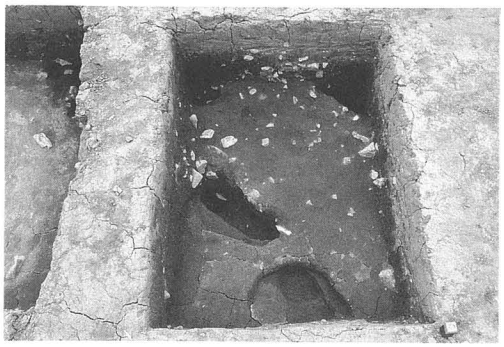
②C 区の調査

＜C–4区＞ (PL 14)

天気続きで土のひび割れがひどくなり、土色の識別が難しくなる。本日もイ、ロ小区で「L」字トレンチの状況を中心に住居址の輪郭の確認と、壁の検出に務める。イ小区では、「L」字トレンチの南北方向で壁床面検出に成功。2号住居址の様態がかなり明確になってくる。隅円方形のプランが予想される。また床面からは大型の甕形土器が大石の下に潰されたような状態で発見された。赤褐色、胎土は緻密、口縁部は弥生前期の甕形土器に似ている。あまり見かけない土器のようだ。

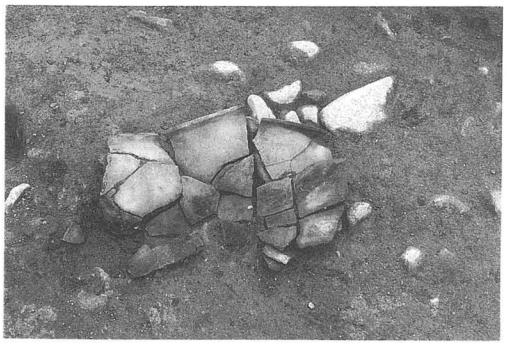
ロ小区は鉄銹の性格が掴めないので本日は作業ストップ。イ、ロ小区からはⅡ層の中位で多くの古式土師器片が検出される。中には口縁端部を内側に少しつまみ出したような甕形土器片（いわゆる布留甕の特徴を持ったもの）が散見され、この住居址の所属期について示唆するものがある。

B–3–イ小区北西隅ピット（東から）



B–3–ロ小区ピット群検出状態（東から）

2号住居址内土器の出土状態



2号住居址内土器の出土状況

③D 区の調査

＜D-4区＞

イ小区の南側に設けた拡張区ではⅡ層相当の土層を掘り下げたが、土器片は数点で、イ、ロ小区の集中的分布範囲は、この区までは及んでいないことが判明する。ハ小区ではⅡ層を下げるも遺構は見当たらない。ニ小区の西方に設けたトレンチでは住居址床面が掴まれたので、これを追ったところ途中でⅡ層が撹乱され、床面も変形していることが明らかになった。つまり、西方は水田面が一段低くなっていたのでこの住居址の覆土と床面は耕地造成の際に破壊されたものと思われる。

7月29日（晴）

①B 区の調査

＜B-2区＞

ロ小区の北東部の精査を続行し、ようやく1-b 号住居址の北東コーナーを検出。その近くには昨日発見した石囲いのなかには焼土が認められたので石囲炉としてよいと思われるが、出土土器がないため時期はなお不詳である。

ハ小区では西拡張部を精査し、ここでも北西のコーナーを捉えることができた。その結果、1-b 号住居址は一辺約3 m の方形住居であることが分かってきた。ハ小区の南半分の拡張区でも位置付け層を除去、Ⅱ層を掘り下げて床の検出に務めた。

イ小区の東に設けたトレンチは石塁状遺構の上面を精査。

出土遺物はすべて土器片。ロ、ハ小区のⅡ層から検出されている。とくにハ小区の1-b 号住居址の北西コーナー付近からかなりまとまって出土している。古式土師器片がいくつかみられるが、多くは奈良時代以降の須恵器坏片で、一片だけ土師器の大皿片があった。

発掘が進む B-1区、2区（北から手前左 B-2-ロ小区、右同ハ小区）

第1-a 号住居址の発掘（北から、手前左 B-2-ロ小区に石囲い遺構）

＜B-3区＞

昨日に続いてピットの精査を進める。イ小区（試掘区）では明確に柱穴としてよいものは2例で、穴底に礫を埋めているのが特徴。他小区もピットの精査。いまのところでは建物の構造を想定できるようなピット配列を読み取ることはできない。

＜B-2～3区中間区＞

ロ小区では人頭大、拳大の円礫、角礫が集中して発見された。これらはブロック状にまとまる部分と、小礫が列状に配されているかのような観を呈している。いずれもⅣ層上面に固定されたようにも思われ、遺構の可能性がある。

②C 区の調査

＜C-4区＞

イ小区では壁と床面の検出作業を続行。床と壁の接する個所に拳大のやや平たい礫が並び置かれたような状態で見い出されたが、これが果たして人為的

なものか否かは、他の小区の状態と合わせての検討が必要であろう。東壁の切り込み方はあまりシャープではない。

ロ小区については、2号住居址の壁の外にもう一段高い壁様の切り込み（Ⅳ層へ）があり、住居址が重複している可能性が生じた。鉄銹の広がりの問題もあるので、「L」字トレンチを拡大し、小区全体の位置付け～Ⅲ層除去を行った。なお住居址内の床面直上から二重口縁の壺形土器片群が出土し、住居址の年代決定の有力な手掛かりとしてよいように思われる。実見したところでは「大木式」もしくはいわゆる「小谷式」の古い相を持っているようである。

③D 区の調査

＜D－4区＞

イ小区では土器片を取り上げながら、Ⅱ層を掘り下げ続行。採取した土器は、弥生前・中期から古墳時代後期の土師器である。この層の堆積状況を示唆している。

ロ小区でもⅡ層を除去するとⅣ層上面（茶褐色の砂質土層）に不定形の浅いピットが、蜂の巣状態に現われ、ピット埋土（Ⅱ層）に土器片が含まれるケースもあった。しかし、その形状、分布状態からは遺構とは認め難いようである。ニ小区の陥ち込みは住居址と判断したが、本日トレンチ内の精査によって確定的となる。3号住居址とする。

7月30日（晴後曇）

①B 区の調査

＜B–2区＞

ロ小区とハ小区をそれぞれ北側へ1 m 幅で拡張する。その結果、石囲炉の全景が明らかになり、1－b 号住居址の北東コーナーをより明確にすることができた。また南北方向のセクションベルトと北壁が重なる個所で炭化物が検出され、カマドの存在が予測された。

ハ小区では昨日の拡張区で1－b 号住居址の西壁を捉える。壁際には溝が巡っていることも判明した。そして南西部のコーナーも検出できたが、あまりしっかりした状態ではない。おそらくⅣ層上部に堆積した地層に住居址が掘込まれたために、容易に発見できなかったのではないかと思う。この南西コーナー直下には1－a 号住居址の床面が検出されている。

出土遺物としては、ロ小区拡張区のⅡ層より奈良時代以降の須恵器の坏片と、Ⅰ層上部から東播系の須恵器の鉢の口縁部が出ている。

＜B–3区＞

イ～ニ小区でピットの精査を進めた。ロ小区の北西隅にある皿状の陥ち込みにつながるかもしれない。ニ小区では柱穴としてよいピットはない。

＜B–2～3区中間区＞

検出作業を終了して、本日より実測に入る。この2つのグリッドをどう評価するかということについては、以下のようにまとめたい。

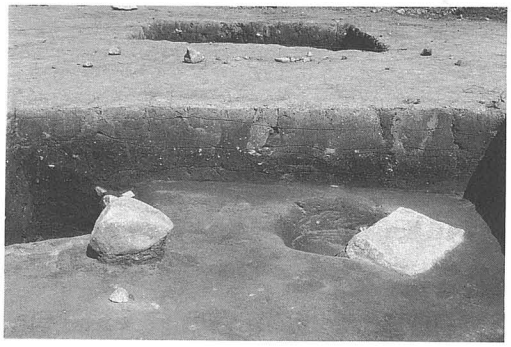
(a)ピットの分布には、規則的な配置状態は見られないが、イ小区の方形の平たい割石が皿状ピットになかば収まるような形で検出されたことや、ロ小区で礫が集中状態で、あるいは列状をなしているかのような状態で検出されたことなどから、この区が何らかの建築物の一角を構成していた可能性はある。

(b)層位的にはⅣ層（地山）上に黒褐色土層（Ⅱ層）があり、さらにⅠ層が重なるという状況はB，C，D 区と同様であり、Ⅱ層が遺物包含層であることも変わりない。

Ⅳ層上面は平坦でピットの切り込み面、礫の分布面をなしている。Ⅱ層下面とは不整合であることなどから考えて、この面が人為面であった可能性は高い。ロ小区北壁で確認された立石状の礫もⅣ層上面をベースにして立てられたと思われる。

(c)隣接する、B–2区，B–3区の状況と付き合わせても、Ⅳ層上面が生活面ないしは遺構面であったと見る方がよい。但し、その時期については明言はできない。

B–2～3中間イ小区遺構検出状態（東から）



B–2～3中間イ小区東壁断面（西から）

②C 区の調査

＜C–4区＞

ロ小区の拡張区を中心に作業を行う。昨日3号住

居址によって切られた住居址が存在するとの予測に基づいて、3号住居址の外側を精査したが遺構と断定できるようなものは見い出せなかった。今後は、3号住居址の輪郭と床面の追及に絞って作業を進めたい。鼓形器台片を検出。

③D 区の調査

＜D–4区＞

イ、ロ小区ではⅣ層上面にみられた浅い凹群の精査を行う。雲形とでもいうような不定形の凹が群衆状態をなしているのだが、分布には規則性は認められず、遺構とするには躊躇する。

ハ、ニ小区で西側、東側に発掘範囲を拡大し、住居址の輪郭と床面の追求を行う。ハ小区では、北西のコーナーが検出され、ニ小区の拡張部分でも床面を捉えることができた。

**7月31日（晴後曇）**

①B 区の調査

**1–b 号住居址調査風景（北東から）**

**1号住居址・石墨状遺構調査風景（南東から）**

＜B–2区＞

ロ小区では、北東側の石囲炉周辺を精査した。この遺構は、人頭～拳大の角礫を楕円状に並べたものであるが、礫と礫とは少しの間隔があり、列状に並べたものには石列に接して石敷のような部分があり、これもセットとなる遺構のように思われる。

ロ小区で検出された北東コーナー近くでは造り付けのカマドの一部が発見された。昨日の炭化物はこのカマドにともなうものである。

ハ小区の北壁でもカマドが検出され、これはロ小区の遺構と一体のものである。また南部では1–a 号住居址の床面が石墨状遺構に接して検出され、石墨状遺構から1 m ぐらいの北辺から1–b 号住居址の床面（貼床）が広がる。また1–b 号住居址の南西コーナー近くにやや大きなピット（径0.6 m）が検出された。底には大小の角礫が敷かれていた。これが1–b 号住居址の施設か、後世のものか判断できない。本日で西壁と壁沿いの溝をすべて検出した。

出土遺物としては、1–a 号住居址の覆土であるⅡ－⑥層から古式土師器に属するかと思われる鼓形器台の一部が出土している。1–a 号住居址の年代推定の参考になる資料である。

＜B–3区＞

ロ～ニ小区の平面図を作成する。各小区とも大小のピットが存在するが、柱穴とみてよいものや楕円形の坑等が混在しており、今次調査範囲だけではその性格を理解することはできない。少なくとも遺構が存在することはできたというのが結論である。

＜B–2～3区中間区＞

実測作業続行。

②C 区の調査

＜C–4区＞

イ小区は住居址の外廻りを精査。ピットを4ヵ所で検出した。これらが、住居址とどのように関係するかは不明である。ロ小区では鉄銹塊の処理を行う。これは切断してみると黒褐色土を鉄銹が膜状に覆っていることがわかった。黒褐色土中（Ⅱ層下部に相当）には、多数の土器片が包含されていた。これらの土器片は、昨日検出された鼓形器台と一群のものと思われる。鉄銹がなぜ土器群を被覆するような状態で広がったのかは要検討である。

③D 区の調査

＜D–4区＞

イ小区では、例の不定形ピットを精査。全体的には弥生前期の土器片が検出される例が多いが、古墳時代の土器が包含されている例もあり、これまでの検出状況と併せて考えると、別個所から移動した土に含まれていた可能性が高いように思われる。

ハ小区では住居址の北西コーナーらしい陥ち込みが検出された。ニ小区の西方への拡張区では、黄褐色の地山面がほぼ平坦に続いている。しかし、床面の広がりとは断定できない。なぜなら、この地山面上の覆土はⅠ層で、後世水田造成によって地山面が撹乱を受けていると思われるからである。

**8月1日（雨後曇）**

午前中降雨のため作業中止。午後になり雨が止んだので、発掘区に溜まった水を排除して可能な作業

を行った。

①B 区の調査

＜B–2区＞

ハ小区の南西で検出された角礫をともなったピットの実測を行う。北壁に造り付けられたカマドの上部が出てきたのでこれを精査した。さらにイ～ロ小区間のセクションベルト(EW–B)を取り除いて、石塁状遺構の頂部を出すこととし、Ⅰ層を除去。

＜B–3区＞

セクションとりと写真撮影を行う。

②C 区の調査

＜C–3区＞

C–4区の調査が住居址内の精査を主体とするものになったので、人手の一部を割いて＜C–3区＞を設定して、遺構の有無を調査することとし、本日グリッドを設定。Ⅰ層の除去に入った。

＜C–4区＞

雨後で床面の精査、セクションとりができず、ロ小区で検出された土器群を清掃して、写真撮りに備えた。

③D 区の調査

＜D–4区＞

イ、ロ小区で引き続き不定形ピットを精査。ニ小区の拡張では床面を検出することはできないことが明確となる。

本日、隅田正三、岡本利道、大谷晃二、の各氏と今後の調査の進め方について協議する。確認事項は次の通りである。

(1)七渡瀬Ⅱ遺跡の調査

イ）今次の調査は、遺構の存在とその分布を明らかにして、施設建設計画修正のための知見を得ることである。

したがって、現在検出された1号～3号住居址を完掘し、さらに石塁状遺構の広がり、構造，年代解明のための資料を得ることまでを目的として追求する。

ロ）C～D 区の南、E 区から西方の遺構の有無を確認する。

(2)千年比丘古墳群の調査

イ）D 1号は主体部を掘る。

ロ）2号丘が古墳かどうかを確認する。

以上の2点に絞って調査を行う。

8月2日（晴）

本日は作業中止。波佐・長田地区の町民祭に参加し、地元町民と交流する。

8月3日（晴）

①B 区の調査

＜B–2区＞

第1号住居址全体にかかわる南北方向のセクションベルト(NS–B)の断面図を作成する。これにより土層の堆積順を次のように認識した。(第23図，PL 10,上.)

Ⅰ層：耕作土（Ⅰ－①）とその床土（Ⅰ－②）である。

Ⅱ層：黒褐色土層、遺構、遺物を包含する土層である。試掘段階ではⅡ－①（淡灰褐色粘質土層)、Ⅱ－②（明黄褐色砂質土層)、Ⅱ－③（暗黒褐色土層）に分けた。これは水平に薄く広がるⅡ－②層を境に上下に区分したもので、土層の性格としてはⅡ－①層が現耕作土（Ⅰ－①層）に先行する古い耕作土層、Ⅱ－②層がその床土とみた。これらの層からは、弥生土器，土師器，須恵器（奈良時代末か）東播系の須恵器などが出土している。

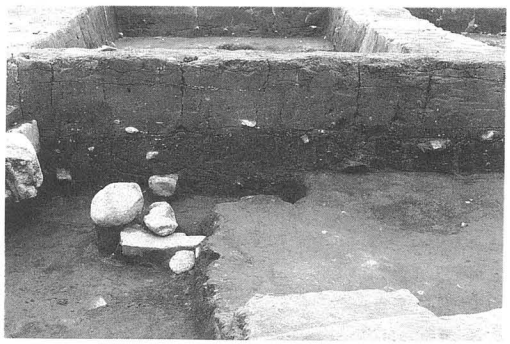
Ⅱ－③層は1–b 号住居址の覆土である。この層中からは奈良時代末かと思われる輪状つまみの須恵器坏蓋などが検出されている。

Ⅱ－④層はカマドの構築にかかわる地層である。当然分布は1–b 号住居址の北壁付近になる。

Ⅱ－⑤層は1–b 号住居址の床として踏み込まれた土層である。

Ⅱ－⑥層は1–a 号住居址の覆土で試掘時にはⅡ－③としたものに相当する。この層から出土したもっとも新しい土器は、弥生時代末ないし古墳時代初頭のものであった。

Ⅳ層：黄褐色を呈する土層で地山である。



1号住居址 NS–B 断面南半分（東から、上面：1–b 号住居址、下面：1–a 号住居址）

1号住居址 NS–B 断面北半分（東から、手前は石塁状遺構）

B–3–ロ小区東壁（西から）

B–3–ロ小区北壁（南から）

B–3–ハ小区遺構検出状態（西から）

B–3–ハ小区東壁（西から）

＜B–3区＞

セクションを記録する。Ⅱ層の細分、Ⅱ層とⅣ層の関係の捉え方に注意が必要である。

＜B–2～3区＞

セクションとプランの記録を行う。イ小区（西側区）ではⅡ層が予想以上に複雑で、ロ小区のⅡ層との関連がはっきりしない。ロ小区のⅡ層はB–2区等と基を、時には同一の様相を示している。

②C 区の調査

＜C–3区＞

昨日設定してⅠ層を除去し始め、本日完了。Ⅰ層はすでに調査に先立って実施された耕作土層の除去中にほとんど取り払われ、薄く残っていた。その下部には地山の黄褐色土層がみられ、Ⅱ層は存在しないことが判明。

＜C–4区＞

ロ小区の土器群の写真撮影終了。出土状況の実測、一部取り上げを行う。露出していた土器片の下からも土器片を検出する。これらは明日実測、取り上げの予定。

③D 区の調査

イ，ロ小区の精査、ハ，ニ小区で住居址の壁、床面を引き続き追求する。

8月4日（曇）

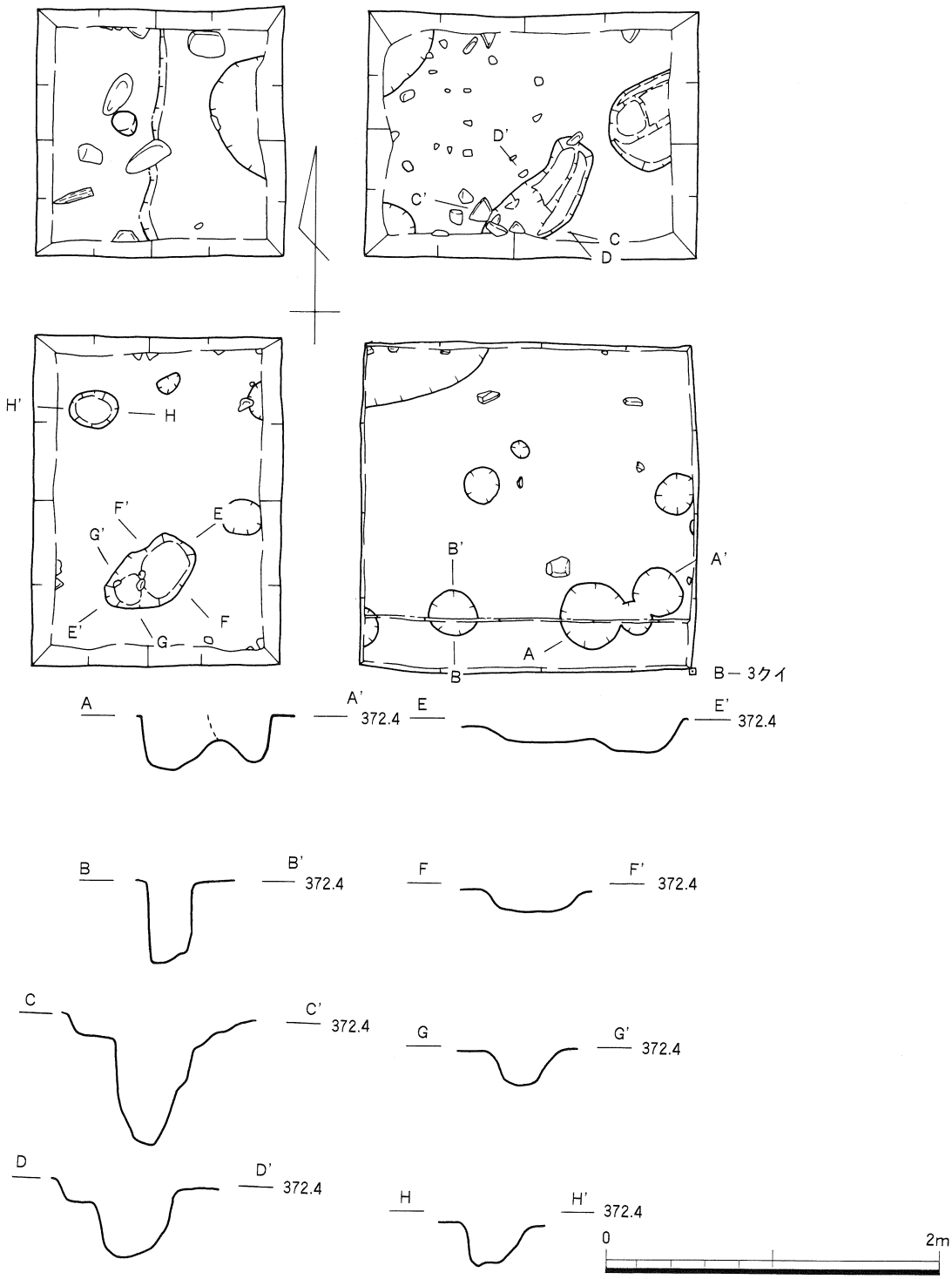
①B 区の調査

＜B–2区＞

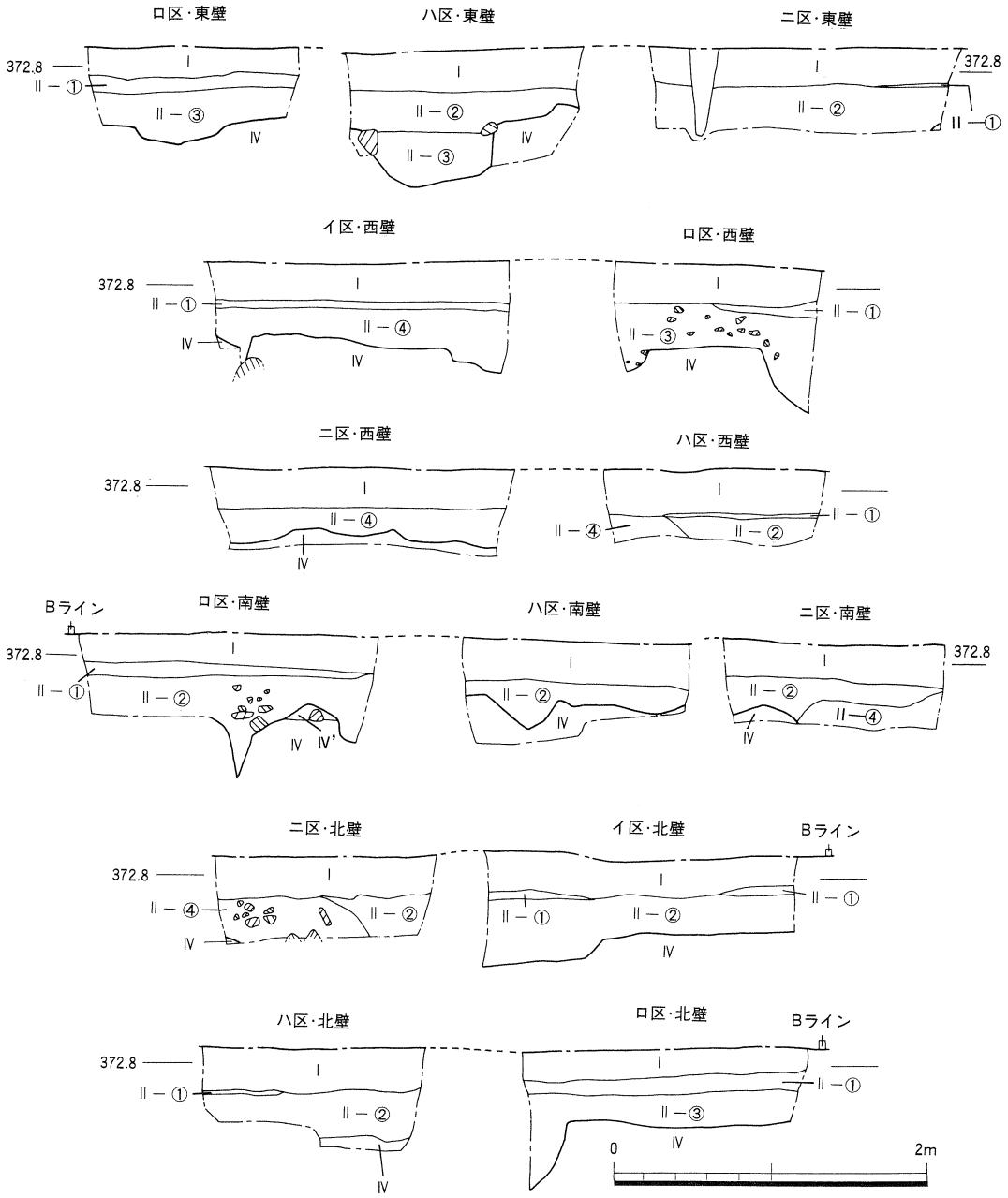
NS–B の除去作業に終始するも未了。

＜B–3区＞（第15図—1，2）

各小区壁のセクションを記録する。本日完了。試掘区（イ小区）では、Ⅱ層を上位の淡灰褐色粘質土層（Ⅱ－①）と下位の暗黒色砂質土層（Ⅱ－②）に細分した。Ⅱ－①層は旧耕作土かとも思われたのであるが、正確な判定は今次調査で行うこととしていた。調査完了時点での分層と各土層の性格についての認識は以下の通りである。




第15—1図　B–3区平面図・ピット断面図




土層名

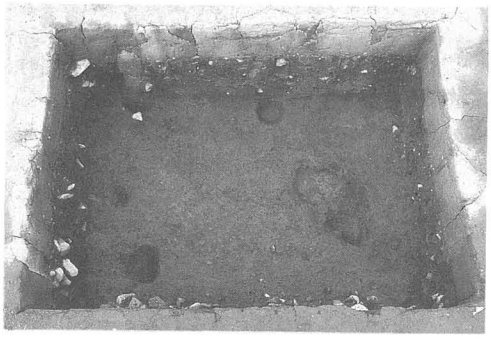
Ⅰ(Ⅰ)層　現耕作土と床土

Ⅱ(Ⅱ)—①層　淡灰褐色～赤褐色土層

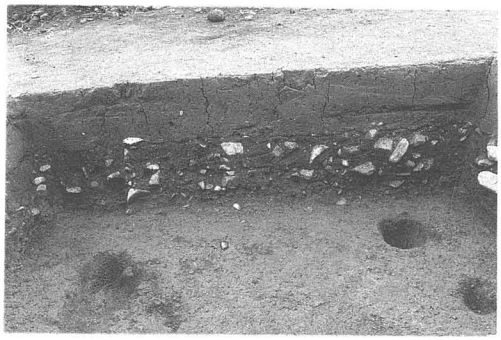
Ⅱ(Ⅱ)—②～④層　暗黒褐色土層群

Ⅳ(Ⅳ)層　地山

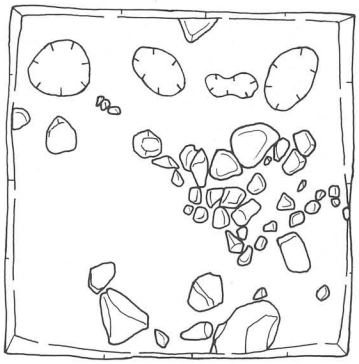
第15—2図　B–3区断面図

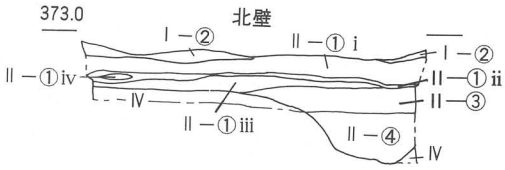


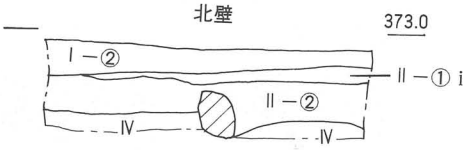
B–3–二小区東壁（西から）

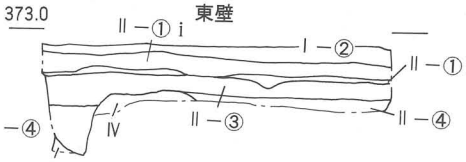


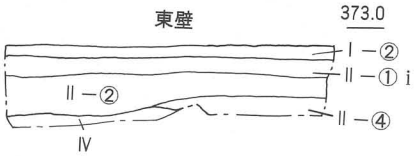
B–3–二小区西壁（東から）



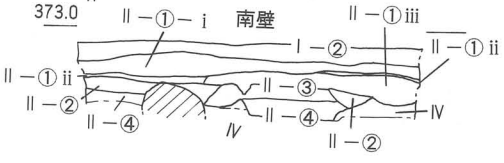


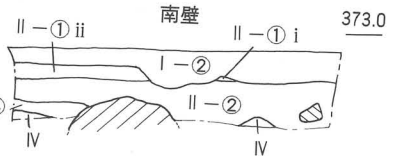



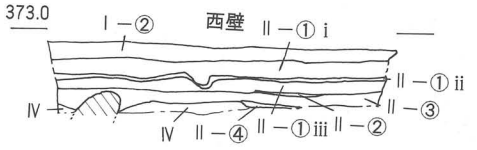



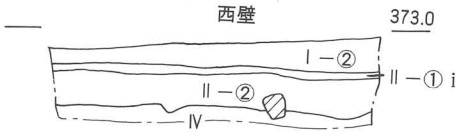




Ⅰ－①　耕作土
　②　明黄褐色粘質土層（床土）
　③　〃　砂質土層
Ⅱ－①－ⅰ　淡灰褐色粘質土層（旧耕作土）
Ⅱ－①－ⅱ　赤橙褐色砂質土層
Ⅱ－①－ⅲ　ⅰに類似
Ⅱ－①－ⅳ　ⅰに類似
Ⅱ－②　暗黒褐色粘質土層（5㎜位のブロック含む）
　③　明橙褐色粘質土層
　④　暗黒褐色粘質土層
Ⅳ　暗黄褐色砂質土層（地山）

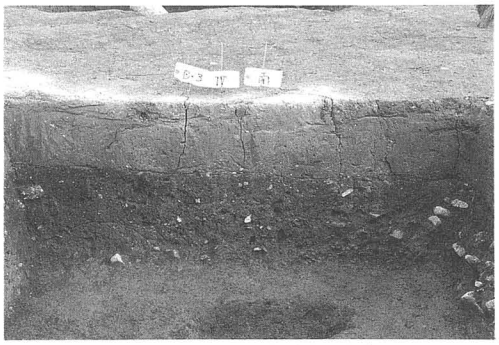


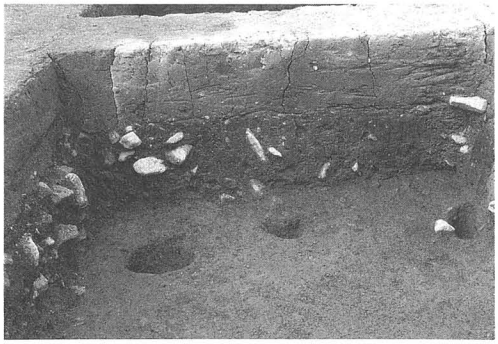




第16図　B–2～3区中間区平面図・断面図



B–3–ニ小区南壁（北から）



B–3–ニ小区北壁（南から）

B–3–ニ小区東壁（西から）

Ⅰ層：現耕作土と床土である。調査着手時点で上位は除去し、下位（Ⅰ－②層）を残した。

Ⅱ層：黒褐色土層として一括し、上位と下位に分層したものであるが、今次はさらに細分してⅡ－①～④の4枚の層に分けた。

・Ⅱ－①層（淡灰褐色～赤褐色土層）は試掘時にⅡ－②層としたものに相当する。比較的薄い層でイ、ロ小区にみられた。B–2区で旧耕作土とした層である。

・Ⅱ－②～④層（暗黒褐色土層群）試掘時にⅡ－②層としたもの、およびそれより下位で検出した層である。礫や粘土ブロックの包含状態によってⅡ－③，Ⅱ－④に分層した。Ⅱ－③層はⅡ－②層と色調、土質はほとんど変わらないが、小ブロックを含まない点を指標にして区分した。Ⅱ－③層はイ，ハ，ニの各小区に広がり、Ⅱ－③層はロ小区で主として検出されている。Ⅱ－④層は角礫、円礫を多数含む層でB–2区全体に広がっている。黄褐色土層（Ⅳ層・地山）の上に直接重なっているが、重合面は不整合である。この層によってカバーされた抗やピットがあり、また、この層を切って掘り込まれたピット等があるので、二時期にわたる遺構群の存在が考えられる。

＜B－2～3区中間区＞（第16図）

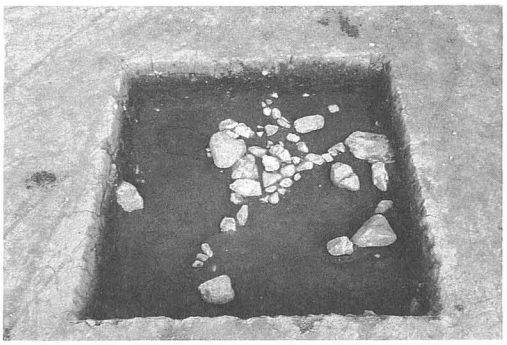
本日セクションとりを完了。その所見を示すと以下のようになる。

Ⅰ層：B–2区，B–3区に同じ。

Ⅱ層：上位からⅡ－①～④層に細分した。B–3区と異なるのは、礫を多量に含む層が見られないことである。

Ⅱ－①層はB–2区，B–3区同様に旧耕作土と考えられる。②～④層については、Ⅱ－③層（明橙褐色粘質土層）を中間に介在させる形で上位（Ⅱ－②層）と下位（Ⅱ－④層）に暗黒褐色粘質土層が堆積している。抗、ピット、集石群に対応することが考えられる。

B–2～3中間イ小区南壁（北から）



B–2～3中間ロ小区遺構検出状況（西から）

②C 区の調査

＜C–1区＞

この区は、遺跡の南縁近くに設定されたもので、集落址の南限を確認するために精査が必要であった。試掘段階では、耕作土（Ⅰ層）下に厚い砂質粘土層が認められ、その下位に黒色ないし黒褐色粘土層の堆積していることが確かめられていた。また試掘区の北寄りでは、耕作土層下に礫群の存在することが指摘されていた。これは要するに、C–1区付近で台地状の地形から低湿地に移行することを予測させる諸事実と理解されたのである。

今次調査では、このような理解をさらに正確なものとし、黒色ないし黒褐色粘土層の下部の状態や礫群の構造を捉えることを目指した。作業は試掘時の壁は崩落がひどく、これを整理するために、2×2 m の範囲を4×4 m に大幅に拡張して調査することにした。本日は地表面下1.3～1.4 m まで掘り下げた。

層序に関する知見は、試掘時のそれと同じであるが、黒色ないし黒褐色粘土層は1 m 近い厚さで堆積しているらしく、その中位に薄い赤褐色の粒を含む砂質粘土層があって、本層を上下に二分しているようにみえた。上位は比較的礫が多く、下位はより砂質であった。

遺物は、黒色ないし黒褐色粘土層の上位より埴輪片、同層の下位から晩期縄文土器片が出土した。礫群については、調査指導に来跡いただいた島根大学大西郁夫教授から石垣状の遺構である可能性が指摘された。この指摘を受けて精査を行ったところ、調査区の北東から南西にゆるく屈曲して延びる石塁を検出することができた。

＜C–4区＞

昨日に続いて土器の取り上げを行った。イ小区で検出された土器群は、一抱えもある大きな河原石に圧し潰された様な状態で検出されている。住居址が倒壊した事情を物語るものであろうか。この他、十字の土手のセクションを分層した。Ⅱ層の黒色土層は上下に細分している。

3号住居址調査風景（南東から）

3号住居址 NS–B 断面南半分（東から）

3号住居址調査風景（南東から）

D–4–ロ小区土器出土状態（西から）

③D 区の調査

＜D-4区＞

住居址の全容を早く掴む必要があり、そのためには、セクションベルトを早期に除去することと、西側の壁の有無を確認することが課題である。

本日は、東西方向ベルトのセクション分層と床面の西方向への広がりを追った。分層作業で判明したことは、住居址の壁際にはレンズ状の良好な堆積が認められるが、中央は耕作土・床土のⅠ層が床面に達しており、Ⅱ層は存在しない。すでに耕作によって破壊されたものと思われる。

8月5日（晴）

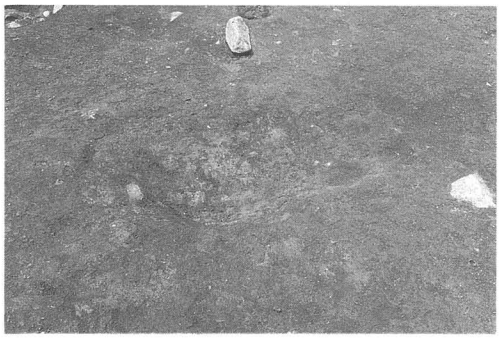
①B 区の調査

＜B-2区＞

昨日に続いて1号住居址内に残るセクションベルトの除去に終始した。E-W ベルトはセクションを記録した後に取り去った。これにより、1-b 号住居址の全容が露出されたのであるが、カマド付近はなお精査を続行した。カマドは北壁の中央よりやや東側を堀りくぼめ、そこに粘土のみで構築されていた。煙道は地山（Ⅳ層）を貫いて設けられている。

＜B-3区＞

イ，ロ，ハ，ニ各小区のプラン図を作成した。すでに明らかなように礫層を挟んで上下2面に遺構が存在するようで、建造体の全構造を捉えるためにはB 区を広く面的に調査する必要がある。



1-b 号住居址の地床炉（東から）

1-b 号住居址のかまど煙道（南から）

②C 区の調査

＜C-1区＞

昨日の先見に基き、本日は発掘区の北と西をさらに1 m 程度拡張して石塁状遺構の広がりや延び具合を追及した。その結果、この遺構は、台地南縁の崖面に粘土を厚く貼り、そこに拳大の河原石を貼りつけたような構造であることが知られた。貼石はかなり脱落しているが綿密に貼付されているように見受けられた。

先の黒色ないし黒褐色粘土層は、この石塁状遺構を埋めている。この層の下方には、黒灰色の砂利層が存在しているが、これは基盤の上部を構成するものかも知れない。砂利層上面からは晩期縄文土器などが出土している。なお、石塁の裾部はゆるく湾曲して南西方向に延びていくが、これと併行するかのような石列があり、流路のようなものが想定されるので、さらに調査を続行する。

C-1区調査風景（南東から）

＜C-4区＞

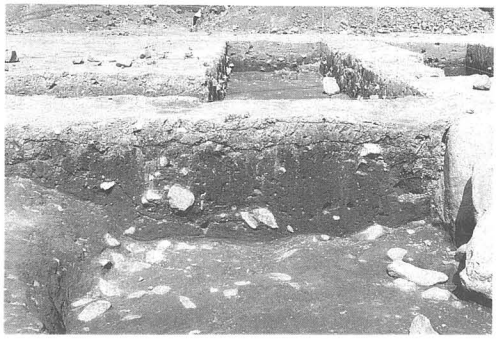
本日は十字のセクションベルトの分層結果を記録した。その大要は次の通りである。

Ⅰ層：この層には、現耕作土とその床土、その下位に旧耕作土とその床土が含まれる。耕作土は淡灰褐色で床土は黄色ないし赤褐色を呈している。

Ⅱ層：上位は黒褐色土、下位は暗褐色土として細分した。いずれも遺物を含む。
Ⅳ層：暗黄褐色を呈する地山（基盤層）である。住居址の床面は、この層の上面に築成されている。

2号住居址 E–W セクションベルト（東半分）北から

2号住居址 E–W セクションベルト（西半分）北から



2号住居址 N–S セクションベルト（南半分）東から

2号住居址 N–S セクションベルト（北半分）東から

③D 区の調査
＜D–4区＞
E–W ベルトを除去する。その際に前期弥生土器片がかなり検出されたため、住居址の時期を再検討する必要性を感じた。そこで、出土土器を総点検し、住居址の年代決定となる資料を確認したところ、2号住居址とほぼ同時期としてよい結論をえた。

8月6日（晴）
①B 区の調査
＜B–2区＞
1号住居址の内外の精査を続行。1–b 号住居址の中央やや東寄りで楕円形の地床炉を確認する。またカマドの北東付近で鉄滓1個が検出されたが、これはⅠ層よりの出土で、本住居址とは関係はない。南東で検出された、大小の礫が入っている大ピットは、掘り込み面が不明であり、ピット内から土器等の遺物も検出されず、時期不詳であるが、1–b 号住居址の床面を破壊して掘り込まれているので、この住居址のものでないことは確実である。
1–b 号住居址の西壁に接して4個の柱穴状ピットが1列状態で検出されている。当初は1–b 号住居址の垂木を支える柱のものかとも考えられたが、1個が西壁の一部を破壊して掘り込まれていることと、北西端の1個が、住居址の壁からかなり離れていること等を考慮すれば、1–b 号住居址に関連する遺構とはみなし難く、後世の掘立柱建物の柱穴列とするのがよいように思われた。
②C 区の調査
＜C–1区＞
昨日来の拡張区を掘り下げる。西側は昨日最下層と思われる砂利層に達し、その精査を続行。この層の上部では晩期縄文土器、前期弥生土器の破片が出土している。石墨状遺構の検出も続行。この遺構はB–2区の東側で検出されている石墨状遺構と繋がるのかも知れない。

2号住居址内の土器出土状態

2号住居址調査風景（セクションベルトの除去作業）（南西から）

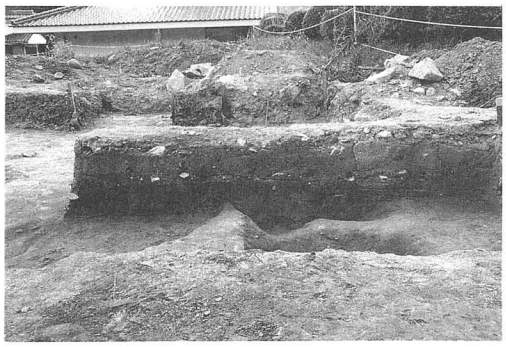
＜C–4区＞

本日はセクションベルトの断面撮影と取り外しを行う。未了。

③D 区の調査

＜D–4区＞

N–S ベルトのセクションを記録し、写真撮影を行う。また E–W ベルトの除去後の精査で住居址の北東コーナから北側に続く壁をほぼ露出し終り、その延長部分を追った。しかし北壁の半分近くは破壊されて存在しないようである。



3号住居址 NS–B 断面南半分（西から）

8月7日（晴）

発掘作業は、全体として終了段階に入ったが、なおB区南方の石塁状遺構の調査、C–1区拡張には時間を要するようである。

B–1区南拡張区調査風景（北から）

石塁状遺構実測風景

①B 区の調査

＜B–1区＞

この区は試掘時には耕作土下に厚い砂層の存在することが明らかにされていたが、今次、B–2区南側で検出された石塁状遺構の調査の際に、この砂層が流水客土によって堆積したものであることが知られたのである。

本日より石塁状遺構の実測開始に併せて遺構の南側に広がる湿地の調査を試み、B–1区を試掘時の2×2 m から4×4 m に拡張し掘り下げた。砂層下には灰色のシルト層があり、湧水も相当激しく地表下1.5 m 程度下げたところで作業は中止せざるえなかった。

しかし、拡張区南西隅にはやや大形の河原石が東西方向に列状に並んだ様な状態で検出され、これが石塁状遺構の対岸を形成することも考えられた。

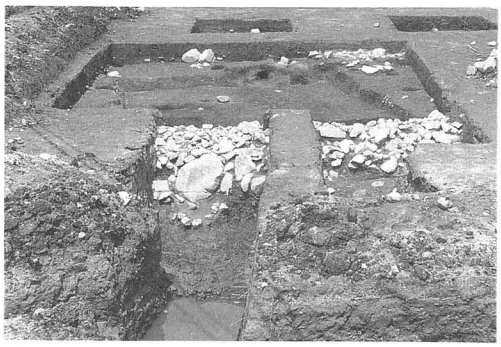
＜B–2区＞

イ，ロ小区間とハ，ニ小区間にあったベルトを外して、石塁状遺構の頂部を露出させ、実測作業を進めた。

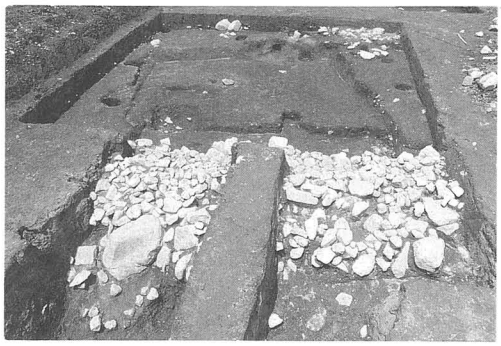
1–b 号住居址と石墨状遺構

B 区全景（南から）

石墨状遺構検出状態（東から）



石墨状遺構と1号住居址（南から）



石墨状遺構と1号住居址（南から）

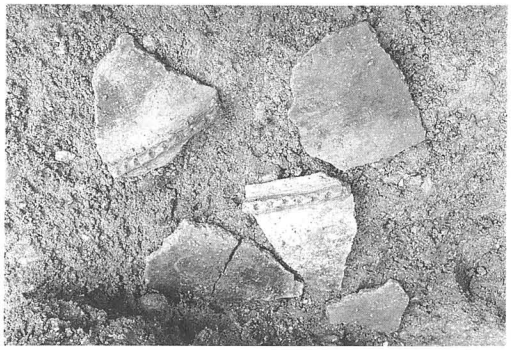
②C 区の調査

＜C–1区＞

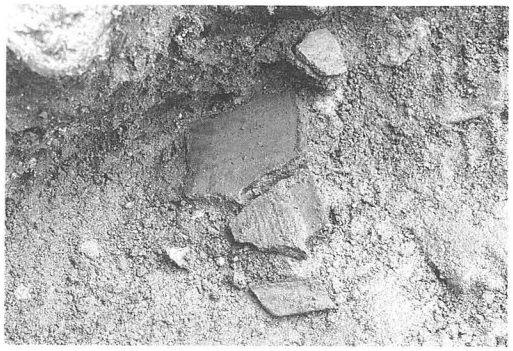
拡張区の東側と南側の掘り下げを続行したが、未了。砂利層の直上から大きめの晩期縄文土器片がまとまって出土した。

＜C–4区＞

ベルト外しを完了。床面土器群の精査、追加実測、写真撮影を行う。全体写真も撮り終えた。ただ中央の凹部分に小さな円礫が密集しているので、これの精査と住居址の実測が残る。



C–1区縄文晩期土器出土状態



C–1区縄文晩期土器出土状態

2号住居址検出状況（南東から）

2号住居址復元全景（南東から）

③D 区の調査

＜D–4区＞

N–S ベルトの除去を完了。住居址の平面を確認する。西半分が欠損状態にあるので正確なことは不明だが、隅円長方形かと思われる。

3号住居址実測風景（南東から）

3号住居址全景（南東から）

8月8日（雨）～8月11日（晴）

全体に実測、写真作業に取り組み、この4日間で一部を除いて全作業を完了した。ただ8日午後より9日にかけて、台風が通過し、作業を中断その後も各住居址が水浸しになるなどで、大幅に遅延することになったことを付記する。また、C–1区の拡張区は完全に水没し、東、西の壁面が大きく崩落したため、今次は調査を打ち切り、補足調査を行うこととした。

（増野晋次，田中義昭）

## (3)補足調査(1992年11月～12月)

補足調査は、第1次調査の際、調査区南辺部で検出した石塁状遺構の広がりを、第2次調査に備えて確かめておくため、1992年11月12日～12月2日、12日におこなった。石塁状遺構は、第1次調査では、B-1区第1号住居址南辺付近とC-1区で検出されており、これらは一連の遺構と考えられたが、これはさらに西あるいは南にむけて広がることが予測されていた。補足調査では、このためC-1区の南西にD－1区東拡張区を設定し、石塁状遺構の広がりを確かめるとともに、C-1区石塁状遺構の補足調査をトレンチの拡張をしておこなった。

C-1区調査風景（南西から）

＜C-1区拡張区＞（第17図，PL.9）

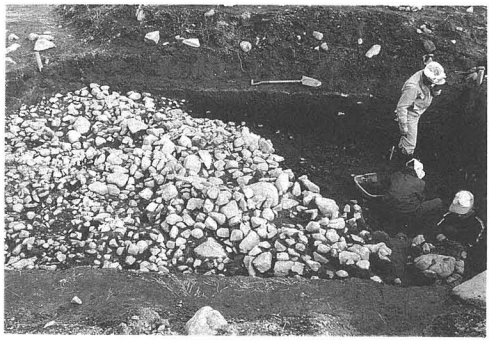
C-1区石塁状遺構については、第1次調査では調査が完了しなかったため、遺構の清掃調査と実測などの作業を中心におこなった。石塁状遺構は、第1次調査の成果では、B-1区では巾2.2 m、高さ0.6 mの畝状に石が積まれていたが、C-1区では高さ1～1.5 mの石垣状となっていた。C-1区では、さらにこの石塁状遺構が溝の北岸となる可能性もでてきており、石塁状遺構の1～1.5 m南側に平行して石の並びが認められ、南岸の石垣の根石となるとみられていた。このため補足調査では、溝と想定される部分に直行させて、トレンチを東に拡張し、土層の観察をするとともに遺構の検出をおこなった。またあわせて、第1次調査部分の精査もおこなったが、溝となるかどうかの確証を得るまでにはいたらなかった。なお、調査の過程で、須恵器，土師器，縄文晩期土器などが出土した。

＜D-1区東拡張区＞（第18図，第19図）

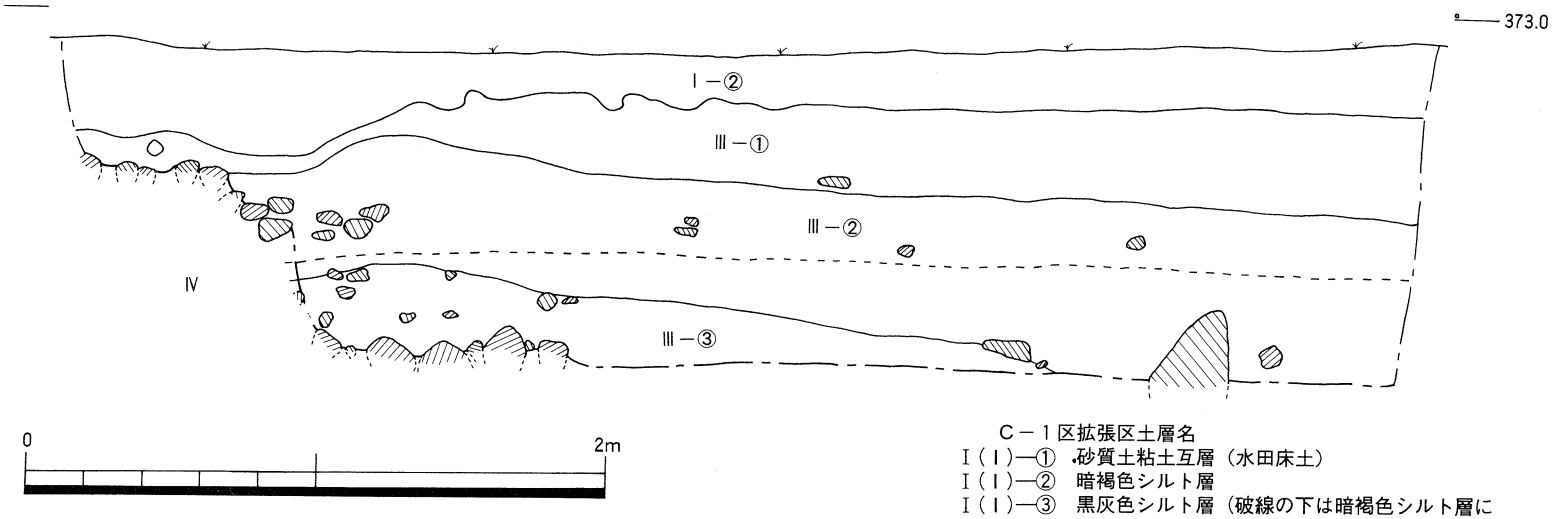
D-1区東拡張区は、第1次調査で確認した石塁状遺構の延長線上に設定した。すでに水田耕作土が除去されていたため、調査を開始するとすぐに石塁状遺構の一部があらわれた。また、調査区南辺部における前回までの調査所見同様、耕作土下には砂層が認められ、D-1区東拡張区の中では特に南西部を中心に堆積していた。この砂層を除去すると黒灰色シルト層となったが、北半部では径10～20㎝前後の亜円礫類が一面に密集しており、石塁状遺構が本調査区にもおよんでいることが明らかとなった。まずこの段階で写真撮影など記録作業をおこなったのち、礫の認められない南半部の掘り下げをおこない、石塁状遺構の南への広がりかたを確かめることにした。

しかし、南半部では、礫の密集する面はなかなか確認することはできず、最終的に北半より70㎝前後掘り下げた段階で、小礫がややまとまってみられる面があり、土層も青灰色砂質土層となり、C-1区の所見によると、下底に近くなっていると判断されたため、ここでひとまず発掘を終え、写真撮影、実測などの記録作業をおこなった。なお、発掘の過程で、陶磁器，須恵器，土師器，弥生土器，縄文土器，安山岩製剥片石器などが出土した。また、北半の礫の密集する面と南半の礫のまとまってみられる面とのつながりを確かめるためサブトレンチなどの手段も考えられたが、協議の結果、遺構の断ち割りなどは第2次調査の課題とすることになり、補足調査の終了時点では、北半と南半の間を段差のまま残すことになった。

（竹広文明）

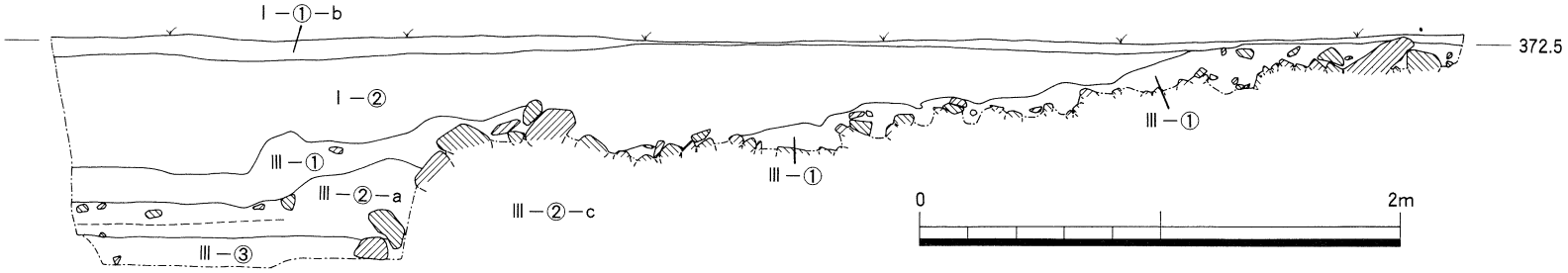


D-1区調査風景（西から）

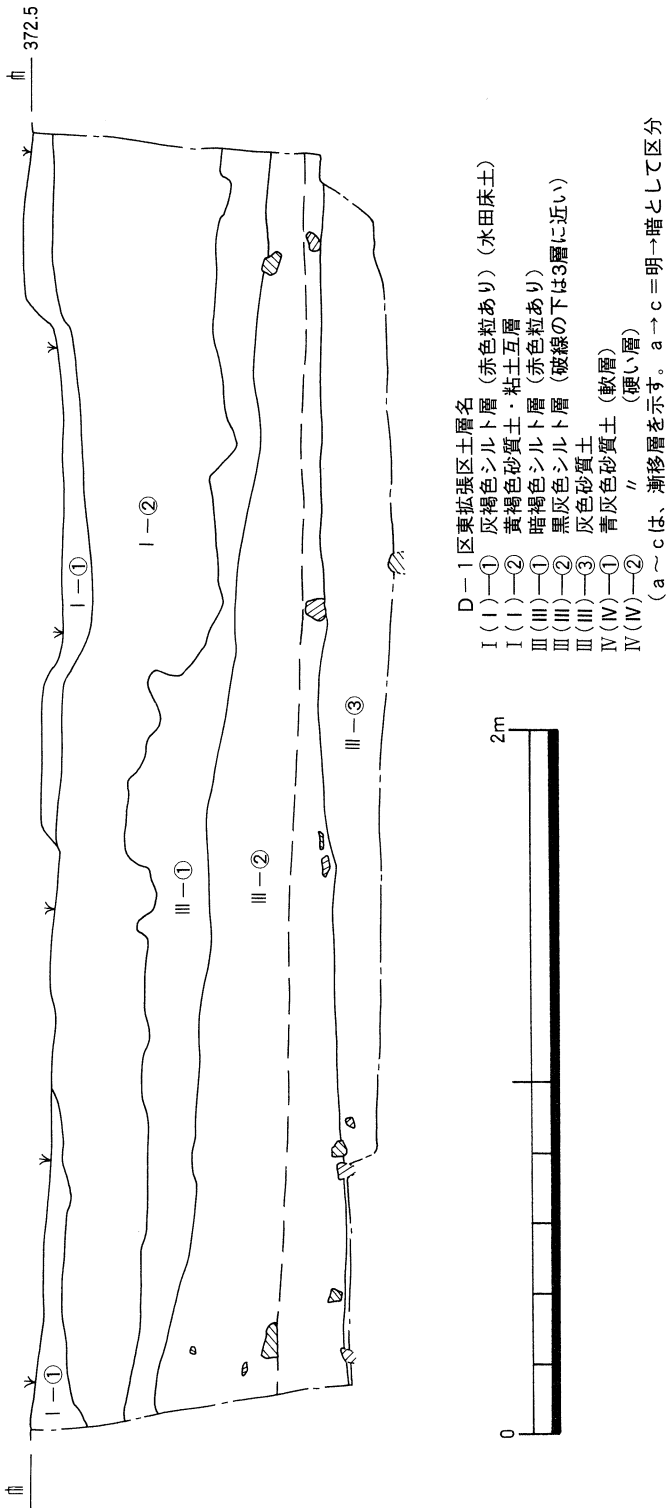



C－1区拡張区土層名
Ⅰ(Ⅰ)—①　砂質土粘土互層（水田床土）
Ⅰ(Ⅰ)—②　暗褐色シルト層
Ⅰ(Ⅰ)—③　黒灰色シルト層（破線の下は暗褐色シルト層に似る）
Ⅲ(Ⅲ)—①　灰色砂質土層
Ⅳ(Ⅳ)　基盤層（地山）

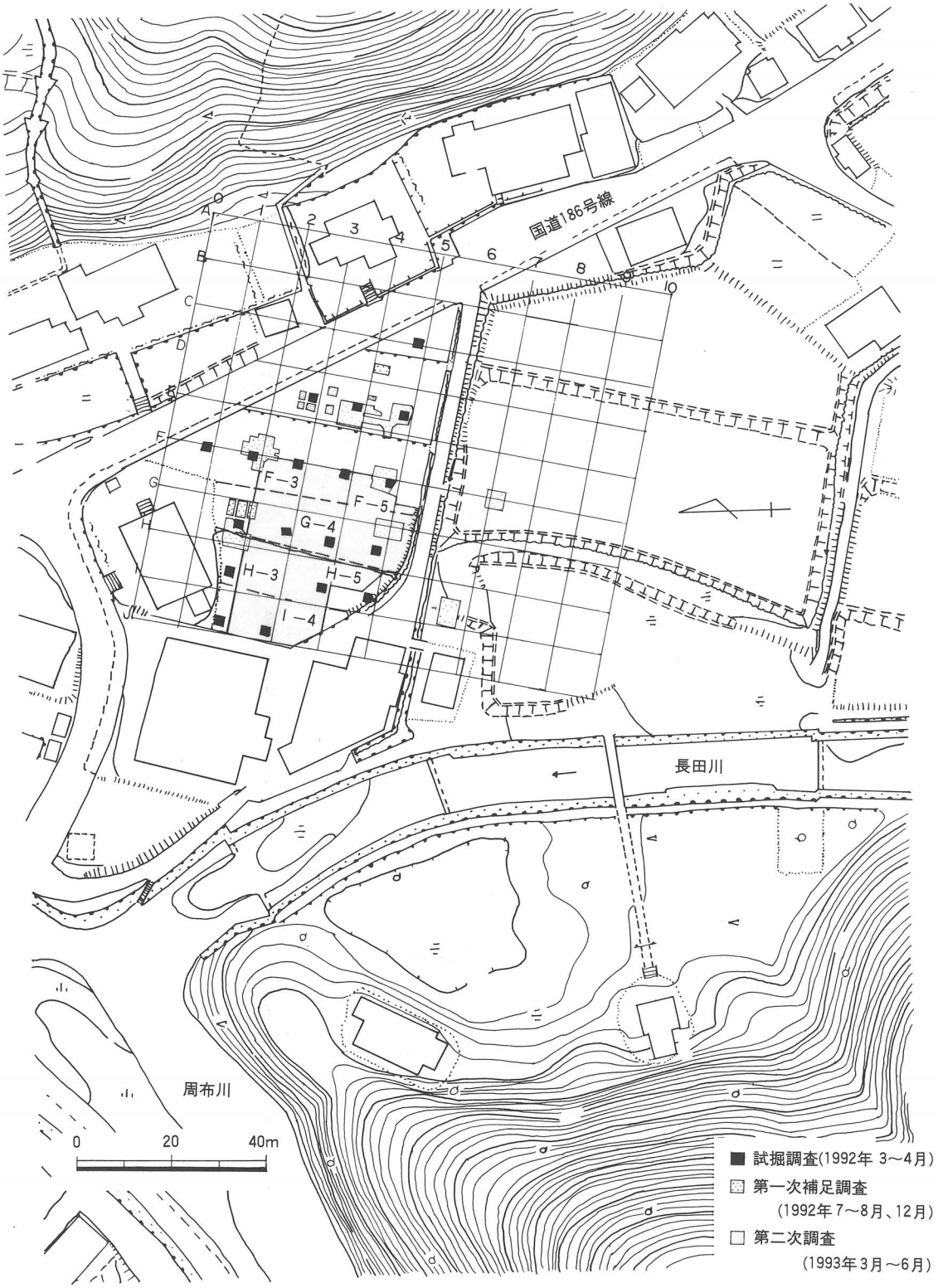
第17図　C–1区拡張区東壁土層図




第18図　D–1区東拡張区西壁土層図



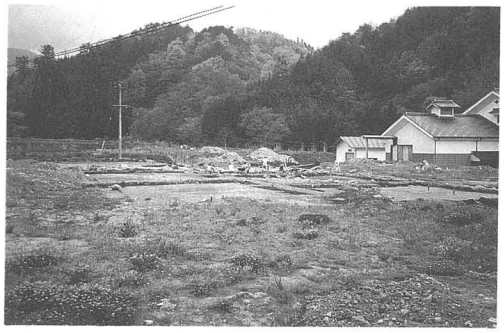

第19図　D–1区東拡張区南壁土層図




第20図　第1.2次調査の調査区配置図

## (4)第2次調査(1993年3月～6月)(第20図)

前年度に実施された試掘調査、第1次調査、補足調査により、住居址等の遺構が存在する部分は遺跡東半分の国道よりであることが判明した。

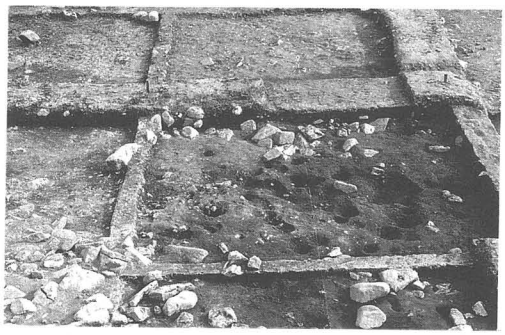


発掘開始時の遺跡景観（北から）

このような調査結果をうけて行われた第2次調査は、多目的集会施設建設に先立つ事前調査であり、記録保存を目的とするものである。

発掘に入る前に前年度調査区の組み直しを行った。設定は一区の大きさを10×10 mとし、これに東→西方向をA,B,C…Jの記号で、北→南方向を0,1,2,3…10の数字で区切ってグリッドの名称を決定した。（以下前年調査区は旧○○区とする。）

これにより、第2次調査の発掘区はF－3,F－4,F－5,F－6,G－3,G－4,G－6,H－3,H－4,H－5,I－3,I－4を対象として実施することになった。



G–4区のピットと土杭群の検出状況（北から）

3月12日、調査に先立って重機で耕作土を除去し、発掘は3月22日から始めた。以下調査の結果の概要を順を追って述べる。

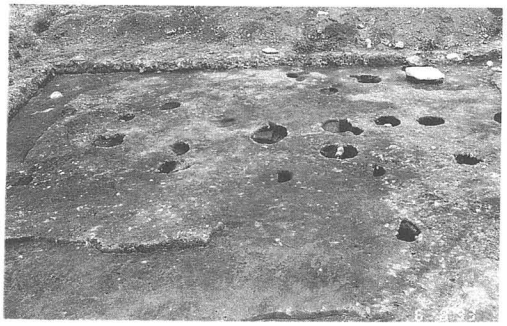
G–4区の調査は3月28日まで行った。この区は、旧D–2区を含み、試掘時にⅡ層の黒褐色を呈する遺物包含層の存在が確認されていた。本調査においても区の西側を中心に5～20㎝程度の黒褐色土層の堆積が認められ、縄文土器(晩期中葉),弥生土器(前期),土師器，須恵器（東播系を含む),近世陶磁器等の破片がかなりの量出土した。また磨石、石鏃と石匙様の黒曜石の石片も検出されている。なおこの層には大小の川原石が包含されていた。

遺構と思われるものは、区の西側に柱穴様の多数のピットと不定形な土拡、あるいは竪穴住居址のような遺構があったのかも知れない。

3月末はF–3区，F–4区の調査を行った。この両区はⅡ層はきわめて薄く、耕作土，床土下から黄褐色の地山（Ⅳ層）が直接露われる個所も少ない。

検出された遺構は、大小のピット39である。これらは、一見列状をなしているようにも思われ、柵状の柱穴である可能性もあるが、数棟の掘立柱建物の存在も十分考えられる。

出土した遺物は、弥生土器，須恵器，中・近世陶磁器等の破片である。またP 18付近で縄文土器片（後期）が検出された。弥生土器はピット内から検出されたものがいくつかあるが、磨滅したものが多い。須恵器は平安時代前半期のものと思われる。



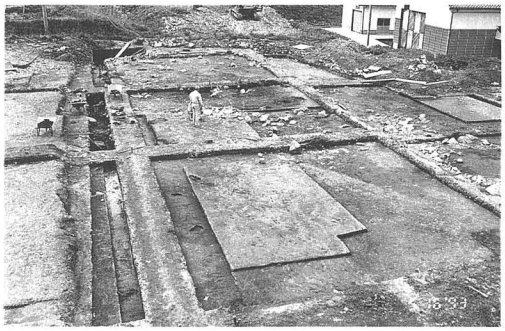
F–3区、F–4区のピット群（西から）

F–3区、F–4区のピット群（北から）

4月上旬はH–3区，H–4区の調査を行った。

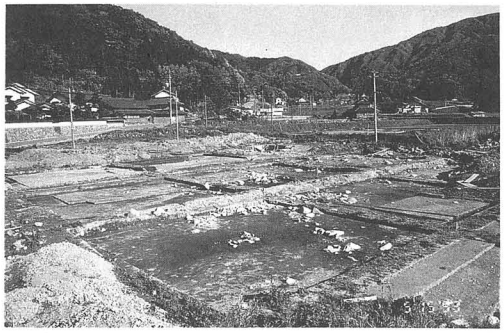
H–3区は、耕作土・床土下に直接地山（Ⅳ層）が露われ、地山面からは遺構は検出されなかった。

G–4区、G–5区の全景とH–4区の一部（北から）



G–3区、G–4区（人が立っている所）、G–5区、H–3区（一部）、H–4区、H–5区の全景（北から）

H–4区は、試掘調査時にE–2区として一部が掘られている。その際の所見では、Ⅱ層の黒褐色土がブロック状に残されていたようである。今次の調査では、区の北西に大小の礫群の集中がみられ、西半分に黒褐色土層の残存が認められた。ピットは3層を検出したが、黒褐色土中を掘り込み面とするもの（上面遺構群）と地山（Ⅳ層下面遺構群）の黄～赤褐色面を掘り込み面とする二期に分かれることが明らかになった。

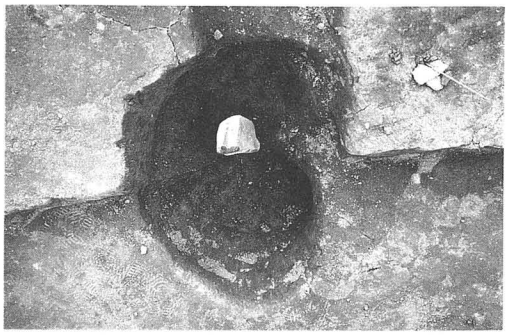


H–3区の北西からみた遺跡の全景

H–4区検出のピット群（北から）

黒褐色土中からは弥生土器、地山上面からは近世後半期の陶磁器片が出土している。

4月上旬はI–3区，I–4区を中心に調査を進めた。I–3区は試掘時にはF–3区として調査されている。ここでも黒褐色土（Ⅱ層）の薄い堆積が確認され、この層は北に行くにしたがって厚みを増していくようである。その下部には黄褐色土の地山面（Ⅳ層）が続いている。この面では遺構は認められない。



H–4区　P 11発掘状態（ピット内に角礫あり）

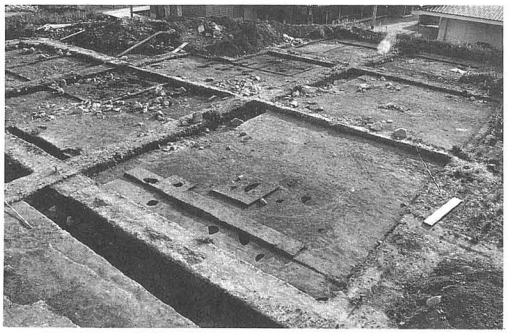
I —3区の全景（南西から、右隣りはH–3区）

黒褐色土層（Ⅱ層）中からは弥生土器片（前～中期）が出土した。

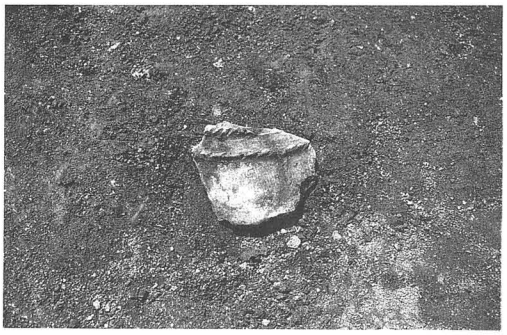
I–4区では、G–4区，H–4区のピット群に関連するピット群が検出された。その掘り込み面は、Ⅳ層

上面と思われ、H–4区の下面遺構群に対応することが考えられた。黒褐色土層中より弥生土器片(前期)が出土した。

4月下旬にはG–5区，G–6区の調査に入った。G–5区は試掘時にはD–1区として一部の調査が行われ、耕作土・床土層（Ⅰ層）下に黒褐色土層（Ⅱ層）が存在せず、替って黒褐色～灰色砂質層（Ⅲ層）があり、その下方には厚い礫層が存在するとされていた。その後第1次調査で、この礫層とされたものは石塁状遺構の延長部と考えられるようになり、さらに補足調査が実施されている今次の調査は、先の調査をうけて遺構の全面検出により、石塁の全体構造と年代を捉えることが主目的である。



G–3区、G–4区、H–3区、H–4区、I–3区、I–4区の全景（北から）



I–3区Ⅳ層Ｐ11上面出土の弥生土器片

G–5区の全景（Ⅳ層を覆う礫層の検出状態）（南から）

G–5区の礫層（西から）

G–5区では重機で除去した耕作土の残部を剥ぐと礫（拳大から径50㎝程度の川原石）や砂利の層が一面に広がっていた。長田川の氾濫によってもたらされた砂礫層と判断される。層は南東側から北西方向に延びており、H–4区，I–4区に達している。

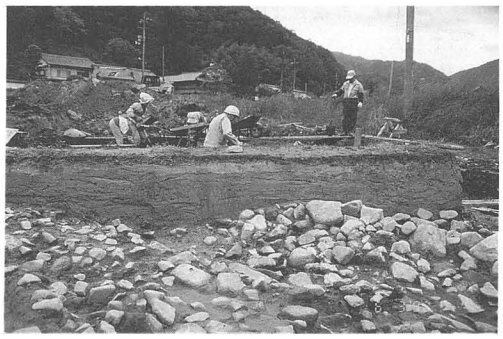
この砂礫層を除去すると地山（Ⅳ層）の黄褐色砂質土層が露われる。Ⅳ層もまた礫を多く含んでいる。

Ⅳ層上面にはⅡ層の黒褐色土が局所的に残っており、その一部からは土器片が検出された。このような地層の堆積状況からは、大規模な洪水によってⅡ層より上位の土層が押し流されたことが推定される。

G–5区南辺からG–6区にかけては石塁状の遺構が検出された。これは第1次，補足の2回の調査においてD–1区拡張区として調査され、遺構検出が行われていたものの西側に連続する遺構である。石塁の状況は、D–1区拡張区と比較すると、積み方がやや散満で、積まれた川原石にも小ぶりのものが多い。また石の分布状態；つまり石塁の幅についてみてもD–1区拡張区よりも広くなっている。(3.2 m～3.6 m）このことは、元はD－1区拡張区のように密集状態で小高く積まれていたものが、洪水によって押し流され、頂部を削平されたことによるのかも

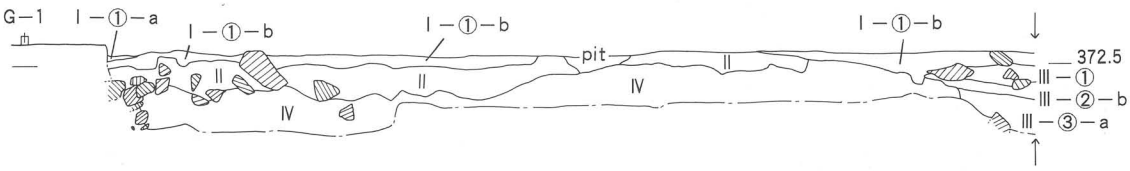
知れない。石の分布幅が広がっているのは、石墨の頂部が崩壊して石が北側に移動させられたためとも考えられる。遺構の保存状態は西～南西方向に行くほど悪くなっている。

G–6区石墨状遺構の検出風景（西から）

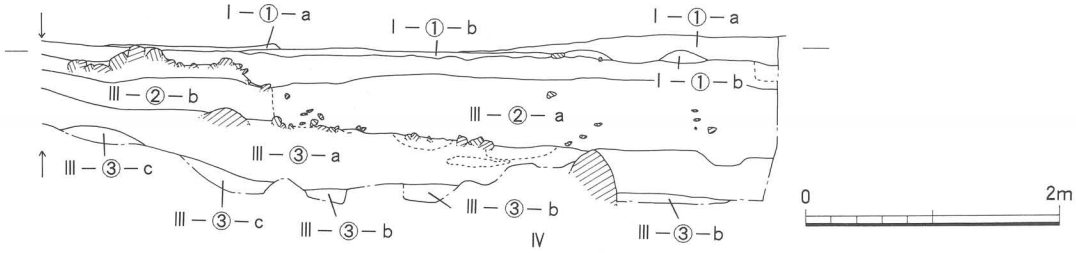


G–6区の石墨状遺構とF–G間東側セクションベルトの西側壁面（西から）

G–6区北東隅付近の石墨状遺構（南西から）



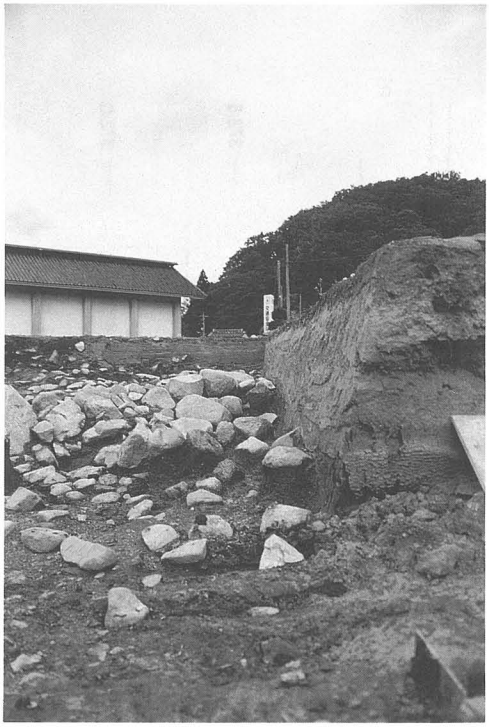

土層名は第19図を参照




第21図　G–5区、G–6区東壁土層図

5月に入ってからは、F,G,H,Iの各区で所在が確認された遺構の精査と東西、南北軸線のセクションを記録することに集中した。東西セクションは3ラインについて、南北はF,Gラインを記録することとし、それぞれ区と区の間に残した土手沿いに幅0.5mの長いトレンチを入れ、その断面を記録した。

Gラインの所見は次のとおりである。（第21図）



G–6区石塁状遺構の前面（南から）

G–6区石塁状遺構の検出状態

①G–3区，G–4区では、耕作土・床土下が地山（Ⅳ層）で、地山の処々局所的に黒褐色砂質土層（Ⅱ層・遺物包含層）が残っていた。

②G–5区南端からG–6区にかけては石塁状遺構があり、その先は灰色のシルトや砂が堆積する湿地帯になっている。

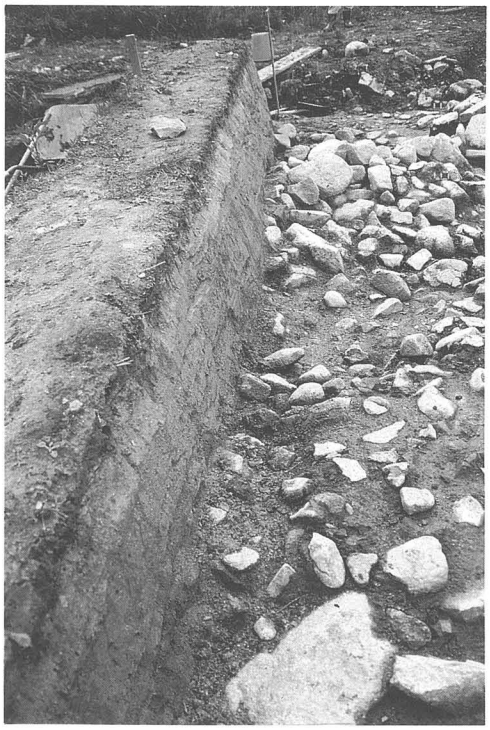
③G–6区における土層の堆積状況は次のように認識した。

Ⅰ層　　（灰褐色粘質土）、耕作土・床土

Ⅲ－①層（暗褐色シルト）、遺物包含層（この層は台地上の遺物包含層のⅡ層とは区別されるのでⅢ層として記載する）

Ⅲ－②層（黒灰色シルト）

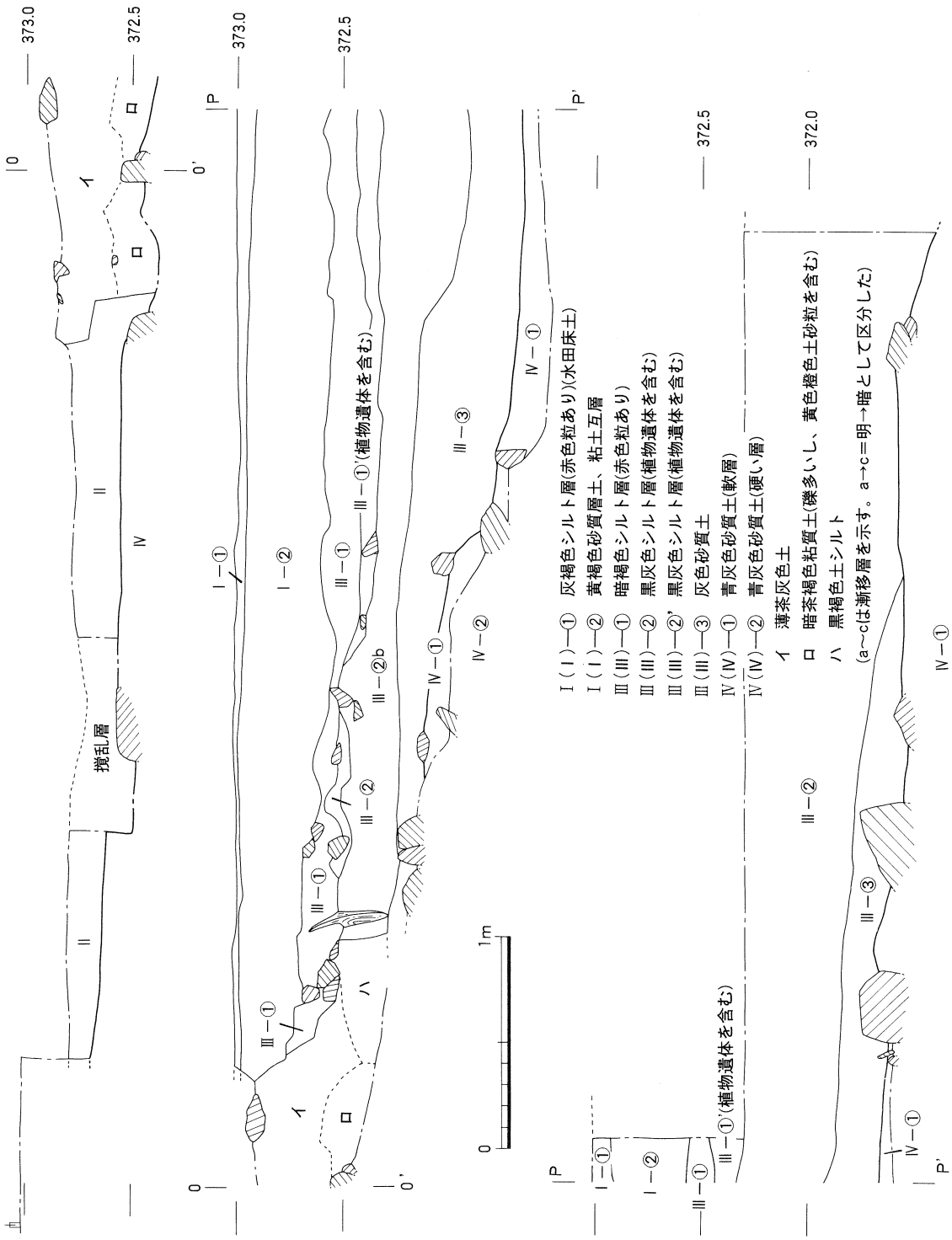
Ⅲ－③層（灰色砂質土）



G–6区石塁状遺構の状態（北から）

Gライントレンチ（南から）

④G–6区の土層認識からは少なくとも石塁状遺構は、Ⅲ－③層の堆積後に構築され、石塁構築後にⅢ－①～②層が遺構をカバーする形で堆積したということになる。石塁状遺構を断ち割ったところでは、

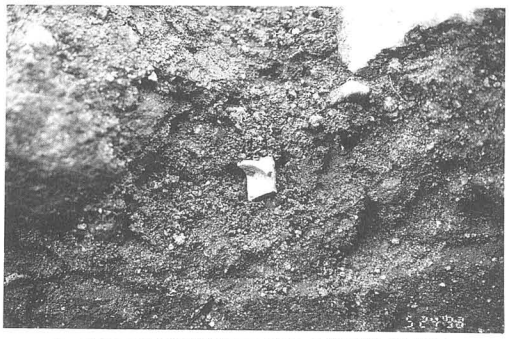



第22図　F–5区・F–6区東壁土層図

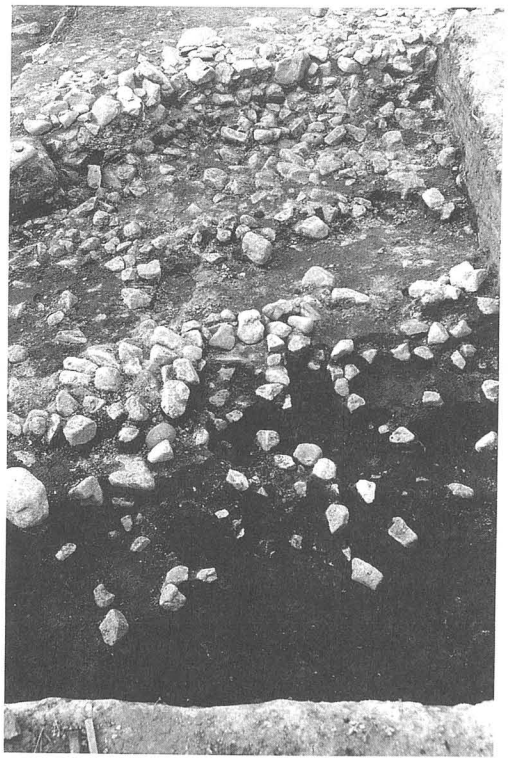
積石の下から近世前半期の唐津系陶磁器が検出されている。この事実からすれば石塁状遺構の構築は近世前半以降ということになる。

最下層のⅢ－③層からは縄文時代晩期の土器片がかなり出土しているが、須恵器片なども検出されているので、晩期の単純な包含層とはいえない。

Fラインのセクションについては、試掘調査時にCラインとして記録し、その基を層序は確認されている。今次調査では、石塁状遺構とⅡ，Ⅲ，Ⅳ各層の関係を捉えるためにF–5区から6区の中央部を南北方向に断ち割る形で、調査を実施した。

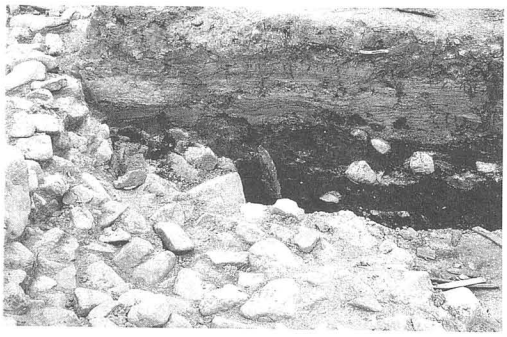


G–6区石塁状遺構下層検出の近世陶磁器片



F–5区の石塁状遺構検出状況（南側より）

F—5区の石塁状遺構検出状況（北から）



F–5区南辺の石塁状遺構とその断面（南北方向、壁中央に杭あり（西から））

その結果、石塁状遺構はⅡ層（黒褐色遺物包含層）を切り、Ⅲ－③層下部を面として、その上に構築されたものと判断される。Ⅲ－③層は厚さ0.4～0.7 mの黒褐色シルト層であるが、下半部は灰褐色に変化している。Fラインの断面ではこの層の上に黒灰色を呈し、植物遺体を包含する層が薄く堆積している。この層が見られるのは、Fラインの断面のみであった。なお石塁の南縁からは木杭が1本検出されたが、この杭は先端がⅢ－③層上部に達しており、先述のⅢ－③層下部を基盤にして石塁状遺構が築かれているとする認識を裏づけている。Ⅲ－③層下部からは縄文時代晩期の土器が検出されている。

5月中旬に入って東西方向のセクションを記録することとし、その作業を行った。採録ラインはF–3区からI–3区の杭を連ねた3ラインである。土層所見は予備調査時のそれ(B–3区からF–3区の杭）と基本的に変わらない。

第1次調査の際耕作土と床土の大部分を除去され、F–3区とI–3区以外はⅣ層上面が露出していた。遺物包含層のⅡ層（黒褐色土層）が残っていたのはF–3区とI–3区であるが、F–3区は部分的にしか認められない。

このように東西セクションでは、図らずもⅣ層の上面を確認したに止まったのであるが、Ⅱ層は北側から西側にかけては遺存しており、1986年に七渡

瀬遺跡で検出された遺物群は、この層の外縁部に包含されていたものと思われる。

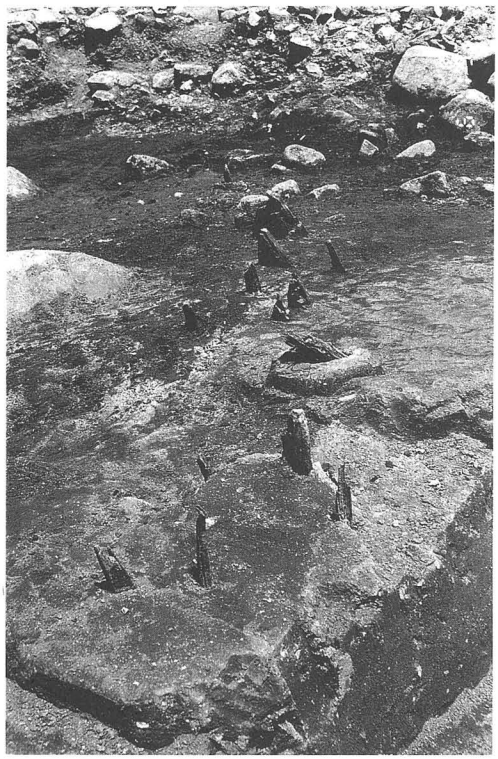
5月下旬から6月上旬にかけては、検出されたピット群を精査して写真を撮り、さらに石塁状遺構の最終的チェックを行った。この段階で注目されることは、G–6区で、石塁状遺構の南裾から南方向へ列状に打ち込まれた杭が検出されたことである。杭は14本あり、これらが2列に並走するかのように立っていた。また、いずれの杭も西側に傾いていることから東より圧力の加わったことが推測される。

杭列の性格をどう判断するかという点については決定的な資料がないので明言はできないが、堰の遺構とみることも可能であろう。

5月下旬から6月上旬にかけて（株）ワールド航測コンサルタントによる石塁状遺構の実測が行われ、6月23日降雨の中ではあったが、現地説明会を実施。6月25日をもって第2次調査を終了した。

（久保谷浩二，田中義昭）

G–6区南端の杭列（南東から）



G–6区南端の杭列（南東から）

B区の発掘風景（上・北から、下・東から）

## 3、調査の成果（検出遺構と出土遺物）

### (1)第1号住居址（第23図、PL.10、11上）

〔検出状況〕

この住居址は、B–2区のイ、ロ、ハ、ニの小区で検出された。ここでは2つの住居址が重複していた。下部にある住居址(1–a 号住居址）は保存しておくことにしたため、上部にある1–b 号住居址を掘り出したのみで、これを除去して1–a 号住居址の全容を検出することはしなかった。したがって、1–a 号住居址は床面の一部と、北東の壁の隅が確認されたのみである。1–b 号住居址においては、南側の壁は検出しえなかったが、検出状態は良好であった。

1–b 号住居址の埋土の層序は次のとおりである。

Ⅰ－①～Ⅱ－②層（新旧耕作土・床土)、Ⅱ－③～⑥層（遺物包含層・1–b 号住居址床面)、Ⅳ層（基盤層・地山）

Ⅱ層群からは須恵器片や土師器片、中・近世の陶磁器片が出土したが、1–b 号住居址の床面とその直上のⅡ－③層からは奈良時代の須恵器が出土し、これが年代決定の手掛りを与えている。また、Ⅰ層からも中・近世の陶磁器片が採集された。

〔平面・断面形〕(1–b 号住居址)

平面形は一辺4×3 m ほどの長方形をなすと思われる。断面形はカマドの手前と地床炉のある中央部が落ち込んでいるが、その他は平坦である。また、床面の中央部は固く踏み固められており、その東西の壁に近い床面は軟らかくなっていた。

〔柱穴・炉等〕

1–b 号住居址内には主柱穴と思われる穴はなく、炉址近くに小ピットが1個検出されている。住居址外の西部においては、ほぼ一直線上に4つのピットが並んでいる。（南から深さ0.4 m、径0.2 m のほぼ円形状、深さ約0.4 m、径約0.2 m のほぼ円形状、深さ0.2 m、径0.2 m のほぼ円形状、深さ約0.4 m、径約0.2 m の円形状のピットであり、それぞれピット間距離は約1.3 m、約1.0 m、0.7 m である。)また、北部においても深さ約0.1 m、径約0.1 m の円形のピットが検出された。北東部では、東西約0.3 m、南北約0.4 m の範囲に焼土が広がり、そのまわりを約0.1 m 大の川原石で囲んだ遺構が検出された。深さは0.1 m である。また、その北部にも東西約1.0 m、南北約0.8 m の範囲に、大きなもので径約0.1 m ある石が散在している。この石塁状遺構の南部には、性格不明のピットが2個所見られる。1–b 号住居址外の南部(1–a 号住居址上)においては、約0.1～0.2 m の石塁状構遺構の石が東西の方向に並んでいる。

また、1–b 号住居址内においては先述のように、中央部に東西約0.3 m、南北約0.5 m の範囲に焼土が広がる地床炉が検出された。深さは約0.1 m である。北側の壁の中央からやや東よりの位置でカマドが検出された。この遺構は前方の部分は崩れており、奥の部分が残るのみであった。また、カマドの手前では焼土や炭を掻き出した跡が見られた。カマドは粘土のみで構築されたも

のと思われる。このカマドの東側に深さ約0.1 m、径約0.1 m の円形状のピットが検出された。

住居址床面の南西部には東西約0.7 m、南北約0.8 m、深さ約0.2 m の大きなピットが検出されている。ピットの底部分には約0.1～0.2 m 大の石が認められた。

壁の高さは0.3 m 以下である。また、住居址の壁に沿って巡らしてある溝は約1/4が残っていた。巾は約0.1 m で、深さは0.1 m 以下である。

1–b 号住居址の床面の南半分程度は、1–a 号住居址の埋土に貼床してつくられている。1–a 号住居址は、その意味で1–b 号住居址に先行することは確実であるが、規模や形状は不明である。このことは、1－ b 号住居址を保存して残すことにしたためである。

1–a 号住居址を埋めたⅡ－⑥層からは、弥生時代末期もしくは古墳時代初頭の土器片（鼓形器台の破片）が検出され、年代決定の参考資料が得られた。

1号住居址の南側で検出された石塁状遺構は、1–b 号住居址の覆土を切って構築されているので、年代的には住居址より後出のものということができる。

〔出土遺物〕

（弥生土器）（第24図－1～3、PL.19）

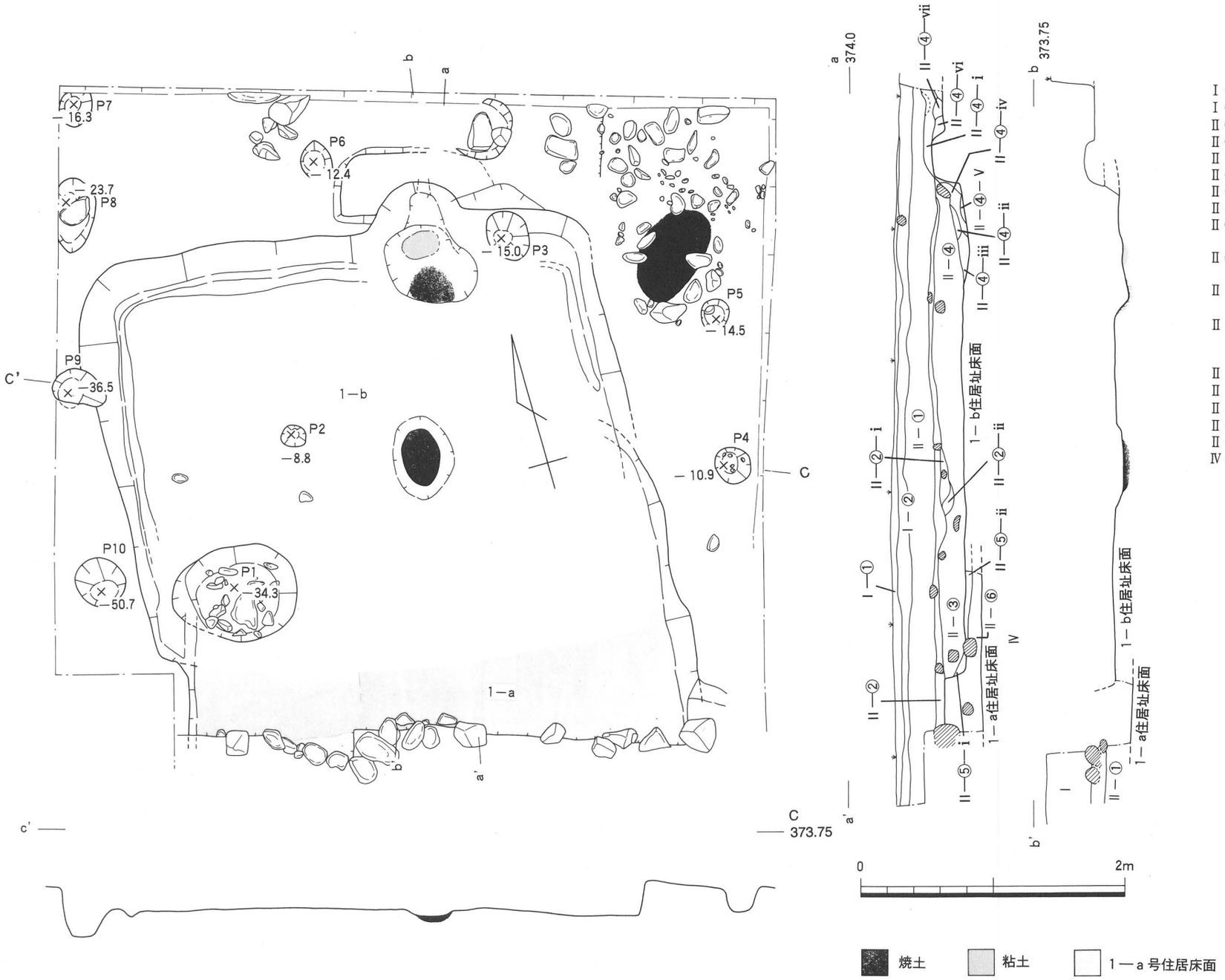
1は中期の甕の口縁片である。器肉は薄手で口唇部にはしっかりとした面をもつ。調整は内外面共にヨコナデである。胎土は2㎜以下の砂粒を含み、焼成は良好である。2は甕の底部片である。調整については、外面は風化が著しいが、内面はナデ後ヘラ状工具によるミガキである。胎土は0.5～3㎜以下の砂粒を含み、焼成は良好である。3は高坏の脚部片と思われる。内外面共に黒灰色を呈し、調整は斜め方向のハケの後にナデを行い、同心円のスタンプ文を施す。内面はケズリの後に横方向のミガキを施す。胎土は3㎜以下の砂粒を含み、焼成は良好である。色調、スタンプ文からみて搬入土器ではないかと思われる。

（土師器）（第24図－4～11、PL.19、20）

4は鼓形器台の坏・筒部である。坏部は低平で、調整は外面がヨコナデ、受部内面はヘラミガキ、脚部内面はヘラケズリである。胎土は1㎜以下の砂粒を含み、焼成は良好である。5～11は甕の口縁部である。5は口径復元が可能で、口縁部はやや内湾しながら面をもち、内面を上方に跳ね上げ端部に至る。調整は内面下部にはヘラケズリ、それ以外はヨコナデである。6も5同様に口縁端部内面を上方に跳ね上げるものである。7、8は口縁部を丸くおさめ、口縁部から胴部にかけてはゆるやかな「く」の字状を呈す。胴部内面にはヘラケズリを施す。9は端部を丸くおさめるものである。10、11は器厚の厚いもので、10は端部を丸くおさめ、口縁部から胴部にかけてはゆるやかな「く」の字状を呈す。胴部内面にはヘラケズリを施す。11は口唇部に面をもつものである。胎土、焼成とも良好である。

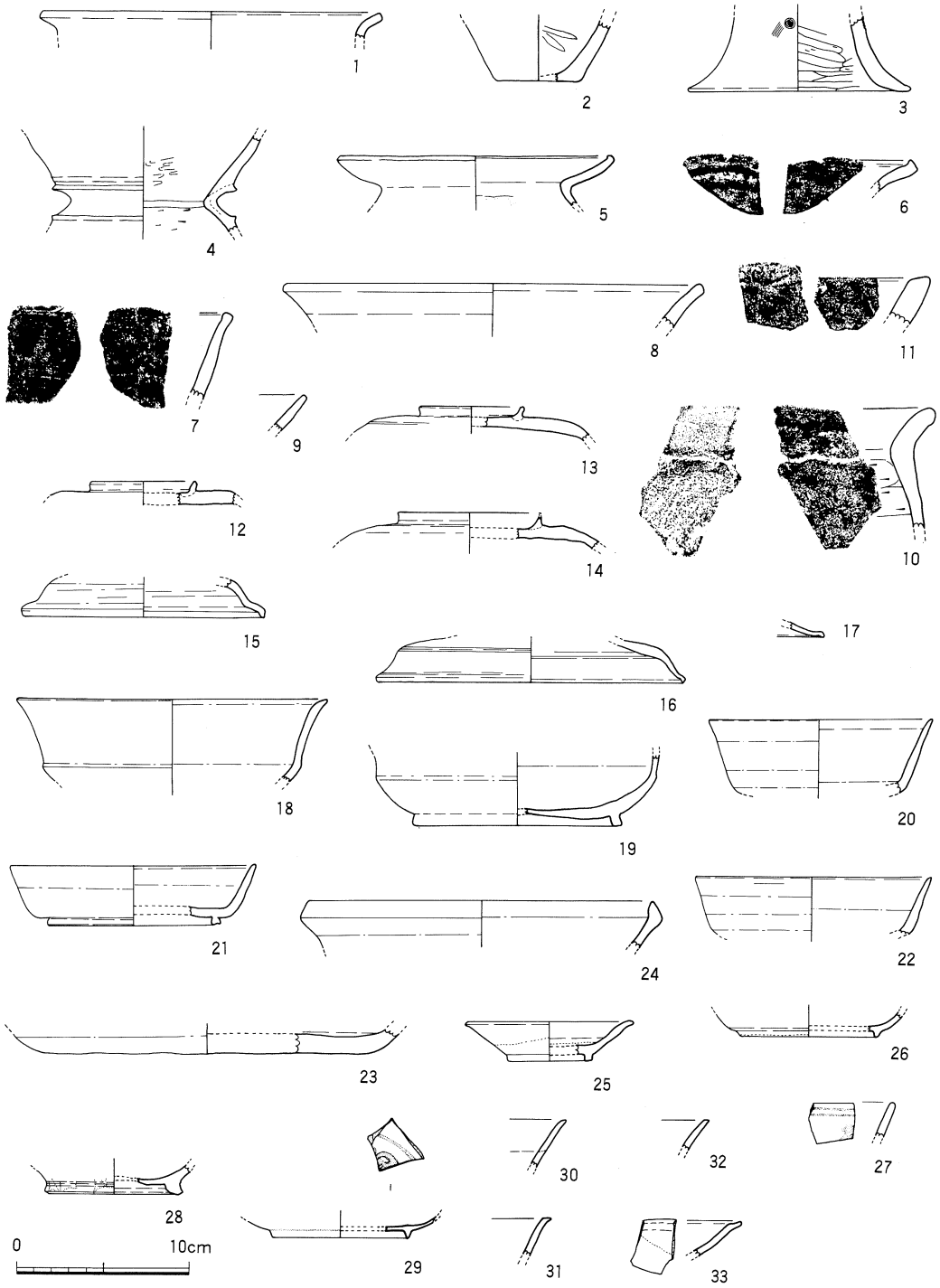
（須恵器）（第24図－12～22）

12～17は蓋坏の蓋の破片である。12～14は天井部であり、いずれも輪状つまみがつく。15～17は屈曲する口縁部と下垂する口唇部をもつものである。18～22は、蓋坏の坏部である。18、19




Ⅰ(Ⅰ)—① 耕作土
Ⅰ(Ⅰ)—② 明黄褐色砂質土層
Ⅱ(Ⅱ)—① 淡灰褐色粘質土層（旧耕作土）
Ⅱ(Ⅱ)—② 明黒褐色粘質土層
Ⅱ(Ⅱ)—②—ⅰ 焼土
Ⅱ(Ⅱ)—②—ⅱ 灰土
Ⅱ(Ⅱ)—③ 暗黒色硬質土層（炭化物含む）
Ⅱ(Ⅱ)—④—ⅰ 明黒褐色粘質土層
Ⅱ(Ⅱ)—④—ⅱ 粘土（灰黄色）層（灰、炭化物、焼土を含む）
Ⅱ(Ⅱ)—④—ⅲ 明黒褐色土層（灰、炭化物、焼土を含む）
Ⅱ(Ⅱ)—④—ⅳ 暗褐色土層（炭化粒、焼土を含む）
Ⅱ(Ⅱ)—④—ⅴ Ⅳ層（地山）の上面がやわらかくなったもの（褐色、焼土塊混じる）
Ⅱ(Ⅱ)—④—ⅵ 暗赤褐色土層
Ⅱ(Ⅱ)—④—ⅶ 黒色土層
Ⅱ(Ⅱ)—⑤—ⅰ 暗黄色砂質土層
Ⅱ(Ⅱ)—⑤—ⅱ 床土
Ⅱ(Ⅱ)—⑥ 暗黒色粘質土層
Ⅳ(Ⅳ) 地山

第23図 第1–a・1–b 号住居址平面図・断面図




第24図　B–2区出土土器・陶磁器実測図（第4表参照）

第3表　試掘調査出土土器・陶磁器観察表

| 挿図番号 | 図版番号 | 出土地点 | 器種他 | 法量(cm) | 文様・形態・手法の特徴 | ①胎土②色調③焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | | D-4・Ⅱ層 | 弥生壺肩部 | 不明 | 外：ヨコ～ナナメ方向のミガキ<br>内：ヨコ～ナナメ方向のハケメ | ①2㎜以下の砂粒を含む<br>②黄褐色<br>③良好 | |
| 2 | PL.19上段 | D-4・Ⅱ層 | 弥生壺肩部 | 不明 | 外：三条のヘラ描き直線文、羽状文<br>内：ヘラミガキの後ナデ調整 | ①2㎜程度の粗砂を少量含む<br>②淡黄褐色<br>③良好 | |
| 3 | PL.19上段 | D-4・Ⅱ層 | 弥生壺（肩～底部の境目） | 不明 | 外：一条のヘラ描き直線文、ナデ調整、羽状文、胴部と頚部の境目に段差あり<br>内：ヨコナデ | ①2㎜程度の粗砂粒を少量含む<br>②淡黄褐色<br>③良好 | |
| 4 | | D-4・Ⅱ層 | 弥生甕口縁部 | 口径28.0cm | 外：ヨコナデ、ナナメ方向のヘラミガキ<br>内：ヨコナデ | ①1㎜前後の砂粒を含む<br>②内；灰茶褐色、外；淡桃白色、口縁部その他；淡白黄褐色<br>③良好 | |
| 5 | PL.19上段 | D-4・黒色土層（Ⅱ層） | 弥生甕口縁部 | 口径25.0cm | 外：ナデ、2条のヘラ描き直線文の間に3列の列点文、ハケメ<br>内：ナデ | ①1～5㎜前後の砂粒を多く含む<br>②内；灰褐色、外；黄茶褐色<br>③良好 | |
| 6 | PL.19上段 | B-3・Ⅱ層 | 弥生壺底部 | 底径4.8cm現状高2.8cm | 外：タテ方向のヘラミガキ、ヨコナデ<br>内：風化が著しい | ①1㎜以下の砂粒を多く含む<br>②黄褐色<br>③良好 | |
| 7 | PL.19上段 | F-4・Ⅱ層 | 土師壺口縁部 | 口径17.4cm | 外：二重口縁の退化したもの、ヨコナデ<br>内：ヘラミガキ、ヨコハケ、ヨコナデ | ①1～2㎜程度の砂粒を含む<br>②黄褐色<br>③良好 | |
| 8 | PL.19上段 | C-1・Ⅰ層 | 須恵器坏・蓋 | 口径不明 | 外：回転ケズリ<br>内：回転ナデ | ①良好1㎜以下の砂粒を含む<br>②青灰色<br>③良好 | |
| 9 | | C-1・Ⅰ層 | 須恵器坏底部 | 底径9.7cm | 外：回転ケズリ、ナデ<br>内：回転ナデ | ①2㎜の砂粒を少量含む<br>②灰白色<br>③良好 | |
| 10 | PL.19上段 | B-5・Ⅱ層 | 青磁碗 | 口径不明 | 外：施釉、鎬蓮弁文<br>内：施釉 | ①密<br>②釉；オリーブ色<br>③良好 | 龍泉窯系13C初～中頃 |
| 11 | PL.19上段 | A-1・Ⅰ層 | 青磁碗底部 | 高台径7.0cm | 外：施釉<br>内：施釉 | ①密<br>②白緑色<br>③良好 | 14C～15C前半 |

| 挿図番号 | 図版番号 | 出土地点 | 器種他 | 法量(cm) | 文様・形態・手法の特徴 | ①胎土②色調③焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 12 | PL.19 上段 | C-1・Ⅰ層 | 須恵器 壺底部 | 底径10.0 cm | 外：回転ケズリ（ロクロの回転方向は右）<br>内：回転ナデ | ①1㎜以下の砂粒を含む<br>②内；明灰白色<br>外；明灰白色、素地；灰茶色<br>③良好 | |
| 13 | | C-1・拡張区崩土 | 陶磁器 碗底部 | 高台径 5.0cm | 削りだし高台<br>外：施釉<br>内：施釉後ロクロの回転により見込みの釉をかきとる | ①1㎜以下の砂粒を含む<br>②内；赤茶色<br>外；暗灰色<br>③良好 | 石見焼 幕末 |
| 14 | | E-4・Ⅰ層 | 陶磁器 不明 底部 | 不明 | 外：回転ケズリ後施釉（ロクロの回転方向は左）<br>内：回転ナデ、見込みは釉をかきとる | ①1㎜以下の砂粒を含む<br>②素地；赤褐色<br>釉；濁緑色<br>③良好 | |
| 15 | PL.19 上段 | A-1・Ⅱ層 | 陶磁器 壺底部 | 底径 7.4cm | 外：施釉<br>内：回転ナデ | ①精良，ほとんど砂粒を含まない<br>②胎土；淡赤褐色<br>釉；淡黄灰色<br>③良好 | 石見焼 |

は胴部に段をもつものである。18は段より上は外反しながら開き、口唇部はさらに外方に傾いている。19は「ハ」の字形の低い高台が底面外縁近くにつくものである。これら2つは同一個体であると思われる。20は体部がまっすぐ伸び、口唇部が尖りぎみにになるシャープなつくりのものである。21、22は器高が低く、低い高台の付くものであり、21は逆凹状を呈する高台が底部のやや内側に付く。口縁部は21、22ともまっすぐ伸び、口唇部はやや尖りぎみにおさめる。23は盤の底部片であり、調整は内面は回転ナデ、底部外面は回転ケズリ、それより上は回転ナデである。胎土はいずれも1㎜以下の砂粒を含み、焼成は15、16、20、21は良好、12、14、17、19はやや甘く、18、22、23は悪く、灰白色を呈す。

**（土器・陶磁器）（第24図―24～33、PL.19、20）**

24は東播系の鉢である。口縁部は逆「く」の字状に肥厚しながら屈曲する。調整は内外共に回転ナデである。胎土は2㎜以下の砂粒を少量含み、焼成は良好である。25、26は白磁の皿である。25は体部はまっすぐ伸び、口縁部端部を外側に引き出すもので、低い削り出し高台をもつ。釉は淡灰白色を呈し、外面は体部上半にかかり、内面は施釉後、見込みの釉をはぎ取る。内面下位に浅い沈線をもつ。26は低い高台をもつもので、内外面全体に灰白色の釉を薄く施した後に高台畳付部分は釉を掻き取っている。16世紀に位置付けられるものである。胎土はいずれも密で、焼成は良好である。27は17世紀の木原唐津の染付の口縁片である。口縁端部は丸くおさめる。透明感のある灰色の釉が薄くかかり、淡緑色の染付が施される。胎土は密で焼成は良好である。28は幕末から明治時代の石見焼の碗の底部であり、削り出し高台をもつ。底部は薄く仕上

第4表　第1次調査出土土器・陶磁器観察表(B−2区)(B=セクションベルト、EW=東西方向、NS=南北方向)

| 挿図番号 | 図版番号 | 出土地点 | 器種他 | 法量(cm) | 文様・形態・手法の特徴 | ①胎土 ②色調 ③焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | | B−2−ハ・1−b住居・床面 | 弥生甕口縁部 | 口径24.0cm | 外：ヨコナデ<br>内：ヨコナデ | ①2㎜程度の砂粒を多く含む<br>②黄茶褐色<br>③良好 | |
| 2 | | B−2−ハ・Ⅱ層 | 弥生甕底部 | 底径 5.0cm | 外：風化著しく不明<br>内：ナデ後ヘラミガキ | ①0.5〜2㎜の白色砂粒を含む<br>②内；淡黒灰褐色、外；明白黄色<br>③良好 | |
| 3 | PL.19下段 | B−2−ロ・NS−B・Ⅱ層 | 弥生高坏脚部 | 脚底径12.0cm | 外：ケズリ後ヨコ方向のミガキ<br>内：ナナメ方向のハケメ後同心円のスタンプ文、ナデ | ①密、0.3㎜程度の砂粒を含む<br>②黒灰色<br>③良好 | |
| 4 | PL.19下段 | 1−a住居址NS−B・Ⅱ−⑥層 | 土師鼓形器台坏・脚部 | 径不明 | 外：ヨコナデ<br>内：坏部ヘラミガキ、脚部ヘラケズリ | ①やや密<br>②淡黄褐色<br>③良好 | |
| 5 | | B−2−ハ・Ⅱ層 | 土師甕口縁部 | 口径16.0cm | 外：ナデ<br>内：ヨコナデ、ヘラケズリ | ①微砂粒を含む<br>②明茶褐色<br>③良好 | |
| 6 | | B−2−ハ・Ⅱ層 | 土師甕口縁部 | 口径不明 | 外：ヨコナデ<br>内：ヨコナデ | ①密<br>②淡黄褐色<br>③良好 | |
| 7 | | B−2−ハ・Ⅱ層 | 土師甕口縁部 | 口径不明 | 外：ヨコナデ<br>内：ヘラケズリ | ①0.5㎜程度の白色砂粒及び金雲母を含む<br>②内；淡黄灰褐色、外；淡黄茶色<br>③良好 | |
| 8 | | B−2−ロ・Ⅱ層 | 土師甕口縁部 | 口径24.0cm | 外：ヨコナデ<br>内：ヘラケズリ | ①密<br>②淡黄灰褐色<br>③良好 | |
| 9 | | B−2−ロ・Ⅱ層 | 土師甕口縁部 | 口径不明 | 外：ナデ<br>内：ヨコナデ | ①密<br>②明黄茶色<br>③良好 | |
| 10 | | B−2−ハ・Ⅱ層 | 土師甕口縁部 | 口径不明 | 外：ナデ<br>内：ヨコナデ、ケズリ | ①金雲母少量及び微石粒を含む<br>②黒灰色<br>③良好 | |
| 11 | | B−2−ロ・Ⅱ層 | 土師甕口縁部 | 口径不明 | 外：ヨコナデ<br>内：ヨコナデ | ①微砂粒を含む<br>②茶色<br>③良好 | |
| 12 | PL.19下段 | B−2−ハ・Ⅱ層 | 須恵器坏・蓋 | つまみ径6.0cm | 外：回転ナデ、つまみは貼り付け<br>内：不明 | ①密<br>②白灰色<br>③やや良好 | |

| 挿図番号 | 図版番号 | 出土地点 | 器種他 | 法量(cm) | 文様・形態・手法の特徴 | ①胎土②色調③焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 13 | | B-2－ハ・Ⅰ層 | 須恵器坏・蓋 | つまみ径6.0cm | 外：ヘラケズリの後回転ナデ、つまみは貼り付け<br>内：回転ナデ | ①ほとんど砂粒を含まない<br>②灰色<br>③良好 | |
| 14 | PL.19下段 | B-2－ニ | 須恵器坏・蓋 | つまみ径8.0cm | 外：ヘラケズリ後ナデ<br>内：指ナデ、つまみは貼り付け | ①密、0.1～0.2mmの砂粒を含む<br>②白灰色<br>③やや良好 | |
| 15 | | B-2－ハ | 須恵器坏・蓋 | 口径14.0cm | 外：回転ナデ<br>内：回転ナデ | ①密、0.3mm程度の砂粒を含む<br>②内；青灰色，外；灰白色<br>③良好 | |
| 16 | | B-2－ロ・Ⅰ層下部 | 須恵器坏・蓋 | 口径18.0cm | 外：ヘラケズリの後回転ナデ<br>内：回転ナデ | ①密<br>②暗灰色<br>③良好 | |
| 17 | | B-2－ハ・Ⅱ層 | 須恵器坏・蓋 | 不明 | 外：ナデ<br>内：ナデ | ①密<br>②淡灰色<br>③やや良好 | |
| 18 | PL.19下段 | 1-b住居址・NS-BⅡ－③層 | 須恵器坏　口縁～体部 | 口径18.0cm | 外：強い回転ナデ<br>内：強い回転ナデ | ①密、白色微砂粒を少量含む<br>②内；灰褐色、外；淡白灰褐色<br>③悪い | 金属写し |
| 19 | PL.19下段 | B-2－ハ・Ⅱ層中部 | 須恵器高台付坏・蓋 | 高台径12.0cm | 外：ヨコナデ<br>内：回転ナデ、不定方向の回転ナデ後ユビナデ | ①密<br>②内；灰褐色、<br>外；淡灰褐色<br>③良好 | 金属写し |
| 20 | PL.19下段 | B-2－ロ・Ⅱ層 | 須恵器坏 | 口径13.0cm | 外：回転ナデ<br>内：回転ナデ | ①1mm以下の砂粒を含む<br>②灰色<br>③良好 | |
| 21 | PL.19下段 | B-2－ハ・Ⅱ層 | 須恵器高台付坏 | 口径10.0cm | 外：強い回転ナデ<br>内：強い回転ナデ | ①0.5mm前後の白色砂粒を含む<br>②灰褐色<br>③良好 | |
| 22 | | B-2－ハ・1-b住居・床面 | 須恵器坏・蓋 | 口径14.0cm | 外：回転ナデ<br>内：回転ナデ | ①密<br>②内；淡黄灰褐色、<br>外；淡灰褐色<br>③悪い | |
| 23 | PL.19下段 | B-2－ハ・NS-B・Ⅱ層 | 須恵器大皿 | 底径20.0cm | 外：ケズリ、回転ナデ<br>内：回転ナデ | ①密<br>②淡灰褐色<br>③悪い | |
| 24 | PL.19下段 | B-2－ロ・北拡張区・Ⅰ層上部 | 須恵質鉢・口縁部 | 口径20.0cm | 外：回転ナデ<br>内：回転ナデ | ①1～2mmの砂粒を含む<br>②灰褐色<br>③良好 | 東播系 |

| 挿図番号 | 図版番号 | 出土地点 | 器種他 | 法量(cm) | 文様・形態・手法の特徴 | ①胎土②色調③焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 25 | PL.19 下段 | B-2－イ・拡張区Ⅰ層 | 白磁皿Ⅲ類 | 高台径 5.0cm | 外：上半に施釉<br>内：施釉、下位に浅い沈線、見込みの釉はぎ取り | ①密<br>②素地；灰白色、釉；淡灰白色<br>③良好 | |
| 26 | | 1-b 住居・EW－B・Ⅰ－②層 | 白磁皿底部 | 高台径 8.0cm | 外：施釉<br>内：施釉 | ①密<br>②素地；淡灰褐色、釉；灰白色③良好 | |
| 27 | | B-2・Ⅰ層 | 陶磁器碗・口縁部 | 口径14.0 cm | 外：染付・施釉<br>内：施釉 | ①密<br>②淡灰色、染付；淡緑色<br>③良好 | |
| 28 | PL.19 下段 | B-2－ロ・表採 | 陶磁器碗底部 | 高台径 8.0cm | 外：削りだし高台、施釉<br>内：施釉 | ①密<br>②素地；淡緑色、釉；緑味を帯びた透明<br>③良好 | |
| 29 | | B-2－ハ・Ⅱ層 | 陶磁器皿底部 | 高台径 8.0cm | 外：染付<br>内：染付 | ①密<br>②青白色，染付；藍色<br>③良好 | |
| 30 | | B-2－ハ・Ⅱ層 | 白磁碗口縁部 | 口径12.0 cm | 外：施釉<br>内：施釉 | ①密<br>②釉；淡灰白色<br>③良好 | |
| 31 | | 1-b 住居・EW－B・Ⅰ－②層 | 白磁碗Ⅴ類・口縁部 | 口径18.0 cm | 外：施釉<br>内：施釉 | ①密<br>②釉；淡灰白色<br>③良好 | |
| 32 | | B-2－ロ・北拡張区・Ⅰ－①層 | 白磁碗口縁部 | 口径22.0 cm | 外：施釉<br>内：施釉 | ①密<br>②釉；淡灰白色<br>③良好 | |
| 33 | | 1-b 住居址・EW－B・Ⅰ－②層 | 陶磁器皿口縁部 | 口径14.0 cm | 外：上半に施釉<br>内：施釉 | ①密<br>②素地；淡灰褐色、釉；淡灰緑色<br>③良好 | 唐津 17C前半 |

げられている。淡緑色の透明感のある釉が内面全体及び外面の高台を除く部分に施されており、一部高台に釉がかかる。胎土は密で、焼成は良好である。29は染付の皿の底部片である。低い高台をもち、淡青色の透明感のある釉が全面に施される。内面には藍色の染付が施されるが、文様は不明である。

30～32は白磁の碗の口縁片と思われるものである。まっすぐ伸びて端部で尖りぎみになる30と、端部上面に面をもつ32と、端部が横に屈曲する31がある。釉は、いずれも淡灰白色で内外面に薄くかかる。33は唐津焼の皿であり、緑色がかった灰色の透明感のある釉が内面と外面の口縁部から体部の一部にかかる。17世紀前半に位置付けられる。いずれも胎土は密で、焼成は良好である。

〔考察〕

以上の記載で明らかにしえたことは次下の諸点である。

①1–b 号住居址は奈良時代後半頃の小規模なかまどをもつ方形ないし長方形住居址である。

②1–a 号住居址は、規模・形状等不明であるが、1–b 号住居址に先行し、弥生時代末～古墳時代初頭のものと思われる。

③石墨状遺構は、1号住居址より後に構築されている。

④住居址外におけるピットや石囲い炉状遺構は、それらの位置から判断して1–b 号住居址に伴うものではなく、出土遺物に中・近世の陶磁器片があること等から、中・近世のものであると思われる。また、1–b 号住居址南西部の大きなピットも性格は不明であるが、中・近世に堀り込まれた可能性が強い。

（増野晋次、福間直美）

## (2)第2号住居址（第25図、PL.13～15上）

〔検出状況〕

この住居址は、C–4区の北東隅でその一部が検出されて所在が明確となった。位置的にはC–4区の杭を中心に半径4 m の範囲に納まる。床面の状況は、北東から東部分が不明瞭であり、壁も南側と東・西側で高さ20㎝程度残っているのみであり、全体として遺存状態は不良である。

住居址の埋土の層序は次のとおりである。

Ⅰ層：上部　淡黒色粘質土層（耕作土）

　　下部　明黄褐色土層（床土）

Ⅱ層：上部　淡灰褐色土層（旧耕作土）、赤橙褐色土層（旧床土）

　　下部　暗黒褐色土層（遺物包含層）

Ⅳ層：　　暗黄褐色砂質土層（地山）

Ⅱ層上部からは須恵器、土師器、弥生土器、縄文土器、中・近世以降の陶磁器の破片が出土した。また、住居址中央の床面直上からは底部を欠失した大型の土師器の甕(26図－17)と複合口縁の甕の破片が検出されている。Ⅰ層でも須恵器の坏の蓋片が採集されている。

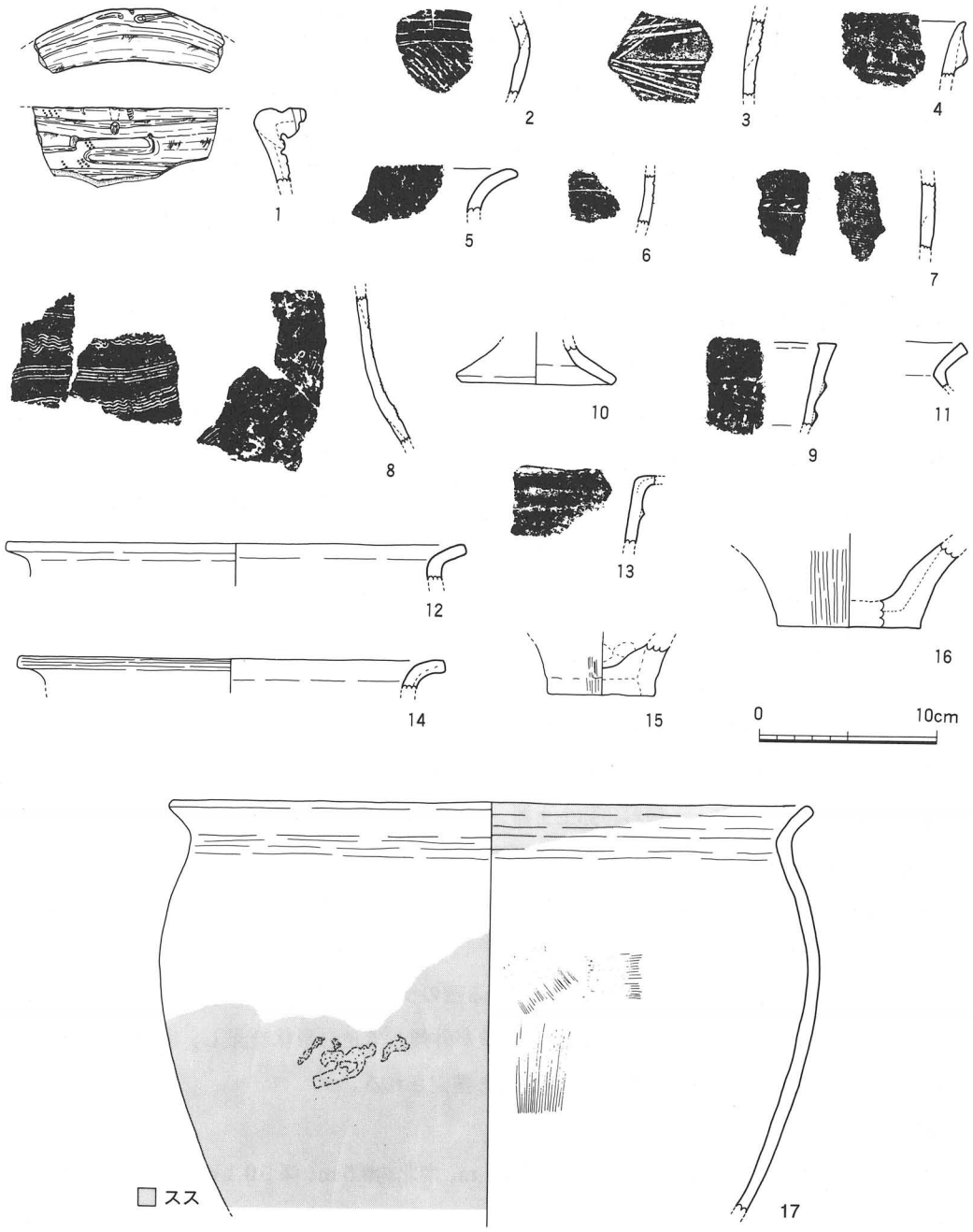
〔平面・断面形〕

平面形は必ずしも明瞭ではないが、残っている壁のラインから不整六角形と判断された。一辺の長さは0.6～1.0 m のものである。断面形は壁が外傾して逆台形状を呈し、床は多少の凹凸があるが全体的には平坦である。床面積は約8㎡と推定される。

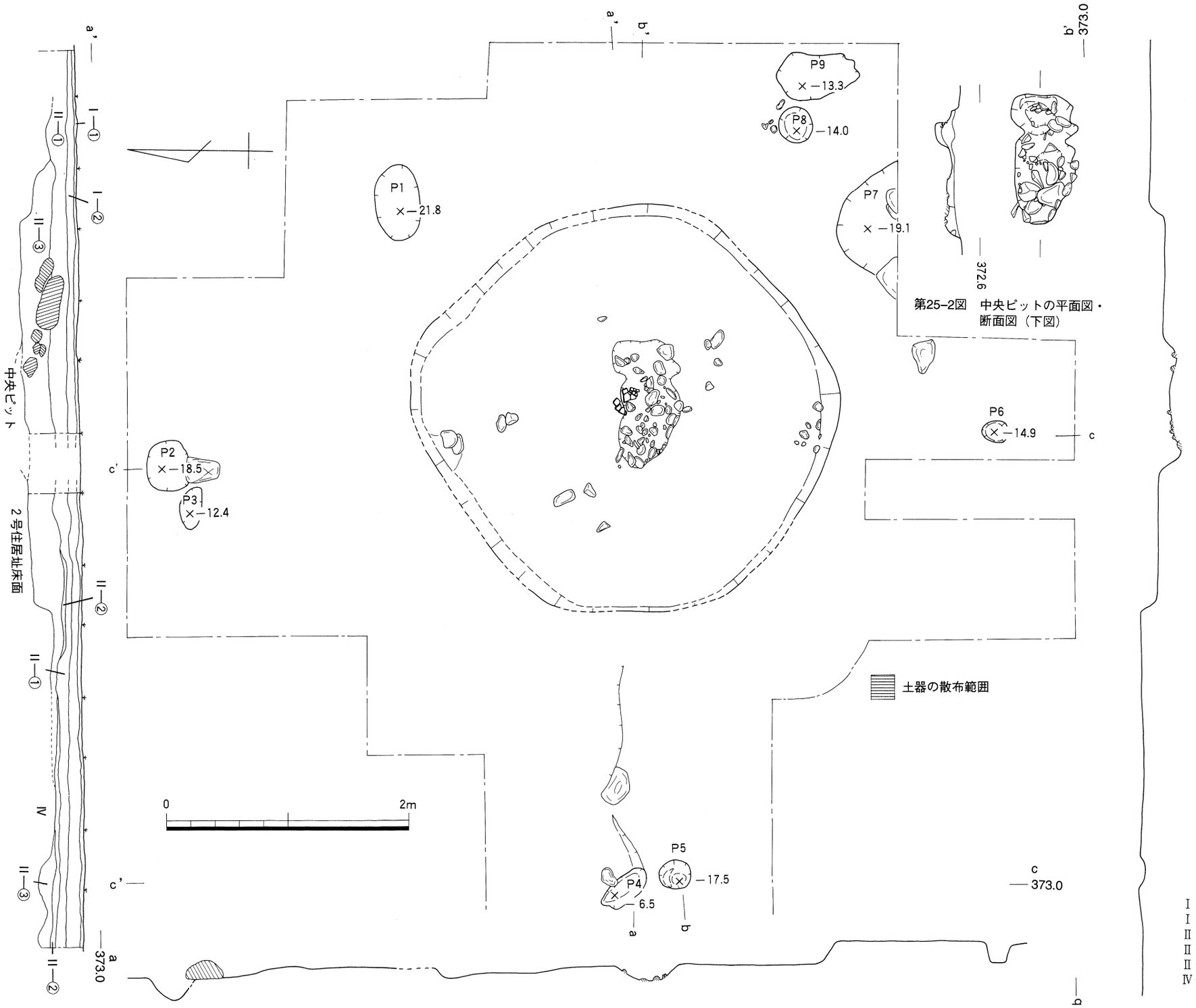
〔柱穴・炉〕

住居址の内には柱穴はなく、中央部に東西1.1 m、南北約0.5 m、深さ0.1 m 程度の浅い皿状ピットがある。その中には炭化物が残っていた。なお、ピットの底部には円礫が詰められたような状態で認められたが、これは住居址が掘り込まれたⅣ層（地山）に含まれる礫群と考えられる。

住居址の外側では数個の土拡とピットが検出されている。しかし住居址に伴うものかどうかは不明。




第26図　C–4区出土土器実測図（その1) (第5表参照)




第25—2図　中央ピットの平面図・断面図（下図）

Ⅰ(Ⅰ)—①　耕作土
Ⅰ(Ⅰ)—②　明黄褐色土層（床土）
Ⅱ(Ⅱ)—①　淡灰褐色土層（旧耕作土）
Ⅱ(Ⅱ)—②　赤橙褐色土層（旧床土）
Ⅱ(Ⅱ)—③　暗黒褐色土層
Ⅳ(Ⅳ)　暗黄褐色砂質土層（地山）

第25—1図　第2号住居址平面図・断面図

〔出土遺物〕

（縄文土器）（第26図－1～4）

1は後期の縁帯文土器の口縁部片である。縁帯は、端部を逆「L」の字形に引き出し、その下に粘土紐を付加してつくられている。外面には棒状工具による直線文様が施されており、「己」の字状の文様は向って左側から右側にかけて描かれている。縁帯がもっとも太くなる部分で縦方向に2個の孔を穿とうとしているが、貫通しているのは1個だけである。調整は内外面共にナデで、外面には貝殻によるとみられる擬似縄文の施されているところも認められるが、風化のため明瞭ではない。胎土は3㎜以下の砂粒を多く含み、焼成は良好。2は深鉢もしくは浅鉢の胴部片と思われる。外面には3本のヘラ描きの直線文を巡らし、その下方に傾向の細目の縄文が施されている。内面の調整はナデ。胎土は2㎜以下の砂粒を含み、焼成は、あまり良くない。

3は晩期の深鉢の胴部片である。器形はやや外反すると思われる。外面には、ヘラ状工具による直線文が施されている。4は同じく晩期の深鉢の口縁部片である。端部下方に断面三角形の突帯を巡らす。突帯頂部には刻目を施す。調整は外面は風化が著しく不明であるが、内面はナデている。胎土は1㎜以下の砂粒を含み、焼成は良好である。

（弥生土器）（第26図－5～9、12～16）

5～7は前期の甕の破片である。5は如意状口縁に似た形状を呈する口縁部片である。調整は、口縁部内外面共にヨコナデ、胴部外面には、縦方向のハケメが施されている。胎土には3㎜以下の砂粒を含み、焼成は良好である。

6、7は、胴部の破片である。6は外面ハケ調整の上に2条のヘラ描き直線文を巡らせる。7は外面には縦～横方向のハケメ、その後に2条のヘラ描き直線文を巡らせ、その間に列点文を施す。内面は横方向のハケ調整である。いずれも2㎜以下の砂粒を含み、焼成は良好である。

8、9は中期の土器片である。8は壷の頚部から肩部にかけての破片である。内傾する肩部から頚部が直線的に立ち上がる。調整は、外面が縦方向のハケを施した後に5条1単位の櫛状工具による平行直線文と波状文を交互に巡らしている。内面は、縦方向のハケ後にナデを施している。胎土は2㎜以下の砂粒を含み、焼成は良好で、色調は暗黄橙色である。9は直口壷の口縁部である。口縁端部は拡張されて平坦面をなし、外面には断面三角形で、刻目の入った突帯を巡らす。調整は外面がヨコナデ、内面は風化が著しく不明である。胎土は2㎜以下の砂粒を含み、焼成は良好である。

12～14は甕で、口縁部が逆「L」の字状に屈曲している。13は口縁よりやや下方に断面三角形の貼り付け突帯を巡らしている。調整は13～14いずれも外面ヨコナデ。内面は風化が著しく不明である。胎土には1㎜以下の砂粒を含み、焼成は良好。

15～16は壷もしくは甕の底部である。両者共に平底で、外面には縦方向のハケ調整を行い、内面はナデている。焼成は良好。

第5表　第1次調査出土土器・陶磁器観察表（C–4区その1）

| 挿図番号 | 図版番号 | 出土地点 | 器種他 | 法量(cm) | 文様・形態・手法の特徴 | ①胎土 ②色調 ③焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | | C–1・表採 | 縄文鉢口縁部 | 口径33.0cm | 外：棒状工具による直線文、ナデ、縄文<br>内：ナデ | ①1mm以下の砂粒を多く含む<br>②内；暗黄橙色<br>外；淡灰褐色<br>③良好 | |
| 2 | | C–4－ニ・表採 | 縄文鉢口縁部 | 不明 | 外：3条のヘラ描き直線文、ナナメ方向の条痕<br>内：ナデ | ①1mm程度の砂粒を多く含む<br>②暗褐色<br>③良好 | |
| 3 | | C－4・東側・住居址外 | 縄文鉢胴部 | 不明 | 外：ヘラ状工具による沈線文、ナデ又はミガキ<br>内：ヨコ方向のナデ又はミガキ、外傾接合 | ①1mm程度の細砂を少量含む、金雲母を含む<br>②褐色<br>③良好 | |
| 4 | | C–4・EW–B（住居址内） | 縄文鉢口縁部 | 口径不明 | 外：口縁下刻み目突帯<br>内：ナデ | ①微砂粒及び金雲母を含む<br>②茶褐色<br>③良好 | |
| 5 | | C–4－ロ・LT・WE–B・Ⅱ層最上部 | 弥生甕口縁部 | 口径28.0cm | 外：ヨコナデ、胴部はタテハケ<br>内：ヨコナデ | ①0.5～4cm程度の砂粒を含む<br>②内；淡黄茶褐色<br>外；面茶褐色<br>③良好 | |
| 6 | | C－4・東側・住居址外・Ⅱ層 | 弥生甕上胴部 | 不明 | 外：ナナメハケ、二条のヘラ描き直線文<br>内：ナデ | ①1～2mm程度の砂粒を含む<br>②淡黄褐色<br>③良好 | |
| 7 | | C–4・表採 | 弥生甕上胴部 | 不明 | 外：二条の沈線とその間に列点文タテハケ<br>内：ヨコ～ナナメハケ、黒斑あり | ①2mm以下の砂粒を含む<br>②淡黄褐色<br>③良好 | |
| 8 | | C–4・EW–B・住居址内・Ⅱ－③層 | 弥生長頸壺 | 不明 | 外：タテ方向のハケの上にくし描き平行線文、波状文<br>内：タテ方向のハケメ後ナデ | ①1～3mm程度の砂粒を多く含む<br>②暗黄橙色<br>③良好 | |
| 9 | | C－4・LT・NS–BⅡ層上部 | 弥生直口壺口縁部 | 口径不明 | 外：2条の断面三角形の突帯に刻み目、ヨコナデ<br>内：風化著しく不明 | ①1～2mm程度の砂粒を含む<br>②淡黄灰色（他と違い色が白い）<br>③良好 | |
| 10 | | C–4－イ・LT・EW–B・Ⅱ層中部 | 土師高坏脚部 | 脚径 9.0cm | 外：ナデ<br>内：ナデ | ①密<br>②淡黄白色<br>③良好 | |

| 挿図番号 | 図版番号 | 出土地点 | 器種他 | 法量(cm) | 文様・形態・手法の特徴 | ①胎土②色調③焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 11 | | C-4－イ・LT・EW-B・Ⅰ層最下部 | 土師甕口縁部 | 口径不明 | 外：風化のため不明<br>内：風化のため不明 | ①密、微砂粒を含む<br>②内；明黄白色、外；明黄茶褐色<br>③良好 | |
| 12 | | C-4－ロ・LT・NS-BⅡ層中部 | 土師甕口縁部 | 口径不明 | 外：ヨコナデ<br>内：風化のため不明 | ①1～3㎜程度の石英及び砂粒をやや多量に含む<br>②淡白黄褐色<br>③良好 | |
| 13 | | C-4・NS-B・交差部・Ⅱ－①層 | 弥生甕口縁部 | 口径34.0cm | 外：断面三角形の突帯、ヨコナデ<br>内：風化著しく不明 | ①1～3㎜程度の砂粒を含む<br>②内；白橙色、外；淡黄橙色<br>③良好 | |
| 14 | | C-4－イ・Ⅱ層中部 | 土師甕口縁部 | 口径不明 | 外：ヨコナデ<br>内：ヨコナデ | ①1～2㎜程度の石英を少量含む<br>②淡黄褐色<br>③良好 | |
| 15 | | C-4・Ⅱ層 | 弥生甕底部 | 底径 6.0cm | 外：タテ方向のハケメ（風化著しい）<br>内：ナデ，指圧痕か？ | ①1～3㎜前後の砂粒及び石英を含む<br>②内；白灰褐色、外；淡白橙茶色<br>③良好 | |
| 16 | | D-4－ニ・N-B（住居址内壁のわき）南西側 | 弥生甕底部 | 底径 8.0cm | 外：タテ方向のハケメ<br>内：ナデ | ①1～4㎜前後の石英及び白色砂粒を含む<br>②内；淡灰褐色、外；明白黄色<br>③良好 | |
| 17 | PL 21 上段 | C-4－イ・床面土器群 | 土師甕 | 口径36.0cm | 外：ヨコナデ、スス付着<br>内：ナデ | ①0.5～3㎜程度の砂粒を含む<br>②内；黄白褐色、側面一部；茶褐色、外口縁～頸部；茶褐色、以下灰色<br>③良好 | |

**（土師器）（第26図－10、11、17、第27図－1～14）**

第26図－11、17と第27図－1～13は、甕の破片である。いずれも弥生時代末期～古墳時代初期に位置付けられるものと考えられる。第26図－11と第27図-8、9は、端部内面をわずかに上方に跳ね上げるのが特徴である。第26図－17は、床面出土の大型の甕形土器で胴部下半より底部を欠失するが、器形の全容を伺いうる貴重な資料である。口縁端部は平坦に仕上げられ、胴部上半に最大径がある。調整は口縁部が内外面共にヨコナデ、胴部はナデである。

第27図－1は第26図－17と共に床面から検出されたものである。二重口縁をもついわゆる山陰系の甕である。口唇部はやや厚目で、端部を外方に折り曲げ、その上面を平坦に仕上げている。

口縁下部の稜は斜め下方に鋭く突出している。肩部には列点文を施す。調整は口縁部および胴部外面がヨコナデ、胴部内面には横方向のヘラケズリが施される。胎土は1㎜以下の砂粒を多く含み、焼成は良好である。

2～5は口縁端部を外方に引き出したものである。これらの中には端部頂面に凹をもつもの(2)ともたないもの(3～5)がある。調整はいずれも内外面共にヨコナデである。6は口縁部をやや丸く肥厚させている。7は口縁端部に面をもつ。10は口縁端部が尖るものであるが、口縁部内面下方にまでヘラケズリが達する珍しい例である。11は甕の頸部で「く」の字状に屈折する。以上の土器片の胎土は、いずれも1㎜以下の砂粒を含み、焼成は良好である。12は胴部にあまり張りがなく、口縁端部を丸くおさめる。調整は外面および口縁内面がヨコナデ、胴部内面は斜め方向のヘラケズリである。胎土は1㎜以下の砂粒を含み、焼成は良好である。13は甕の上胴部である。胴部がかなり張り、器厚もこれまでの例と比べて厚い。調整は外面が斜め方向のハケ、内面は斜め方向のヘラケズリである。胎土には4㎜以下の砂粒を多く含み、焼成は良好である。第26図－10、第27図－14は、高坏の脚裾部と坏・脚部の境界部の破片である。いずれも大きく開く坏部と開き気味の脚筒部から裾部が傘状に広がるタイプと思われる。坏・脚部の接合方法は不明。調整は外面はヨコナデ、脚筒部内面はケズリ。胎土は1㎜以下の砂粒を少量含み、焼成は良好である。

**(須恵器)(第27図－15～17)**

15、16は蓋坏の蓋の破片である。15は天井部で輪状つまみをもつ。つまみは貼り付けである。

16は口縁部で端部が下方に垂下するものである。17は蓋坏の坏部片。低い高台が底部の外縁上にある。調整は15、16が内外面共に回転ナデ、17は外側が回転ヘラケズリ、それ以外の部分は回転ナデである。胎土は16、17が砂粒をほとんど含まない精良質、15は1㎜以下の砂粒を含み、焼成は良好。

**(陶磁器)(第27図－18～26)**

18、19は東播系の鉢の口縁部である。いずれも逆「く」の字状に屈曲し肥厚するもので、18は屈曲度は小さく、19は大きい。調整はいずれも内外面共に回転ナデである。胎土は1㎜以下の砂粒を含み、焼成は良好である。20～26は近世以降の陶磁器片である。20、21は伊万里焼の碗と思われる。体部～口縁部にかけて内湾しながら立ち上がる。胎土は灰白色を呈し、草丈と思われる文様が施され、その上に透明釉が薄くかかる。22～24は幕末期の碗の底部である。いずれも低い削り出し高台を伴う。23、24は石見焼の破片。22は高台～体部の下方を除いて、内外面共に透明感のある緑色がかった釉が薄くかかっている。23も同様に高台～体部の下方を除く内外面に透明感のある黄緑がかった釉が薄くかかっている。24も透明感のある釉が内面に高台内・畳付を除いて、薄くかかる。内面には鉄釉によるこげ茶色の文様があるが、文様は不明である。

25、26は石見焼の鉢である。25は灰色の胎土に灰緑色の釉が薄くかかり、26は黄灰色の胎土に黄褐色の釉が薄くかかっている。25、26共玉縁をもつ。両者いずれも胎土精良、焼成良好で